昭和59年５月15日号（毎月２回１日、15日発行）第27巻・第10号　通巻607号　昭和54年６月２日第三種郵便物認可

今日のソ連邦

1984
10
5.15.



ソ連共産党中央委員会総会、第11次ソ連最高会議第１会期資料

（本誌２—５ページ、別冊付録参照）

第10号　1984年５月15日発行

本誌の記事と写真はノーボスチ通信の提供によるものです。

今日のソ連邦



★数字は関連記事のページ

編集　在日ソ連大使館広報部　電話03(447)3536(代表)
〒141　東京都品川区東五反田３－９－13
振替口座　東京９－122358（加入者名＝ソ連大使館広報部）

発行所　(株)新時代社　電話03(293)4881
〒101　東京都千代田区神田神保町１－44
振替口座　東京０－13581（加入者名＝新時代社）

本誌の定期購読をご希望の方は、１部半年1800円、１年3000円、２年5000円の誌代（送料込み）を添えて、上記のいずれかにお申し込み下さい。多部数の場合の誌代は、お問い合わせを。

ソ連共産党中央委員会総会と第11次ソ連最高会議第1会期の開催



ソ連共産党中央委員会書記長、ソ連最高会議幹部会議長K・U・チェルネンコ

一九八四年4月10日、ソ連共産党中央委員会定期総会が開催された。コンスタンチン・チェルネンコ・ソ連共産党中央委員会書記長が総会で長大な演説を行った。

一九八四年4月11、12の両日モスクワの大クレムリン宮殿で第11次ソ連最高会議第1会期が開かれた。最高会議はソ連共産党中央委員会書記長コンスタンチン・チェルネンコ代議員を全会一致でソ連最高会議幹部会議長に選出した。同様にソ連最高会議幹部会と両院議長（連邦会議――レフ・トルクノフ、民族会議――アウグスト・ボス）を選出した。

コンスタンチン・チェルネンコの提案により、最高会議はソ連閣僚会議議長にニコライ・チーホノフを任命した。ニコライ・チーホノフによって提案された政府のメンバーが承認され、アレクセイ・シコリニコフを長とするソ連人民監督委員会およびウラジーミル・テレビロフを長官とするソ連最高裁判所が選出され、ソ連検事総長にアレクサンドル・クレンコフが任命された。

最高会議は学校改革の問題を審議し、「普通教育学校と職業学校の改革の基本方向について」の決定を採択した。

（党中央委総会とソ連最高会議の資料は本号付録にも収録。なお、学校改革についての資料は次号付録に掲載の予定）

ソ連共産党中央委総会でのコンスタンチン・チェルネンコの演説要旨

（一九八四年4月10日）

今年の3月に実施されたソ連最高会議選挙の結果は、勤労者がソ連共産党の政治路線を完全に承認し全面的に支持していることを示した。ソビエト政権の権威の疑う余地のない増大が、一億八〇〇〇万人を超える有権者の意見によって確認された。国民が表明した信頼にもとづいて、われわれの活動を自信をもって続けることができる。

大衆の積極性を高めるための余力をもっとよく利用するにはどうしたらよいか？　それらの余力は社会主義的民主主義、社会の政治システム全体の一層の改善の中にひそんでいるのである。そして何よりもまず、ソ連の政治的基礎、社会主義建設の強力な道具であるソビエトの活動の改善の中にひそんでいるのである。

10月革命（一九一七年）の直後にソビエト国家の創始者レーニンが、ソビエトを勤労者のために活動するだけでなく、勤労者を通じても活動するような国家指導機関に変えるという課題を立てたことを指摘しておこう。この課題は基本的に解決された。労働者、農民、知識人、大小すべての民族の勤労者を代表する二三〇万人のソビエト代議員、数千万の活動家が国政を運営している。つねに――ソ連新憲法採択後は特にそうだが――各級ソビエトの権限が拡大されている。

しかしながら、諸ソビエトがもつ大きな潜在力は相変わらず十分に利用されていない。

憲法に明記されたソビエトの完全な権力が、つねにあらゆる場所で、その活動の内容にも、スタイルにも現われるようにするために、われわれは努力しなければならない。

あらゆるレベルの経営指導者の活動をきびしく客観的に評価することをソビエトが活動の通則とするなら、わが国の経済は少なからず利益を得るだろう。われわれはいま、国民経済の管理システムの前面的な改善に着手し、経済活動の新しい形態と構造を探している。しかし、新しいものの探求は必要だが、当然ながらそれはわれわれを現在の管理制度、なによりもまずソビエト諸機関のより効果的な利用から遠ざけてはならない。

われわれの目的は、生産と管理で働く働き手の最適な比率を達成することだ。行政機関の肥大化の原因を排除し、管理業務の組織と技術装備を不断に改良することが必要だ。そして、もちろんのこと、人々が、比喩的に言えば、デスクから工作機械への移動に自ら関心をもつような条件をつくり出すことが必要だ。

わが国のような国では、当然のことながら、民族間関係の改善の課題を日程からはずすことはできない。民族的不和の根絶、諸民族の兄弟的友情の確立で偉大な役割を果たしたソビエトは、発達した社会主義の条件下で存在している形においても、民族問題の内容を真剣に究明しなければならない。

ソ連最高会議をはじめとするわれわれのソビエトの構造においても、その全活動においても、国際的なものと民族的なものの統一が目に見える形で具現化されている。それはソ連の強化に非常に役立ってきたし、今も役立っている。それと同時にわれわれは、わが国に形成されている民族間関係を何か硬直した不変のもの、新しい状況と時代の影響を受けないものとはみなしていない。それはつまり、現在の、その有効性を証明した組織形態と活動方法を発展させながら、その他の、諸民族の繁栄と接近を促進するものをもたえず求めていく必要がある、ということだ。

われわれは、現代の国際情勢がいかに複雑であるかをよく知っている。ソ連共産党とソビエト国家は、核戦争を防止し、世界平和を守り、強化するために多大な努力を払っている。われわれは、世界政治の緊張を取り除き、軍拡競争を抑止し、国の安全を確実に保障することを一貫して、率先してめざしている。社会主義の国際的地位や、解放運動との連帯の強化が、われわれの日常的配慮の圏内に含まれている。

最高会議両院の外務委員会は、外部世界とわれわれとの交流を発展させるため、大いに活動している。しかしこの責任ある活動に積極的に加わっているのは、目下のところ比較的狭い範囲の代議員たちである。これらの委員会に加っている代議員の活動枠を広げる必要性が熟している。

わが祖国の防衛力のいっそうの強化をめざすソビエトの活動について、特に述べておきたい。現代の情勢は、国の安全を保障し、ソ連人の平和な労働を確実に擁護するための不断の全面的な努力をわれわれに要求している。ソビエトはこの課題の解決にも貢献しなければならない。

いまソ連人の注目の的となっているのは学校改革である。これは大きな一般政治的意義をもつ問題であり、実を言えばそれが理由でわれわれはこの問題を中央委員会にかけることになった。

ソビエト社会がわれわれの偉大な目標に向かって着実に前進するためには、おのおのの新しい世代がより高いレベルの教育、一般教養、職業技能、市民的積極性へと高まらなければならない。これが社会進歩の法則であると言える。

科学技術改革、情報の激増といった中にあってこの法則は、学んでいる者に対しても、教えている者に対しても――一般の教育者から教育相にいたるまで――空前の高い要求を提起している。改革は、それらの要求の遂行に欠かせないすべての前提条件をつくり出すことを使命としている。そして言うまでもなく、教育分野の指導部も含め、この分野にある欠陥をなくすことをも使命としている。学校の改革作業のすべてに強固な物的基盤、組織的基盤を与える必要がある。9月1日の新学年から、教師とその他の国民教育の働き手の賃金の平均30―35％の段階的引き上げが開始される。この措置で六〇〇万人が恩恵をこうむる。

（演説の全文は本号付録に収録）

第11次ソ連最高会議第1会期

ソ連最高会議幹部会議長選出に関するミハイル・ゴルバチョフ代議員の演説

第11次ソ連最高会議第1会期第1日目の4月11日、連邦会議と民族会議の初の合同会議が開かれ、ソ連最高会議幹部会議長選出の議題を審議した。発言を許されたソ連共産党中央委政治局員・書記ミハイル・ゴルバチョフ代議員は次のように述べた。

代議員の皆さん！

ソ連共産党中央委員会の委任を受け、最高会議党グループ、連邦会議・民族会議両院の長老会議に支持された、ソ連共産党中央委員会書記長チェルネンコ、コンスタンチン・ウスチノビチ同志のソビエト社会主義共和国連邦最高会議幹部会議長への選出に関する提案を上程する。

この問題は昨日開かれたソ連共産党中央委員会総会で検討された。最近の党建設および国家建設の経験に立脚し、ソビエト社会と国家の高度の利益に基づいて、中央委総会は満場一致で、ソ連共産党中央委員会書記長コンスタンチン・ウスチノビチ・チェルネンコが同時にソ連最高会議幹部会議長のポストにつくことが必要であると認めた。

このような決定は、ソ連憲法に明記されているソ連社会における共産党の指導的役割に、政治システムのすべての環の活動、まず第一にソビエト国家の活動の主要方向を党が定めてきたし、定めていることに、しっかりと結びついている。国家的活動における党の政策の具体化が、社会・経済的課題の成功的解決、発達した社会主義の改善、あらゆる段階の人民代議員ソビエトの役割と権威の向上、社会主義的民主主義の拡大・深化の最も重要な条件であったし、今もそうであることは、多年にわたる実践がはっきり証明している。

ソ連共産党中央委員会書記長によるソ連最高会議幹部会議長の諸機能の同時遂行は、ソ連の対外政策の実施にとって大きな意義を持つ。

ソ連共産党中央委員会書記長が国際舞台において高度の国家的利害を代表することは、ソ連の対外政策が、ソ連共産党第25、26回大会とその後の党中央委総会で作成された平和綱領にその根本原則が定式化されている共産党の方針と不可分であるという事実を、はっきり示すものである。

共産党員とすべてのソ連国民はコンスタンチン・ウスチノビチ・チェルネンコを、共産主義と平和をめざす不屈の闘士、傑出した政治的・組織者的能力と大きな生活体験を持つ経験豊かな指導者＝レーニン主義者として知っている。

多年にわたってわが党の政治路線の作成・実現に直接参加しながら、コンスタンチン・ウスチノビチ・チェルネンコは、わが祖国の経済力と防衛力の増大、国民の福祉の向上にすべての力と知識を捧げている。自己の経験からソ連最高会議の活動範囲、代議員の仕事、ソビエト建設の特徴、立法の発展の特徴を彼はよく知っている。社会主義的民主主義の理論と実践の研究、国家機構の改善、党機関およびソビエト機関と勤労者大衆との結びつきの強化に彼は著しい貢献をしている。

コンスタンチン・ウスチノビチ・チェルネンコはソ連最高会議連邦会議外務委員長を務めたが、同外務委員会は彼の指導の下にわが党と国家の対外政策を積極的に実行した。国際緊張を緩和し、核戦争の脅威から人類を免れさせ、全世界の平和を守るためのソ連共産党の巨大な仕事は、最も直接的な形で彼の活動と結びついている。

ソ連共産党中央委員会2月総会および昨日開催された総会におけるコンスタンチン・ウスチノビチ・チェルネンコの演説、モスクワ市クイビシェフ区の有権者集会での演説はわが国の社会・経済的および政治的発展、国際情勢の健全化の広範で建設的な計画を内容としている。ソ連国民、社会主義兄弟諸国の国民はこの計画を全面的に支持している。この計画は世界の世論の高い評価を受けている。

すべてこれは、代議員の皆さん、ソ連共産党中央委員会書記長チェルネンコ、コンスタンチン・ウスチノビチ同志のソ連最高会議幹部会議長への選出が、共同の事業にとって、今われわれの前にある巨大な課題の解決にとって大きく役立ち、ソ連共産党とソビエト国家の内外政策の首尾よい実現を可能にするであろうことを強く確信させるものである。（このあと、ソ連最高会議は全会一致でチェルネンコ・ソ連共産党中央委員会書記長をソ連最高会議幹部会議長に選出した）。

コンスタンチン・チェルネンコのソ連最高会議幹部会議長就任の辞

親愛な同志の皆さん！

われわれに寄せられた高い信頼に対し、ソ連共産党中央委員会と代議員の皆さん全員に心からお礼を申しあげると言えば、ただいま選出されたソ連最高会議幹部会のメンバー全体の感情を表明することになると思う。

この信頼がわれわれに、愛する党、ソ連国民、わが社会主義祖国への奉仕に自分のすべての力、知識、経験を捧げる義務を課するものであることを、われわれはよく理解している。

ソ連最高会議幹部会議長への選出という高い名誉を与えてくださったことにたいし、みなさんに深い感謝の念を表明させていただきたい。現時点でのこの職務の遂行に結びつく絶大な責任を、私は十分に自覚している。いまや、経済の効率を大幅に高め、その基盤の上ですべてのソ連人の生活条件を一貫して改善していくための大規模な、綿密に考えぬかれた決定と、大きな組織活動が、過去のいかなる時にもまして必要とされている。

対外政策は、理性的な協定達成への道を探求する上での恒常的な積極性、断固たる態度、一貫性を要求している。

この政策は、国際緊張を克服し、国際舞台で安全とわれわれの国家的利益を保障し、全世界の平和を守りぬくことをめざしたものである。

発達した社会主義を改善するためのわれわれのすべての仕事で、ソ連最高会議とその幹部会、常任委員会が果たすべき役割は大きい。これらの機関は経済および社会・文化建設、立法の発展、対外政策の分野で大きな活動を行っている。

それらの活動のなかでいま特別の地位を占めるべきものは、あらゆる段階のソビエトを指導し、採択される決定の遂行状況や管理機関の活動のチェックを強化する仕事であり、規律、組織性、責任の向上をめざす闘争であると思う。ここには各代議員の積極性とイニシアチブを高めるための広い余地がある。

国民の選良は国民の経験、英知、創造のエネルギーを蓄積する。われわれの最高権力機関の活動の脈拍、その実効性と効率は、彼ら全体の、そして個別の貢献に左右される。

というわけで、この脈拍が規則正しくはっきりしたものとなり、わが国の内部の発展、平和と国際安全をめざす闘争の順調な解決を保障するものとなるよう、ひとつみんなで一緒に働こうではないか。

最近、大衆の労働意欲と社会的積極性が目立って高まった。これは経済と思想・政治教育の分野でわれわれが展開した活動の直接の成果である。

ソビエトの活動のすべての側面を改善することや、社会主義的民主主義、われわれの社会の政治システム全体を一層改善する活動は、この目的に積極的に奉仕しなければならない。

昨日の中央委総会で指摘されたように、ソビエトの活動にはまだ多くの未利用の余力がある。これを活用するために、できる限りの努力を傾けなければならない。

われわれの経済運営の仕事で、経済管理システムを改善する上で、ソビエトが演じることができ、また演じなければならない役割に、特に注意を向ける必要がある。

ソビエトがその監督の機能をもっと積極的に果たし、管轄下の組織や公務員にもっときびしい要求を出すようにすることが重要である。

ソビエトの立法活動も、行政活動も、監査活動も、大衆のエネルギーの組織と発展に役立つものでなければならない。これは、勤労者の現実の利益や要求に対するもっと大きな注意をも、残念ながらソビエトの活動の中にまだ見られる形式主義、官僚主義の要素の一貫した根絶をも要求する。

もしもわれわれが、ソ連共産党第26回大会とその後の中央委総会（複数）の方針にのっとり、近い将来に次のような基本課題を自らに提起するならば、それは正しいこととなるだろうと思う。

それは、ソビエトの憲法上の権利が完全に行使されるように、われわれの人民権力機関が国民経済、社会や国家のすべての活動の管理への勤労者の最も積極的な、自覚した、関心をもった参加を実際に保障するように、ねばり強く努力するという課題である。

最後に、同志の皆さん、高い信頼にもう一度感謝し、今後党と全ソ連国民が経済の発展、文化とソ連人の福祉の向上、地球上の全般的平和の強化で新たな成功を収めるであろうとの確信を表明させていただきたい。

プラウダ紙の質問に対するコンスタンチン・チェルネンコの回答

（一九八四年4月9日）

問い　現時点での世界の情勢をどう評価されるか？　特に米国の政策に前向きの変化のなんらかの兆候はないだろうか？

答え　残念ながら世界の情勢は好転していない。それは相変わらずきわめて危険なものとなっている。その理由は、米政府が相変わらず軍事力に頼り、軍事的優位の達成、自分の秩序を他国民に押しつけることをあてこんでいるところにある。最近のレーガン大統領のジョージタウン大学での演説が、これを改めて裏書きした。

ワシントンから時として平和愛好的な修辞が聞こえてくることはあるが、どんなに望んでもそのかげにこれらの言辞を実際の行動で補強しようとする用意を示すごくわずかな兆候も見いだすことはできない。言い換えると、新しい言辞を持ち出すことは新しい政策を意味していない。

核軍拡競争の停止といった基本問題をとりあげて見よう。

もしかしたらホワイトハウスはこの競争の危険性と見通しのなさを悟り、ここで自制を発揮するようになったのだろうか？　そんなことは全くない。逆に米国は、次から次へと核兵器の開発と展開の新計画の実現を強行している。西欧でも米国の核ミサイルの配備が続行されている。これはすべて、形成された力の均衡をなんとか破壊するために行われている。

このような行動は軍拡競争停止の課題とはどうしても両立しない。米国が核軍備制限・削減のプロセスそのものを故意にぶちこわし、戦略軍備交渉をも欧州核軍備交渉をも決裂させたのは、決して偶然ではない。

米側とのわれわれの接触もまた、これら基本問題で米国の立場にはいかなる前向きの変化も生じていないことを示している。

ジュネーブ交渉の決裂をもたらした自己のこれまでの方針に固執し、自国のミサイルの西欧配備を続行しながら、ワシントンは交渉再開の用意があると言いふらしている。しかし、何についての交渉なのか、とたずねたい。ソ連とその同盟諸国に照準を定めたどのようなミサイルをどれだけ米国は欧州に配備できるかという点についての交渉なのか？　われわれはそのような交渉には応じない。

対話の効用、交渉の効用をわれわれに説得する必要はない。米国および米国と行動を共にする他のＮＡＴＯ諸国が米国の新型ミサイルの西欧配備開始以前に存在していた状況を回復する措置をとりさえするなら、ソ連側のせいで事が運ばぬということはないはずだ。これが交渉への現実的な道なのである。

問い　軍備制限と軍縮のその他の分野での事態は、どうなっているか？

答え　他の問題での前進も米国によって妨害されている。二、三の問題に触れよう。

なによりもまず、宇宙について。ソ連が宇宙空間への軍拡競争の拡大を許さないことをめざす合意の達成に努力しているのは、すでに一年や二年のことではない。われわれは、この問題をつねに米国指導部に提起している。われわれがそうしているのは、宇宙の軍事化がいかに恐ろしい結果へと導くかをはっきりと理解しているからである。

にもかかわらず、米国大統領は最近、政府が宇宙における軍拡競争の広範な計画の実現に着手し、査察が困難とやらの理由から宇宙空間の軍事化の防止についてソ連と取り決めるつもりがないことを、米国議会に正式に通告した。

乱暴に、そして露骨に、合意を望まないと言っているのだ。しかし彼らは、良識を愚弄するまでにいたりながら、この問題に関する合意は不可能だということについて取り決めることのみを目的としてわれわれと話し合う用意を表明している。ワシントンは一般に政治対話、交渉をこのように理解しているのだ。

他の重要な問題――化学兵器の禁止について見てみよう。

すでに一九七二年にソ連その他の社会主義諸国はジュネーブ軍縮委員会において、化学兵器の開発、生産、貯蔵の禁止とその廃棄に関する条約の締結のイニシアチブをとった。同時にこれら諸国は、このような条約の案文をも提出した。

その後、われわれは、われわれの提案を精密化し、詳細にしながら、この問題に一度ならず立ち返った。しかし、米国はこの年月を通して化学兵器完全

禁止条約の締結を妨げてきた。全く妨害に取り組んでいたのだ。

いまやワシントンは、自分を化学兵器禁止の支持者として描くことを決めた。すでに数カ月間、米国の指導者たちは、この点に関してなんらかの提案をジュネーブで行うことを約束している。しかし、約束にもいろいろある。それがどんな結果になるのかは、全くもって不明である。その間にも米国では、大統領の発言から明らかなように、米国内にも米国外にも配備されている化学兵器の増強と更新の計画が強力に推進されている。

もう一つの例を挙げよう。いまにいたるまで地下核実験の制限に関するソ米間の二つの条約が効力を発していない。これらの条約はほぼ10年前に調印されたもので、われわれは米国にそれらを批准するよう何度も提案した。しかし、今日にいたるまで米国は、それを拒否している。

その際ありとあらゆる言い抜けが用いられている。最初は、これらの条約の批准が核兵器実験全面完全禁止交渉を妨げるかのように言われた。次に、その交渉をも決裂させて、査察の難しさを口実にし始めた。

言うまでもなく、問題は査察ではない――調印済みの条約はこの点について詳細にわたって作成された規定がある。問題は別のところ――核兵器の増強・改良を妨げるような何らかの制限で自分の手をしばることをワシントンが望んでいないところにあるのだ。

私が査察問題にふれたのは、米国が合意を望まない時にはきまってこの問題を持ち出すからでもある。だが軍備削減・軍縮措置について取り決めようという実際の熱意があれば、査察は障害とならなかったし、障害になるはずはない。このことは過去の経験でも証明されている。

ところで、米国の政策、それに実際の行動を考慮して、われわれは、具体的な軍備制限・軍縮措置に相応する確実な査察に米国に劣らず、おそらく米国以上に関心を寄せている。

問い　西側では、ソ連が現在のところ米国の大統領選挙の結果待ちで、米国と合意に踏み切ることを望んでいないといったようなことがしばしば論議されているが、この点についてはどうか？

答え　こうお答えしよう。そのような考えをばらまいている連中は、われわれの政策を知らないか、あるいは、こちらの方が最も確率が高いが、故意に歪曲しているかだ。われわれの政策は原則的で、時局の変化に流されたりしない。

ソ米関係史を通じてわれわれはワシントンのさまざまな政権と交渉してきた。米指導部側から対ソ関係に対する現実主義と責任あるアプローチが発揮された場合には、事は正常に運んだと言える。それは世界情勢全体にも好影響を及ぼした。このような現実主義的アプローチが欠けた時には、それに応じて、われわれ両国の関係も悪化した。

われわれは、今日も、米国と正常な、安定した関係、平等と同等安全、相互内政不干渉に基づいた関係を維持することをめざしている。

米国の選挙に関連しての〝われわれの胸算用〟とやらをほのめかすことによって、どうやら、解決を要する問題についてソ連と合意することを自らが望まないのを隠そうとしているようだ。だがこの点については、私がいま言及したばかりの問題だけについてでも双方の立場を比較すれば理解できるだろう。

問い　人々が平和に対して絶えず不安を抱いて生きなくてもよくなるために、何が必要だと思うか？

答え　まず第一に、各国、特に核兵器保有国の政策が戦争の危険を一掃し、平和を固める方向をめざすようになることが必要だ。

当面の努力は、軍拡競争を阻止し、引き戻すことに向けられなければならない。交渉の有益さについての一般的な論議から、軍備の制限と削減、信頼の発展、互恵的協力の調整の道につくり出された深刻な障害の排除へと移行すべき時が来ている。

それらの分野における具体的な諸問題に関する一連の偉大なソ連提案については、すでに述べた。共同の努力の結集を要するその他の大きな問題もある。

たとえば、すべての核保有国が核兵器先制不使用、さらに核兵器庫の質量両面での凍結に関する義務を引き受けることは、間違いなく世界のよりよい方向への決定的な転換を促すだろう。そのためには複雑な交渉は必要ではない。ここでは政治的決意を発揮する必要がある。結果は間違いなくあらゆる点で重みのあるものとなろう。重要なのは、他国に対する軍事的優位を獲得する試みを捨てる用意がはっきりと表明されることである。わが国は、そうした優位を求めてはいないが、わが国に対する優位をも許さない。

そもそもきわめて重要なのは、核兵器保有諸国間の関係において、平和目的を追求する一定の基準が導入されることである。このことについては以前私は詳細に語る機会を得た。

国際関係における信頼の雰囲気の醸成という課題が、切実なものとなっている。そのためには、すべての国の側からの責任ある熟考された政策と、その方向につながる相応の実際的措置の採択が要求されている。ソ連その他の社会主義諸国が求めているように、大規模な政治的、国際的措置と軍事技術的措置とが組み合わされれば、ストックホルム会議を成功させ、欧州と国際的な安全の強化に大きく貢献する成果をあげさせることが可能となるだろう。

世界のさまざまな地域に今ある緊張と武力紛争の火元をなくし、新たな火元の発生を防止するために、最も精力的な努力が傾注されなければならない。

言い換えるなら、具体的な行動によって平和と国際安全の強化を促進する少なからぬ可能性がある。

ソ連はこれらの目的を実現する上ですべての国と協力する用意がある。

社会主義インター指導者のメッセージに対するコンスタンチン・チェルネンコの回答

コンスタンチン・チェルネンコ・ソ連共産党中央委書記長は、社会主義インターの指導者たちのメッセージに対し――ウィリー・ブラント議長と、社会主義インターに加盟している社会党、社会民主党、労働党の指導者たちに対し回答を送った。

以下はその全文。

あなたがたのメッセージを精読した。欧州情勢、国際情勢全般の深刻な悪化に対する憂慮は、われわれにはよくわかる。

核軍拡を含む軍拡競争に拍車がかかり、それはますます脅威的なものとなっている。同時に核軍備制限・削減交渉のプロセスは破壊され、しかも事実が示すとおり、故意に破壊されている。

それはすべて、出来上がっている力の均衡のぶちこわしや、ソ連に対する軍事戦略的優位の達成をめざす周知の政策の結果である。そして、特別なことは何も起こっていないというようなどんな気やすめの発言も、どんな見せかけの平和愛好も、そうした政策の大きな危険を隠すことはできない。

われわれは、よりよい方向への進展をめざして努力する必要があるとのあなたがたのメッセージの中で表明された観点と同じ考えをもっている。たしかに、対話が必要であり、その中にはもちろんソ米間の対話も含まれる。しかし、それは誠実で実務的な、平等と同等安全の原則に合致するような合意の作成をめざす対話である。ソ連はそうした態度で臨む意思も決意もある。

しかしそのためには、米国側の相応の用意も必要だ。しかし米政権は、最近ソ連との対話の意向を表明してはいても、それをなんら具体的に補強していない。しかもそれらの確言は実際の行動によって否定されている。欧州の地に米国の核ミサイルが一基配備されるごとに、危険な線への新たな一歩が進められているのだ。このことははたして、真に実務的な交渉に対する用意、欧州諸国民、すべての国の国民にとってこれほど重要な問題の解決に対する用意を物語っているだろうか。肝心なのは交渉への用意に関するおしゃべりや発言ではなく、核軍備制限・削減交渉への道に立ちはだかる障害を排除する用意である。

ソ連はほかならぬそのことを求めている。

われわれは、軍拡競争を阻止し、引き戻すことの心からの支持者であったし、今もそうである。ソ連が行っているすべての提案はそのことをめざしている。すべての核兵器庫をただちに凍結する、戦略軍備を制限し、大幅に削減する、欧州での核対決レベルを抜本的に低める、宇宙の軍事化を防止する、化学兵器を禁止・廃絶する――戦争の脅威の解消をめざすこれらやその他の措置は、実生活の要請によるものだ。それらは現実的なものであり、すべての国の利益や、世界の諸国民の要求と期待に同程度に合致している。

このことは、核保有諸国間の関係が従うべき一定の基準や、それらに義務的な性格をもたせることに関して合意しようという、われわれが先ごろ行った提案についても言える。重要なのは、すべての核保有国が核戦争防止の課題を自国の政策の主眼とし、それを考慮して自分たちの相互関係を築くことである。

前述の諸問題に関する合意の達成は、ソ米関係におけるのと同じく国際情勢全般においても、真の転換の始まりとなることができよう。政治的意思があれば、共同の努力によって状況をよりよい方向に変えることができる。

国際的信頼の雰囲気を回復させることが重要であり、それは切実に必要とされている。この面ではストックホルム会議も有益な役割を果たすことができる。ソ連は、会議の意義と課題のまさにそうした理解の上に立って、手始めとして大規模な措置――核兵器の先制不使用、軍事力全般の使用の断念に関して合意することを求めている。

最近、社会主義インターや多くの社会党、社会民主党を含む西側のさまざまな層も、核戦争の危険を減らし、国際緊張を弱めることをめざすイニシアチブを打ち出した。このことは、デタント・プロセスの再開への現実的な牽引力が存在していることを物語っている。

しかしそれはひとりでには生じない。状況の必要とする効果的で緊急の措置が要求されている。

戦争の危険性を減らし、平和を強化するためのたたかいの中でソ連は、すべての国、すべての平和愛好的な社会勢力と広範で積極的な協力を行う用意がある。

私としては、ソ連が軍拡競争の抑止、デタントへの復帰、欧州と国際的な安全の強化をめざす路線を今後もとっていくことを、明確に強調しておきたい。

（タス通信一九八四年4月4日）

ソ連オリンピック委員会の声明

（一九八四年4月9日）

ロサンゼルス市（米国）での第23回オリンピックの開催まであますところ3カ月余となった。各国オリンピック委員会が自国のオリンピック参加決定を下すべき期限がますます近づいてきている。

レーガン米大統領は、米国政府がオリンピック憲章の伝統、規約、条項を守るという書面による保証をIOCに提出した。しかし、事実が示すとおり、それらの義務と一連の重要問題に関する保証は履行されていない。米国政府は、選挙前のオリンピックを自分たちの利己的、政治的目的に利用しようとしている。

米国ではソ連のオリンピック参加に反対する広範なキャンペーンが展開されている。さまざまな反動的政治グループ、亡命者グループ、宗教グループの団結が反オリンピックの基盤で生じている。たとえば、〝ソビエトを禁止する〟連合がつくられ、米国の公式機関の支持を受けている。ソ連その他の社会主義諸国の選手と役員に対して、肉体的制裁や挑発を行うという露骨な脅しがかけられている。ソ連選手団のオリンピック参加が米国の安全を脅かすとかいう中傷的な主張が広められている。

それはすべて、憲章の伝統と規約に完全に反している。憲章にはオリンピック運動のもつ目的が次のようにうたわれている。「スポーツを通じて青少年によりよい相互理解と友好の精神を培い、それによってよりよい、より平穏な世界の創造を促進する」。人種的、宗教的、政治的理由によるいかなる差別も、国に対するものであろうと個人に対するものであろうと許されていない。

周知のとおり、オリンピック開催国は各国選手団の完全な安全を保障する責任を負っている。現在ロサンゼルスにつくり出されている状況は、とられている措置の効果を疑わせるものだ。米国の新聞雑誌の報道によれば、オリンピック開催中に市内での政治的なデモや集会の実施が準備されており、すでに現在、社会主義諸国を攻撃する内容のスローガンやプラカードが掲げられているという。選手の市民的権利が侵害され、その尊厳が傷つけられるかもしれないとの危惧が強まっている。

自由欧州放送の代表を大会で公認しようというもくろみは警戒せざるを得ない。周知のとおりこのラジオ局は、米諜報機関から資金を受け、社会主義諸国民に対する破壊活動を行っている。これはオリンピック憲章51条に直接違反するものだ。

オリンピック憲章59条によれば「オリンピックの身分証明書は、その所有者の身元を確認するものであり、オリンピック開催国の国境通過を許可する文書である」。こうした規定はモントリオール、モスクワ、サラエボのオリンピックでは有効だった。しかし本年4月始めにソ連NOCは、ビザ取得のため在モスクワ米国大使館に選手団の全メンバーのリストを提出するように、との通告を受けた。その際米国大使館は、同大使館が好ましくないとみなす人物に対し入国許可を発給しない権利を留保し、それはすでに実際に適用されている。周知のとおり、先ごろ米国務省は、オリンピック組織委員会が認めたソ連NOCのオリンピック・アタッシェに対するビザの発給を拒否した。国務省が、ロサンゼルス・オリンピック組織委の行動をつねに〝修正〟し、問題によっては同組織委を代行することを自らの権利とみなしていることが明白になってきている。

このように、昨年12月にソ連NOCとロサンゼルス・オリンピック組織委の間で結ばれた協定の遂行は、米国務省のせいであやういものとなっている。

世界世論は、ロサンゼルス大会のとめどのない商業化に対してもすでに以前から懸念を表明している。オリンピックを手段とするカネ儲けが全く醜悪な形をとっている。事態は、聖火を商業目的に利用することを禁止しているオリンピック憲章62条が乱暴に侵害されるまでにいたった。ロサンゼルスの物価上昇は抑制されておらず、多くの伝統的に無料のサービスにここでは大金が取られる。

オリンピック憲章の違反や、政府の黙認のもとで米国反動層が展開している反ソ・キャンペーンは、異常な事態をつくり出している。そこでソ連NOCは、ロサンゼルス・オリンピックを前につくり出されている状況をIOC緊急理事会で早急に検討し、オリンピック憲章の厳守や、オリンピックの参加者と来賓のしかるべき安全を保証する効果的措置の採択を米国側に求めるよう、IOCとサマランチIOC会長に要請する。

ソ連NOCは、各国NOC、国際競技連盟、世界のスポーツ界に対し、オリンピック運動の原則と理想の擁護に力を合わせ、大会を世界のすべての国の国民の平和と友好の祭典としておくことに全力を尽くすよう訴える。友好と相互理解、思いやりの精神は、つねに世界のスポーツマン同士の関係の基盤となってきたのである。

宇宙を飛んだ初のソ連・インド国際クルー

一九八四年4月3日17時9分（モスクワ時間）、ソ連で宇宙船ソユーズT11号の打上げが行われた。

乗り組んだのはソ連の宇宙飛行士ユーリー・マルイシェフ（船長）、ゲンナジー・ストレカロフ（フライトエンジニア）とインドの研究者で宇宙飛行士ラケシ・シャルマの国際クルー。

ソユーズT11号は、すでに一九八四年2月8日に打ち上げられたソユーズT10号と連結している軌道ステーション・サリュート7号とドッキングして三重連結体を作り、ソユーズT10号の乗員L・キジム、V・ソロビヨフ、O・アチコフと共同して一連の研究・実験を行った。

ソ連・インド国際クルーの飛行は、ソビエト社会主義共和国連邦政府とインド共和国政府間の合意に従って行われたものである。

ソユーズT11号の船内システムは正常に機能している。マルイシェフ、ストレカロフ、シャルマの3人の宇宙飛行士は予定通り11日午後2時50分（モスクワ時間）、ソユーズT10号で地上に帰還した。

8昼夜の時間と五〇〇万㎞の距離が「出発」と「帰還」という二つのイベントの間を隔てていた。ロケットでバイコヌール宇宙基地（カザフ共和国）から出発した3宇宙飛行士は、宇宙船の降下装置で地上に帰還すると、今度は着陸地点に近いアルカルイク市（カザフ共和国）から飛行機でバイコヌール基地に戻った。8昼夜を隔ててバイコヌール基地が宇宙飛行士を見送り、出迎えたのは、両日とも4月にしては珍しく肌寒い日だった。バイコヌールの草原に咲く有名なチューリップの花束で乗員を出迎えたかったのに、温室咲きの花しかなかった。春は足踏みしていた。

宇宙飛行士たちは記者会見で次のように語った。

ユーリー・マルイシェフ――「今後の宇宙船の船長が全員、わが乗員と同じような乗員に恵まれることを希望する。われわれの飛行は、宇宙だけでなく地上においても、いかに協力しなければならないかを示した」

ラケシ・シャルマ――「ソ連・インド共同飛行の平和的な方向を強調したい。軌道上からは地上の国境線は見えなかった。私は地球をわれわれ人間の星、ただそう思って見ていた。地球を今のように美しい星のまま残し、もっと良くし、戦争や武器から守りたい――これがわれわれの課題だ」

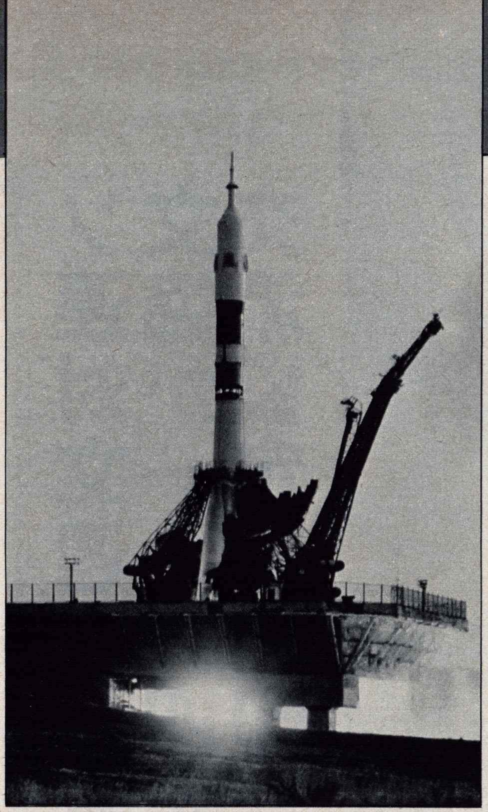
ラケシ・シャルマは宇宙から帰還した者が皆そうするように、バイコヌールの宇宙飛行士の道に植樹した。この小道は有名だ。ユーリー・ガガーリンが植えた23歳になるニレの木が枝を繁らせている。ガガーリンは全宇宙飛行士の出発点だった。そのすぐそばにアレクセイ・レオノフ（初めて宇宙遊泳をした）の木が、もう少し先には初期のソユーズ型宇宙船とサリュート型軌道ステーションの乗員たちの木がある。小道のもう一方の側には宇宙滞在期間で新たな記録を作ったり、未知の謎の解明に新たな足跡を残した飛行士たちの木が並ぶ。そして、ラケシ・シャルマが植えた折れそうに細いまだほんの〝赤ちゃん〟の木。その先には広い空間がある。木を植える余地はまだいっぱいある。それもそのはずだ。まだたったの23年、先はまだ長い。



右上　初のソ連・インド国際クルー。左からユーリー・マルイシェフ（ソ連）、ラケシ・シャルマ（インド）、ゲンナジー・ストレカロフ（ソ連）の3宇宙飛行士（出発前の写真）



出発を前にソユーズT11号に向かう3飛行士（右からストレカロフ、マルイシェフ、シャルマ）。



1984年4月3日、ソユーズT11号は宇宙へ旅立った。



ソユーズ宇宙船のシミュレーション装置で訓練中のマルイシェフ船長とシャルマ飛行士

ソユーズT11号乗員の略歴

ユーリー・ワシリエビチ・マルイシェフ大佐（船長）　ソ連邦英雄、ソ連宇宙飛行士。

一九四一年8月27日、ボルゴグラード州ニコラエフスク市に生まれた。

一九六三年、ハリコフ高等軍パイロット学校を卒業。その後ソ連空軍に勤務。第1級軍パイロットと第3級テストパイロットの資格を持つ。

一九六四年からソ連共産党員。

一九六七年から宇宙飛行士の部隊に所属。

一九七七年、ガガーリン記念空軍大学を通信教育で卒業。

最初の宇宙飛行は一九八〇年6月。宇宙船ソユーズT2号の船長として軌道ステーション・サリュート6号とドッキングした。

ゲンナジー・ミハイロビチ・ストレカロフ（フライトエンジニア）

ソ連邦英雄、ソ連宇宙飛行士。

一九四〇年10月28日、モスクワ州ムイチシチ市に生まれた。

一九六五年、バウマン記念モスクワ工科大学を卒業し、設計ビューローで働き始めた。独創力のある博学な技師としての評判をとり、宇宙機器の開発とテストに参加。

一九七二年からソ連共産党員。

一九七三年、宇宙飛行士の部隊に編入される。最初の宇宙飛行は一九八〇年。宇宙船ソユーズT3号で軌道ステーション・サリュート6号にドッキング。2回目の宇宙飛行は一九八三年4月に宇宙船ソユーズT8号で。

ラケシ・シャルマ少佐

一九四九年1月13日、インドのパチアラ市に生まれた。

一九六六年、国立防衛大学に入学。同大学を卒業後、インド空軍に勤務。その後各種飛行中隊に勤務、最新型航空機で飛行した。

テストパイロット講習を修了後、各種航空機のテストに参加。

一九八二年、ガガーリン記念宇宙飛行士訓練センターでトレーニングを開始。宇宙船ソユーズT型と軌道ステーション・サリュートでの飛行のための全訓練コースを修了した。

うよう最大の努力を払う、と定めている。また、第11回エレクトロニクス・シンポジウム、第7回エネルギー問題シンポジウム、第4回ソ日文学シンポジウム（以上ソ連で）や第16回ソ日経済学者シンポジウム、第9回アジア安全保障問題シンポジウム、第1回出版問題シンポジウム（以上日本で）をはじめとする各種のシンポジウムやセミナー、「日本のデザイン――その伝統と現代」展、「日本南画院」展（以上ソ連で）、「鳥の世界とソ連邦における自然保護」展、エルミタージュのコレクションによる装飾・工芸美術品展（以上日本で）などの展覧会も行われ、そのためにソ連側と日本側が受け入れ、あるいは派遣する社会活動家やジャーナリスト、学者、宗教家などの代表や講師、研修生の人数と訪問日数、研修期間も定められている。

ソ連対文連と日本対文協が一九八四年度交流協定に調印



4月6日、東京千代田区・霞が関ビル内の東海大学校友会館で、ソ連対外友好・文化交流団体連合会（対文連）と日本対外文化協会（対文協）が一九八四年度の交流協定に調印した。

これはソ連対文連と日本対文協が、両者間の長期文化学術交流協定の枠内で、ソ連および日本の諸機関がソ日両国民間の友好関係と相互理解をさらに強化し、文化・学術成果の相互交流を発展させるために一九八四年度中に実施する諸事業について交渉、合意したもので、G・ヤナエフ・ソ連対文連副議長と辻原弘市・日本対文協理事長が協定の文書に調印した。

協定は、ソ日両国民の生活と文化を紹介し、友好と相互協力を促進する事業として、第4回ソ日円卓会議、第3回ソ日ジャーナリスト会議、第4回ソ日婦人集会、ソ日宗教者集会、第1回ソ日テレビのための映画制作協力問題会議を挙げ、双方はこれらの事業を行

▲一九八四年度交流協定の調印式。前列左から日本対文協の中村曜子副会長、辻原弘市理事長、ソ連対文連のG・ヤナエフ副議長。

ソ連保健省代表団が来日



4月9日、日本対外文化協会の招待でT・カスモス・アゼルバイジャン共和国保健相、I・グレベショワ・ソ連保健省母子治療予防局長、V・オフチャロフ・全ソ公衆衛生保健組織研究所長が来日し、関東逓信病院、国立病院管理および人口問題の両研究所、国立公衆衛生院、国立小児病院、目黒区立菅刈保育園、東京大学医学部母子保健学科を視察し、関係者と懇談した。一行はまた、4月13日、厚生省に渡辺恒三厚相を表敬訪問し、日ソ両国間の医学、保健、公衆衛生の分野での協力関係確立の必要性について話し合い、そのために今後努力していくことで合意した。訪日の目的に合致した滞在スケジュールを組んでくれた日本対文協に感謝して、一行は4月17日、無事帰国の途についた。

（写真提供＝日本対外文化協会）

渡辺厚相を表敬訪問して懇談するソ連保健省代表団

日ソ親善協会第20回定期総会



4月7日、東京千代田区・霞が関ビル内、東海大学校友会館望星の間で、「日ソ友好でアジアと世界の平和を！」「日ソ親善運動の輪を強く大きく！」をスローガンに、日ソ親善協会第20回定期総会が開かれた。総会には全国各地の60以上の支部の代表ならびに会員一〇〇名以上が代議員として参加した。

来賓として出席したパブロフ駐日ソ連大使はあいさつの中で、チェルネンコ・ソ連共産党中央委員会書記長をはじめとするソ連の指導部ならびにソ連国民は、一貫して世界平和の擁護のために闘っていること、日ソ両国間の交流の改善・増進を心から願っていること、またそのために日ソ親善協会が大きな柱となっていることを強調した。

日ソ親善協会結成20周年を迎えた本年度の総会では、まず一九八三年度の活動報告が承認され、次いで一九八四年度の運動方針が討議された。一九八四年度の運動方針では、日ソ関係の現状と展望が分析され、協会の20年にわたる活動の総括と今後の進むべき方向、協会の任務と主要な目標が確認された。そのさい特に、今年の日ソ関係をとりまく国際情勢は戦争と平和という基本的命題の中で複雑多岐な流れが考えられるが、常に正しい認識に立ち、平和のためにどうすべきかという立場を堅持しなければならないことが強調された。

総会で承認された一九八四年度運動方針には「不戦の誓い」「日ソ円卓会議」をはじめソ連の民族アンサンブルの公演など、多彩な交流計画も盛り込まれている。

なお、総会にはソ連対外友好・文化交流団体連合会（対文連）とソ日協会から親善使節としてヤナエフ・対文連副議長、ザイチコフ・沿海〔プリモーリエ〕地方副知事が出席した。総会の席上、赤城宗徳・日ソ親善協会会長とヤナエフ副議長が一九八四年度の親善協力計画ならびに追加条項を盛り込んだ議定書に調印した。

（写真提供＝日ソ親善協会）

▲調印した一九八四年度親善協力計画書を交換する赤城宗徳・日ソ親善協会会長とヤナエフ・ソ連対文連副議長

催し物のお知らせ

☆セザンヌ、ゴーギャン、マチス、ピカソ…

エルミタージュ、プーシキン美術館収蔵の後期印象派から立体派までの名品を展示。
▽5月27日まで。月曜休館。午前9時―午後4時30分（入場は午後4時まで）。
▽東京都美術館（上野公園）
▽主催　東京都美術館／読売新聞社
▽入館料　一般800円、高・大生600円、小中生300円

☆タジク共和国の歌と踊りのアンサンブル「ゼボ」の公演

船橋・中央公民館文化ホール（5月24日）、鳥栖・市民文化会館（5月28日）、博多・ももちパレス（5月29日）、大分・芸術会館文化ホール（5月30日）、熊本・ニュー産業文化会館（5月31日）、指宿・市民会館（6月1日）、鹿屋・市文化会館（6月2日）、鹿児島・中央公民館（6月3日）
▽お問い合わせは、日ソ親善協会（電話 03・261・4897）へ。

☆ブリャート自治共和国の歌と踊りのアンサンブル「バイカル」の公演

新潟・市公会堂（6月15日）、喜多方・プラザ文化センター（6月17日）、北上・市民会館（6月18日）、青森・市文化ホール（6月19日）、室蘭（6月20日）、苫小牧（6月21日）、札幌（6月22日）、稚内（6月25日）、名寄（6月26日）
▽お問い合わせは、日ソ親善協会（電話 03・261・4897）へ。

☆タチアナ・ニコライエワ・ピアノコンサート

バッハの演奏家として知られるニコライエワの4度目の来日。

東京・東京文化会館小ホール（5月31日）、名古屋・スタジオルンデ（6月2、3日）、京都・京都会館第1ホール（6月4日）、東京・人見記念講堂（6月5日）、東京・東京文化会館大ホール（6月7日）、札幌・道新ホール（6月9日）、東京文化会館小ホール（6月12日）、松戸・聖徳学園短大講堂（6月14日）
▽お問い合わせは、コンサート・エージェンシー・ムジカ（電話 03・461・2590）へ。

ソ日共同取材

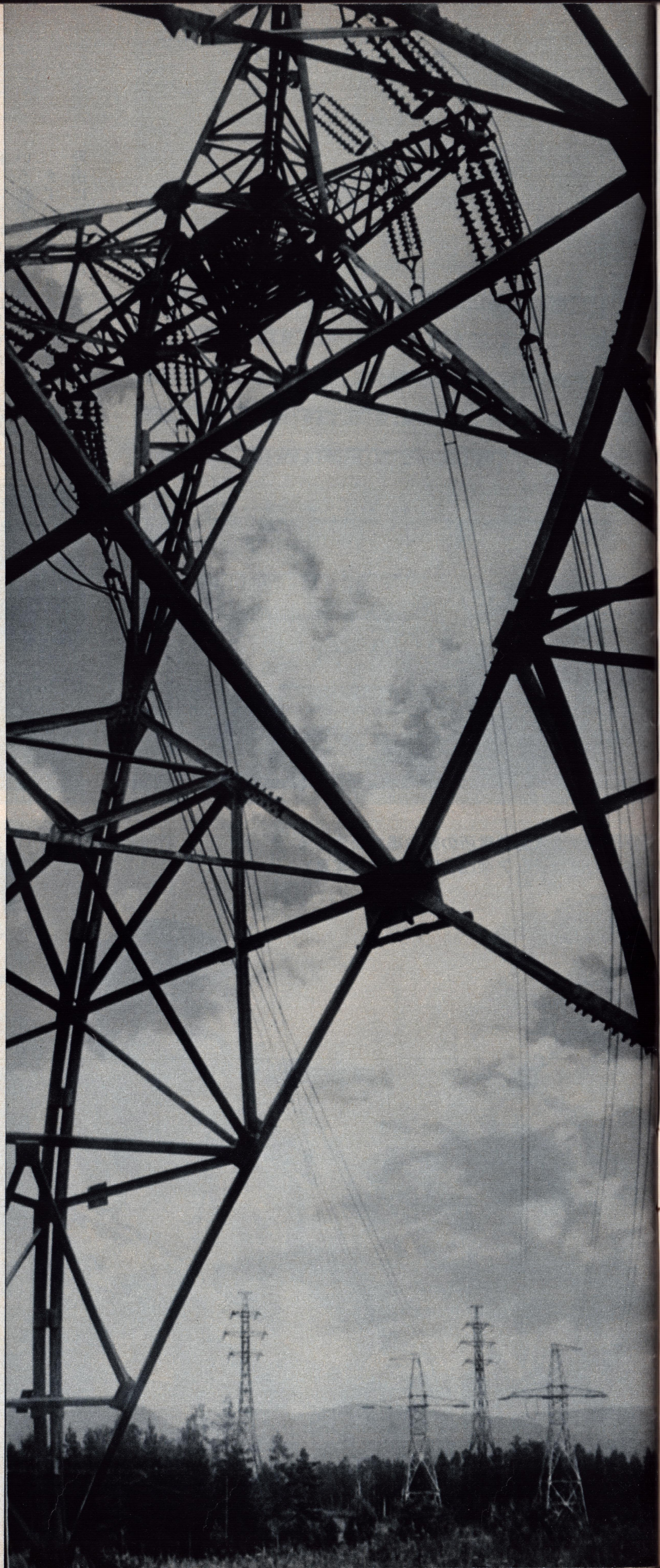
五つの目で見たシベリア (3)



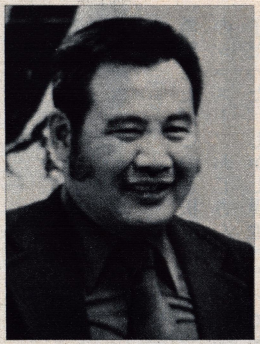
L・A・シマチコ画『ゴエルロ・プラン（全ロシア電化計画）について報告するレーニン』

1928年に開催された第5回ゴスプラン会議全ソ大会の幹部会席の人々——左からクイビシェフ（顔が半分しか見えない）、クビリング、ブリュハノフ、クルジジャノフスキー（水さしのうしろ）など。

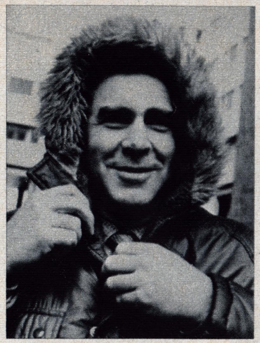




シベリアから欧州部へ向かう高圧送電線（イルクーツク州）



仲 弘氏



フェリクス・プラテ記者

編集部から——8号から始まったソ日共同取材「五つの目で見たシベリア」の第3回。本誌初の試みとして、昨年の10月、日本のソ連経済専門家・仲 弘氏、本誌編集部のフェリクス・プラテ記者、それにカメラマンのワレリー・シュストフがシベリアを共同取材しました。6回にわたって連載されるこのシリーズは、その成果です。編集部ではこの企画についての皆さんのご感想をお待ちしています。

アンガラ・イリム流域開発のルーツ

ソ連経済研究家 仲 弘

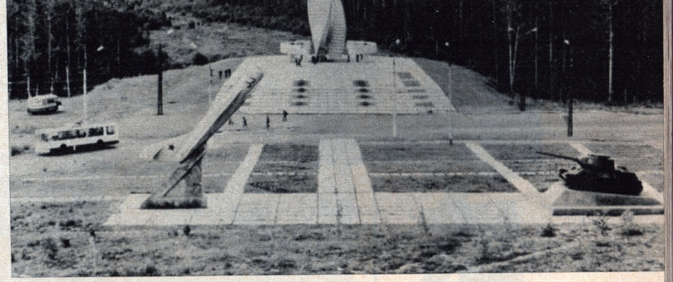
モスクワからの飛行機がおくれた結果、私たちはイルクーツク州の北部、バム地域の旅行日程を一日短縮しなければならなくなった。プラテ氏は、私の残念な気持を察して、デリケートな口調で相談をもちかけた。しかし私の

腹はすでにきまっていた。ブラーツク訪問をとりやめて、提案のあった諸地域のなかから、ためらいなくジェレズノゴルスク・イリムスキー市を中心とするニジネイリムスク地区の訪問を希望した。この選択には、カメラマンのシュストフおじさんは若干不満の様子だった。しかし現地へ行ってからの仕事では、結局大変満足したようである。私達は「ダムだけが被写体じゃないだろう」とこの世界的に有名な写真家をからかった。私自身についていえば、非常に貴重な成果を得て大満足という結果になった。

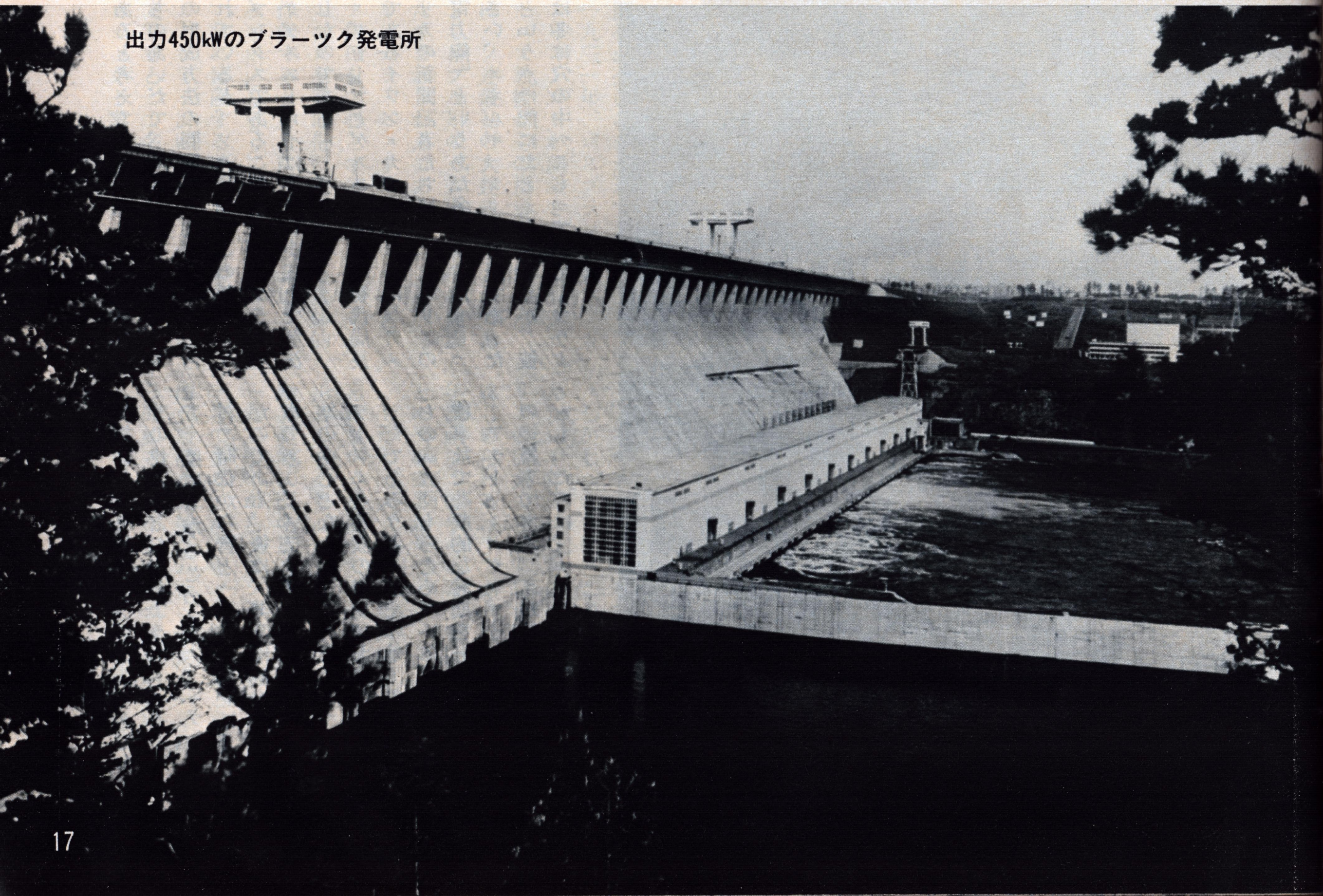
まず、ブラーツク訪問をカットした理由について書こう。ブラーツクにつ



ブラーツク市のキーロフ通り。右に見えるのはホテル〝タイガ〟



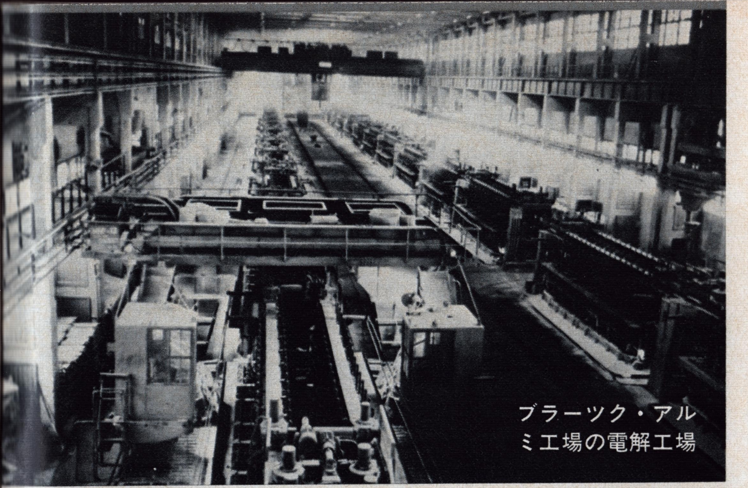
第2次世界大戦中のシベリア出身戦没将兵の慰霊碑（ブラーツク市）



出力450kWのブラーツク発電所



ブラーツク水力発電所の建設場で公演する学生のアマチュア楽団（建設当時の写真）



ブラーツク・アルミ工場の電解工場



▶第１電解工場のアレクセイ・スピリドフ班長

いては、すでに私達にとっては大先輩である野々村一雄先生が「今日のソ連邦」にも書いておられる。また、一九七六年から七七年にかけて、ウィーンの近くのラクセンブルグにある応用システム分析国際研究所の、世界中の各国からあつまった学者たちが、ブラーツクについて徹底的な研究を行った。ブラーツクには今ではインツーリストの支所もあり、国際的なツーリスト・ルートにもなっている。いまさら私のような駆け出しのソ連研究者が――という気持ちがあったというのではない。ソ連経済を研究するものにとって、ましてシベリア開発に大きな重点をおく私のような研究者にとって、ブラーツクは「聖地」である。この意味は連載の第一回にすでに書いた。

私がブラーツク訪問をとりやめたのは、イルクーツクへ着いた時、ブラーツクゲスストロイ（ブラーツク水力発電所建設局）のアナトリー・ザコブイリン局長が出張で不在である、と聞いたのが一番大きな理由である。

応用システム分析国際研究所の学者達もそうであるが、私も、ブラーツク・イリム地域開発のカギとなったのはほかならぬブラーツクゲスストロイであると考えている。いまソ連の学者たちのあいだで、地域生産コンプレクスの形成方法の問題がさまざまに論じられているが、ソ連最初のこの種のコンプレクスであるこの地域で、ブラーツクゲスストロイはそれを実践上で解決したのである。

ブラーツクゲスストロイの初代局長であるイワン・ナイムーシンに、アメリカの新聞記者たちは、「シベリアの電力熊」というあだ名をつけた。じっさい、エネルギッシュで健康であったという点は熊にたとえられようが、彼は冬は穴の中へこもって寝てしまうようなことはなかった。ブラーツクの多くの建設者とおなじように、マイナス五十度にもなるこの地で、「テント村」時代から皆と一緒に生活をはじめたのである。彼は、非常に魅力的な人物であり、ブラーツク建設者たちの団結の中心となった。これなくしてはブラーツクの建設の成功はおぼつかなかったであろうと、前記の外国の学者たちの調査団もみとめている。彼は飛行機事故で悲劇的な最期をとげた。

アナトリー・ザコブイリン局長はその後継者である。私が彼に非常な興味をもったのは、ナイムーシンのあとをついでブラーツクゲスストロイを指導しているからというだけではない。私は、モスクワの新聞のインタビュー記事で、彼が、ブラーツク・ウスチイリムスク地域へ、冬季オリンピック大会を誘致したいと考えているということを知ったからでもある。シベリアの奥地で冬季オリンピックとは！　私は是非この実力あるロマンチストに会いたかった。

ブラーツクの提起した問題は、非常に巨大なものであり、今後も多くの人によってくりかえし研究されるであろう。ここで、読者のために、その基本的な問題点にふれておきたい。

アンガラ川の水力の巨大さは、すでにレーニンの時代から問題となっていた。しかし、レーニンの指導のもとにつくられた一九二〇年のゴエルロ・プラン（全ロシア電化計画）は、アンガラの水力の研究を十年先まで延期せざるをえないとしていた。

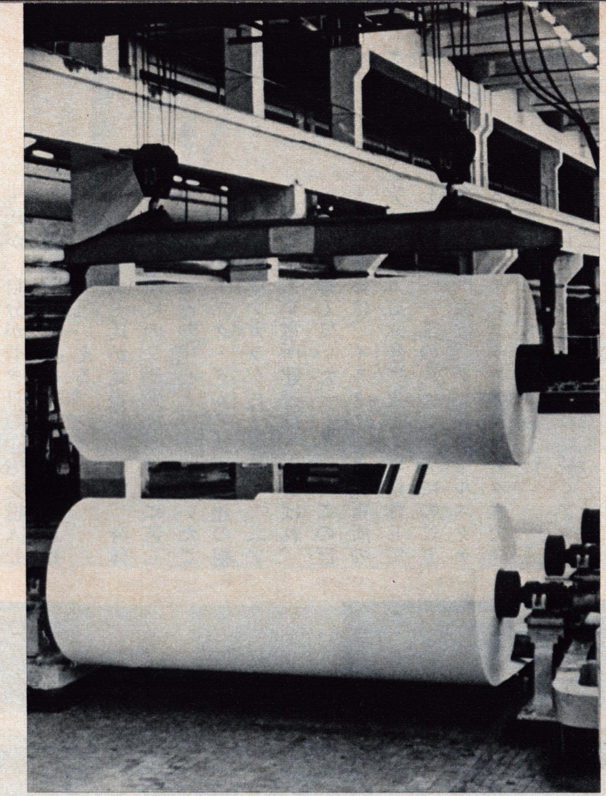
現実はこの予言どおり進むかのようにみえた。一九二九年の八月、ゴスプラン（国家計画委員会）の総会が開かれ、クルジジャノフスキーが議長となって第一次五カ年計画の諸事業を審議した。この席上、ウラル・シベリア・ビューローの議長コロソフスキーの提案によって、アンガラ流域の開発の研究を開始することが決定された。この時は、イルクーツクを中心とする地域の開発が念頭におかれていた。

一九三一年、ゴスプラン付属アンガラ・ビューローが創設され、アレクサンドロフ教授がその指導者となった。彼は、ソ連最初の大建設のひとつであるドニエプル川のダムと発電所の建設にたずさわった人である。

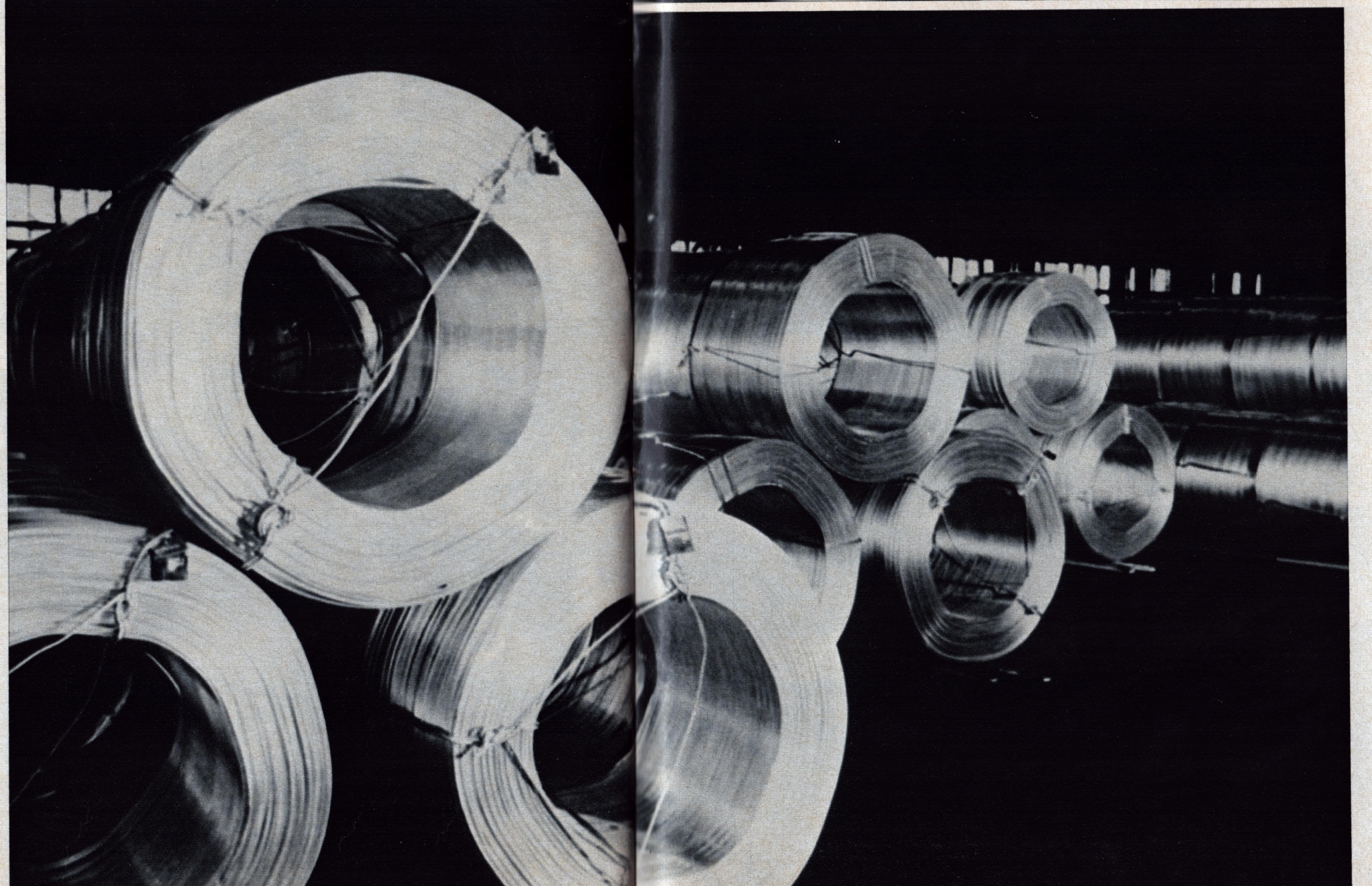
アンガラ・ビューローは、イルクーツク炭田を中心とするバイカル・イルクーツク工業地帯の建設計画を具体的に作成するとともに、アンガラ川、エニセイ川にダムと水力発電所を「階段」状に建設するアンガラ・エニセイ・カスケード計画を提案した。両河の頭文字をとって名付けられたA・E・プロジェクト案は、一九三六年に完成し、その審議がはじめられた。

しかし、戦争は、この案の実現をふたたび十年先へひきのばした。東シベリアの広大できびしい自然への挑戦がはじめられるはずであった第四次五カ年計画は、戦争のいたでを回復することについやされた。

しかし、人々は、この計画を決して忘れなかった。すでに一九四七年、イルクーツクで、「イルクーツク州の生産力発展に関する会議」がひらかれ、一九五〇年から、アンガラ川征服の第一歩であるイルクーツク貯水池と発電所の建設が開始された。一九五一年から開始された第五次五カ年計画には、「安価な電力と地元の原料を基礎とし



ブラーツク木材工業コンプレクスのパルプ工場

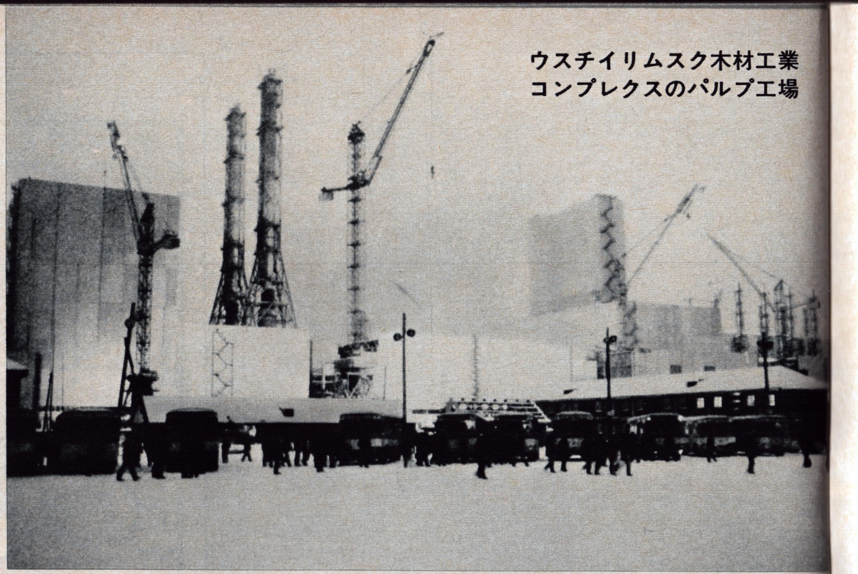


ブラーツク・アルミ工場の製品

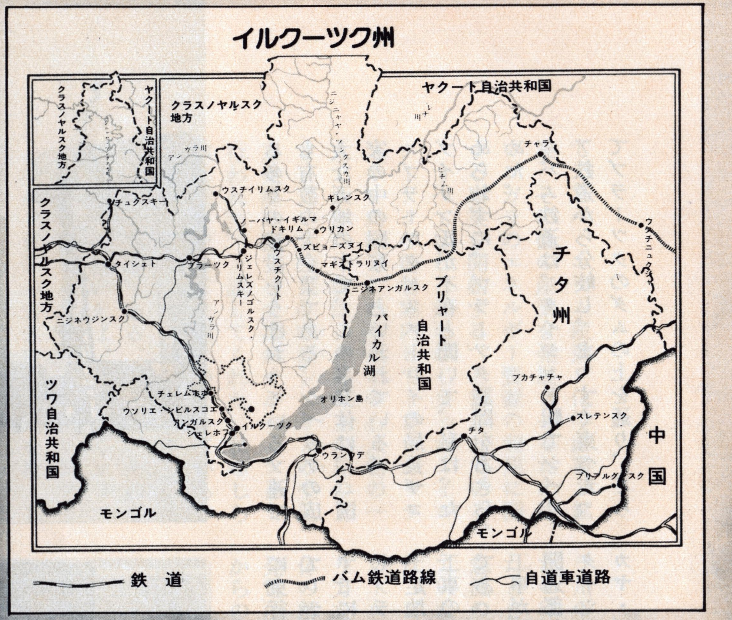
て、アルミニウム産業、化学産業、鉱業、その他の産業を発展させるために、アンガラのエネルギー資源の利用に関する事業を開始する」と書かれている。
　すべてはここからはじまった。イルクーツクの街を案内して下さったサラツキー氏は、この事業の中心人物の一人であった。彼は、ダムの上の丘の上で、「一九四七年に東シベリアの生産力発展に関する会議がイルクーツクで行われた」と話してくれた。私のしらべた限りでは、文献にのこっているのは、「イルクーツク州」の生産力発展に関する会議である。しかし、その歴史的意義からいえば、まさしくサラツキー氏の言うとおりであり、サラツキー氏が、自分が若き日の全力を投入した事業をそのように認識しているのは全く正しいといえる。
　サラツキー氏が党書記として、身体の二十個所にのこる弾丸の破片に苦しみながらもその中心となって動いたこの組織は、「アンガラゲスストロイ」（アンガラ水力発電所建設局）とよばれ、八千人を擁していた。しかし、この巨大な事業体は、イルクーツク発電所の完成（一九五六年）とともに解体してしまった。一部の人々は地元にのこり、多くの専門家は、クラスノヤルスクゲスストロイ（クラスノヤルスク水力発電所建設局）へ去っていった。
　そして、実際に、これに続くアンガラ川のすべてのダムと発電所を建設したのは、イルクーツク発電所が完成したとき、はるか下流のパドゥン地峡の急流のそばにテント村をつくりはじめていたブラーツクゲスストロイであった。ブラーツクゲスストロイは、イルクーツクの経験からもっとかしこいやり方を学んだ。ナイムーシンは、事業体の解体を避けるために、ブラーツク発電所の工事が完了するまえに、みずからのイニシアチブで、より下流のウスチイリムスク水力発電所の建設を開始した。ブラーツクで自分の担当の仕事を終えた専門家や労働者は、機械や設備をもってウスチイリムスクに移動した。そしてさらにウスチイリムスク発電所の完成以前に、一部の労働者はさらに下流のボグチャヌイ発電所の現場へ移動した。——こうして、ブラーツクゲスストロイは、世界でも前代未聞の、世界最大級の水力発電所の「流れ作業」とでもいうべき建設方法をあみ出した。これによる人材と機材と資金の節約は莫大な額に達している。
　おなじようにして、ブラーツクゲスストロイは、世界最大のブラーツク・アルミニウム工場を建設し、そして、今回私が訪れることとなったコルシュニーハ鉄鉱床の開発と、それにともなってつくられたジェレズノゴルスク市の建設をも引きうけた。
　こんにち、ブラーツクゲスストロイは、人員八万人、太平洋岸にまでいた



コムソモール第18回大会記念建設隊のウスチイリムスク到着を歓迎する集会（1978年）

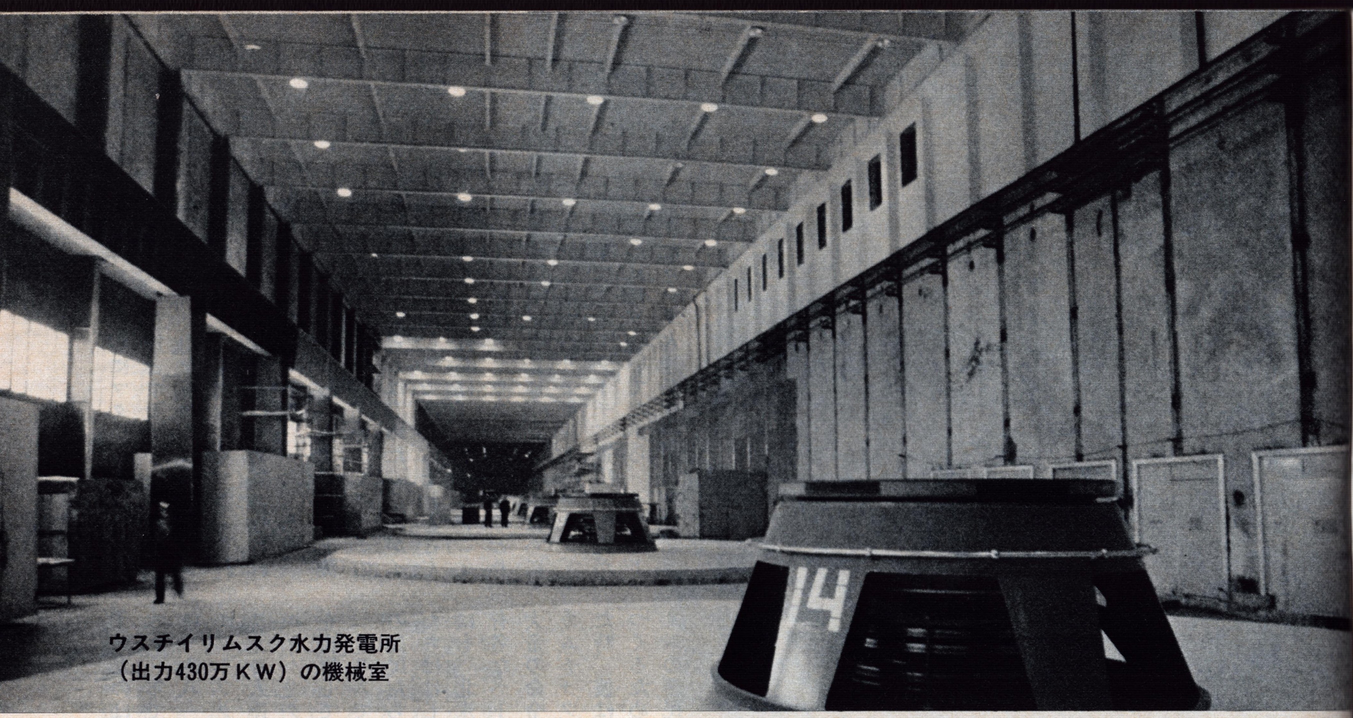

ウスチイリムスク木材工業コンプレクスのパルプ工場

る多くの建設をうけおっているソ連でも有数の大企業である。シベリアの広大な天地の中で、この事業体は、「国家の中の国家」といわれている。
　ブラーツクゲスストロイの局長ザコプイリン氏が不在と聞いて、私は、ためらわずに、ブラーツク訪問をあきらめた。
　バム鉄道は、タイシェト駅でシベリア鉄道から分岐し、まっすぐ東へ走ってブラーツクのダムの上を通り、さらに東行してジェレズノゴルスク市を経てレナ河にいたる。ここまでの部分は、すでに一九五一年に完成している。但しブラーツク発電所のダムによる水没予定地を通過していた部分のつけかえ工事のために、正式開通は一九五八年であった。一九七二年よりバム鉄道の工事が再開され、ことしのうちには未開通部分の三千余キロが開通し、西はタイシェト、東は太平洋岸のソビエツカヤ・ガバニ港までの四千キロの「第二シベリア鉄道」が全通することになる。これは、青森から門司までの日本の国鉄の営業キロ数の二倍以上の距離である。
　私達がこんど訪問したジェレズノゴルスク・イリムスキー市は、ちょうどこの鉄道の通っているところにあるコルシュニーハ鉄鉱床の開発にともなってできた新しい市である。そして、ニジネイリムスク地区の中心地である。かつて、地区中心地はイリムスクという村であったが、この村は、ウスチイリムスク貯水池の水底に沈んでしまった。一時廃止されたニジネイリムスク地区は、ジェレズノゴルスク市を中心として復活した。
　すでに書いたごとく、金沢の姉妹都市であるイルクーツクから、四十人乗りのジェット機に乗った私達は、一時間後に、ジェレズノゴルスクの空港に到着した。この市は、日本の酒田市と姉妹都市の関係を結んでいる。私達は、





ウスチイリムスク市の測量
隊員ナデジダ・ボルコワ



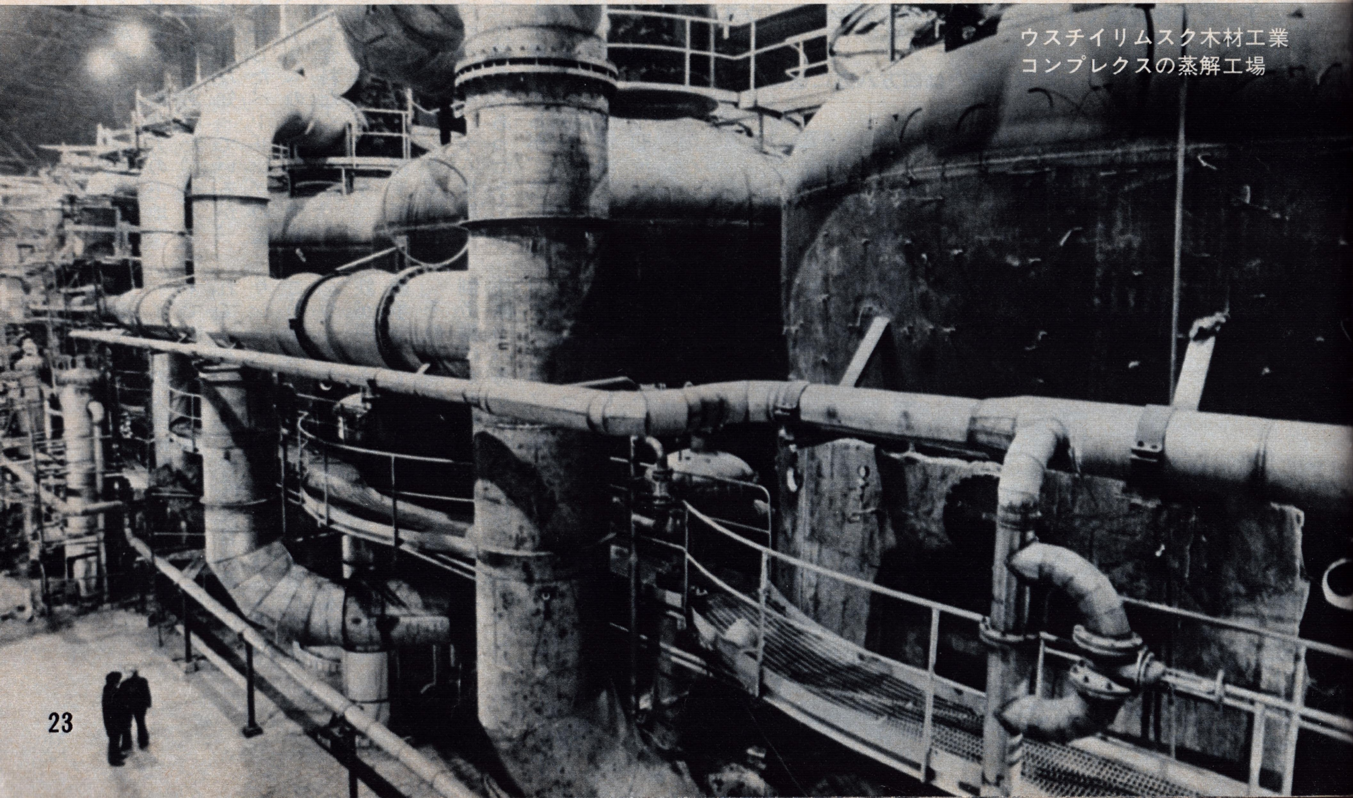
ウスチイリムスク水力発電所
（出力430万ＫＷ）の機械室

まさしく、このシベリアの山奥で、日ソ友好のルートをたどったといえよう。一九六五年に市となったジェレズノゴルスクには、地元の人の話では、「もう四回も酒田から代表団がきたよ」という。迎えてくれた市の幹部も、酒田に行った時のことをなつかしそうに話してくれる。人口三万人というこの町では、日本からの代表団の訪問は、市民のひとりひとりが覚えている大事件なのであろう。

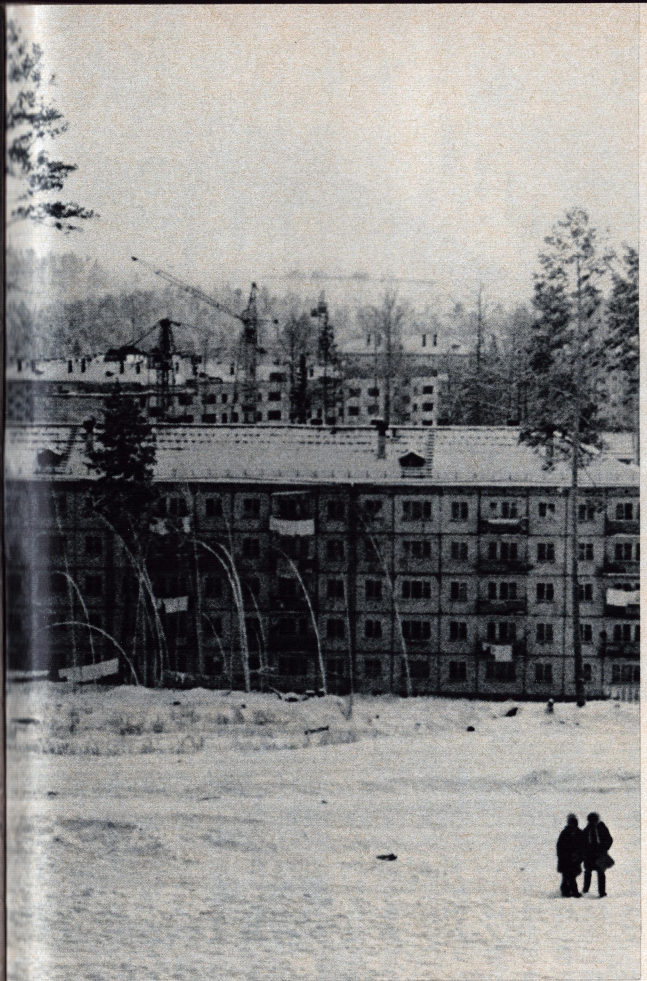
さて、ジェレズノゴルスク・イリムスキーについては、書くことはたくさんある。アンガラ川の支流であるイリム川沿いの土地は、自由を求めてシベリアへやって来たロシアの農民——コサックたちによって、古くから開かれ



ウスチイリムスク木材工業コンプレクス付属の技術学校で学ぶ娘たち



ウスチイリムスク木材工業
コンプレクスの蒸解工場



建設中の新しい団地（ウスチイリムスク）

た。一六二七年にマクシム・ペルフィーリエフを首領とするコサックの一団が、アンガラ川をさかのぼり、イリム川との合流点に屯営をつくった。これが、アンガラ流域にはじめてあらわれたロシア人たちである。一六二九年、コサックたちはさらに九十五キロ上流に「イリムのとりで」をつくり、この地域一帯に定着しはじめた。これがイリムスクのおこりである。それとともに、コサックたちは、イリム峠をこえてレナ川に出て、ウスチクートのとりでをつくり、ここに、ロシア人たちによる壮大なシベリア征服の一ページ、レナ川によるヤクーチア進出への道がひらかれた。ついでながら、イルクーツクにロシア人達が最初のとりでをきずいたのはさらにその二十二年後の一六六一年であり、それが市となったのは一六八一年であった。三年まえ、イルクーツクは三百年祭を祝ったが、イリムの人達は、顔には出さないが、イルクーツクよりなお古いこの地の歴史を自慢しているようである。

イリムでは農業が根付いた。イリムの農民たちの支援によって、ロシア人たちははじめてバイカルにも、太平洋にも、北氷洋にも達することができた。有名なベーリング提督が、ピョートル大帝の命令によって、オホーツクからカムチャツカと北太平洋の探検を行った時、彼は航海に必要な麻のロープをつくるために、麻を栽培することをイリムの農民たちに依頼した。農民たちはできるかどうかわからないこの課題に挑戦し、みごとにこの北方の土地で必要なだけの麻を育てあげた。ベーリング海峡の名はみんな知っているが、この海峡の調査をしたベーリングの艦隊にとっては、イリムの農民から供給された麻ロープと食料なくしては、この大事業も不可能であっただろう。

日本の大学のロシア文学の授業では、ロシアの科学と文学の基礎をきずいたロモノーソフにつづいて、十八世紀の革命的思想家で文学者であったラジーシチェフのことを勉強するが、彼がその著書『ペテルブルグからモスクワへの旅』で、エカテリーナ二世の怒りをかい、一九七二年から五年間流刑になったのがこのイリムの地であることを知る人はすくない。

イリムの大地に鉄鉱石があることは、すでに一六五五年にモスクワに報告されている。イリム管区長官の命令によりシェスターチコ・コルシューノフがこの鉱床を調査し、木炭を使用して鉄をつくった。まもなく本格的な木炭製鉄が開始されたが、ウラルの製鉄業と競争できず、衰退してしまった。

その後農民たちは、製鉄のために強制労働にかり出されることをおそれて鉄鉱山のありかをかくしてしまい、ラジーシチェフが調査した時も教えようとはしなかった。しかし、コルシューノフの調査した地域を流れる川は、コルシューニハと名づけられたままのこった。

左上　私もシベリアっ子（ウスチイリムスクで）

左中　新しい団地につくられたアイスホッケーのリンク（ウスチイリムスク）

左下　児童体育館でトレーニングに励む少年たち（ウスチイリムスク）

ウスチイリムスク水力発電所からは四方八方に送電線が延びている。









そして、現在、ジェレズノゴルスク市の労働者たちが採掘し選鉱しているのは、まさにこのコルシューニハの鉱床である。

十九世紀になって、コルシュニーハ鉱床が再発見されるとともに、他に多数の鉄鉱床がみつけられ、ここに、アンガラ・イリム鉄鉱石含有地帯の存在があきらかとなった。これは主としてロシア皇帝によってこの地に流刑された革命家で地質学者であった人々の業績である。

戦後、東シベリアには、さらに多くの鉄鉱床が発見されたが、しかし、ソ連の鉄鉱石埋蔵量は世界の五分の二をしめるほど巨大であり、その中では、シベリアと極東はあまり目立つ存在ではなかった。たとえば、一九七五年のデータによれば、ソ連全体の調査済鉱量六百三十七億トンのうち、東シベリアは五・六パーセント、極東は二・八パーセントを占めていた。

ところが、ここ十年のあいだに、バム鉄道の建設にともなう調査によって、ヤクーチアのアルダンと、チタ州のチャラ地区に大鉱床群が発見され、それぞれが数十億トンの埋蔵量を有することがあきらかとなった。

このようにはげしく変化しつつある東シベリアの鉄鉱石地図をみていると、このジェレズノゴルスク市は、今後ますます多く発見されていくであろうバム沿線地帯の鉄鉱石に対する最初のアプローチであり、十七世紀のコサックたちの「イリムのとりで」のように、製鉄業の東方進出のための「最初のとりで」のように思えている。

もうひとつ重要なポイントは、ジェレズノゴルスク市が、ブラーツク・ウスチイリムスク地域生産コンプレクス（総合体）の三大中心のひとつであるということである。これは理論的に非常に複雑な問題を含む巨大な生産組織であるが、ジェレズノゴルスクは、それを濃縮したかたちでみせてくれるにちがいないと私は期待した。





ウスチイリムスク林業コンプレクスの温室



シベリアの都市についてはよく〝タイガの中の都市〟と言われるが、ここウスチイリムスクについては〝都市の中のタイガ〟と言ったほうがふさわしい。



ウスチイリムスクの幼稚園。団地のすぐそばにある。



バイカル湖岸のバルグジン自然保護区（ブリヤート自治共和国）でクロテンの生態調査をする研究者

淡水の宝庫 バイカル湖

本誌モスクワ編集部
フェリクス・プラテ

人はイルクーツクへ来るといつでも、必ず時間を見つけ出してバイカル湖を訪れるにちがいない。恐らく、名前だけで人々をこれほど強く引きつける湖はほかにないだろう。モスクワっ子やソ連欧州部の他の都市や共和国の住民で、バイカル湖を訪れ、それをいわば〝生きたまま〟の姿で見たことがある者はそう多くない。第一に、それはモスクワから遠い。五〇〇〇km以上も離れているのだ。第二に、かなり金がかかる。モスクワからイルクーツクまでの飛行機の往復切符は平均の月額賃金をほとんど下らない（一六六ルーブル）。もちろん、列車ならかなり安くつくが、モスクワを出発してバイカル湖に着くまで、まる4昼夜かかる。だからバイカル湖まで行って来たと話せば、知人たちはうらやましそうな顔をして、バイカル湖は映画や絵で見るのと同じようにすばらしいか、とたずねるだろう。

アンガラ沿いの道

ソ連には約二八〇万の湖がある。特に北の地域、水分が過剰な地域、氷河が這いずったあとの地域に多い。湖の中には西シベリアやカザフスタン、中央アジアのステップの、塩水や濃いかん水をたたえた流出口のない湖も少なくない。湖の多くはあまり大きくなく、深くもなく、面積は10haから一〇〇haがせいぜいだ。だが、カスピ海、アラル海、バイカル湖、バルハシ湖、ラドガ湖などのように、面積が数万平方kmもあるような巨大な湖もある。このうちの最初の二つはあまりにも規模が大きいので、海と呼ばれている。だが、ユニークなバイカル湖は他の湖の中でも、人間の意識の中でも、特別な地位を占めている。

われわれは車でバイカル湖に向かった。同じ方角をめざしてたくさんの観光バスやイルクーツク＝リストビャンカ線の路線バスが走って行く。

道は丘を次々に登ったり降りたりしながら、アンガラ川沿いに走っているが、川はバイカル湖の手前3－4kmのところで、湖面そのものが見えてくるころようやく見え始める。

……アンガラ川がわれわれの意識の中で他の川とどう違うのか、長いこと分からなかった。だが今回、バイカル湖の岸に立ってみて初めて分かった。流れの方向がちがうのだ。われわれは子どものころから、川は小さな流れから始まって、次第に大きくなりながら湖や海や、さらに大きな川に注ぐもの

バイカル湖の景色を楽しむツーリストたち





バイカル湖のペスチャナヤ湾



冬のバイカル湖のサクイ洞穴。波が荒く、気温が零下30度Cの時にこういう氷に覆われる。



バイカル湖のオームリ漁。漁獲量が制限されているので、昔ながらの漁法で操業が行われている。



バイカル湖で動植物の標本を集める湖沼学研究所の所員

だ、という考えに慣れている。ところがアンガラ川は逆で、川の源そのものが幅約3㎞もあり、水量豊かで、流れも速く、深い。そしてバイカル湖に注ぐのではなく、そこから流れ出している唯一の川なのだ。一七七九㎞下流でアンガラ川はさらに大きな川――エニセイ川と合流し、エニセイ川の最大の支流となる。

リストビャンカ町に入ったところでバスは止まる。観光客たちはバイカル湖の岸へ走って行き、足を濡らさないように気をつけながら、手のひらで水をすくって、満足とも感嘆ともつかない表情でそれを飲む。この有名な湖水の透明度とうまさについての話は誇張ではないか、と試すために。

われわれも同じことをやった。とはいえ、日本からの客人は、それでもいくらか半信半疑で飲んでいたが。

天然のかけがえのない奇跡

それからわれわれはリストビャンカの、文字通り湖岸にある珍しい学術施設――ソ連科学アカデミー・シベリア部の湖沼学研究所へ行った。この研究所はバイカル湖に関係する問題だけを研究しているユニークな存在である。それがどんな問題なのか、研究所の学術書記で生物学博士候補のゲオルギー・マチャシェンコが話してくれた。

バイカル湖とその特徴については多くの専門書に書かれている。この湖のすべてに精通している学術書記なら、このテーマで何時間でも話すことができるだろう。

最初にマチャシェンコは、バイカル湖がなぜユニークなのかを説明してくれた。バイカル湖は地球上の淡水全体の22％、ソ連のそれの80％を保有している。バイカル湖がたたえている水の量は、世界中の河川の総流量にほぼ匹敵する。きれいで、おいしくて、ミネラル分が少ない（塩類は1ℓ中に0・1g）バイカル湖の水は、殺菌灯で処理する以外は何の生物学的処理もせずに、地元住民の飲料水として供給されている。バイカル湖の水は最高の消費基準であるモスクワ基準――1人当り1日五〇〇ℓ――でも、ソ連の全住民に一〇〇〇年間水を保証できるほどたくさんある。

地理学者たちは、極めて近い将来、多くの国にとって飲料水不足の問題は燃料・エネルギー資源不足の問題よりはるかに深刻になるだろう、と警告している。何しろ水は、たとえば石油などとちがって、代用できるものはないのだ。その意味で、淡水の宝庫としてのバイカル湖の意義はますます大きくなりつつある。

バイカル湖は世界でいちばん深い湖で、最深点は水面下一六二〇m。湖面は標高四五六mに位置する（ソ連の地表の平均高度は四三〇m）。南北に細長く、長さ六三六㎞、最大幅80㎞。

バイカル湖の起源についてはいくつかの説があるが、地殻の変動によるものという点ではどの説も一致する。マチャシェンコは（湖沼学研究所の他の多くの学者もそうだが）、バイカル湖が形成されたのは約二五〇〇万年前だと考えている。そうだとすると、バイカル湖は地球上のどんな湖よりも一〇〇〇倍も古いことになる。なぜなら、地球上にはまだ一万五〇〇〇年以上の歴史を持つ湖は発見されていないからだ。

極めて強い地震の結果、地殻に断層ができ、周辺の山々の川が滝となって断層の割れ目に流れ込んだ――という説は確かなようだ。三三四本の川が約四〇〇〇年かかって地殻のこの割れ目を満たし、バイカル湖が誕生した。湖がいっぱいになると、水はアンガラ川を逆流し始めた。バイカル湖から流れ出ているのは、いまのところアンガラ川ただ一本で、残りのすべての川はいままでどおりバイカル湖に注ぎつづけている。その中でいちばん大きいのはセレンガ川で、バイカル湖に注ぐ水全体の50％を供給している。次がベルフニャヤ・アンガラ川（同17％）、バルグジン川の順である。

マチャシェンコの考えによれば、バイカル湖の周辺でいまでも地震が年に二〇〇〇回以上も記録されるが、これはバイカル湖の地殻変動起源説を裏づけるもの、証明するものである。概して、これらの地震は大きくはない。一〇〇年以上前の一八六二年には大きな地震が発生し、このときは入り江の一つで湖底と湖岸が10m沈下した。

……マチャシェンコ学術書記の執務室の窓から、風景の色が変わっていくのが見える。1時間ほど前には太陽が明るく輝いており、湖は鮮やかな青色をしていた。空が雲に覆われて風が吹き出したいま、湖面には波が立ち、湖は鉛色の暗い陰影を帯びてきた。ついでに、風のことに触れておくと、ここではじつに様々な風が吹き、漁師たちは昔から風を研究して、それを利用している。たとえばバルグジン川の中流の谷間では、バイカル湖を横切るように強い冷たい風〝バルグジン〟が吹く。南のトゥンカ盆地からは、湖沿いに強い風〝クルトゥク〟が吹く。オリホン島では、秋になると秒速40mにも達する突風〝サルマ〟が西北から断続的に吹く。

オリホン島はバイカル湖にある30の島のうち最大で、面積は七三〇平方㎞。ここには町が二つと飛行場があり、一五〇〇人の住民がいて、漁業に携わるか羊を飼っている。

動植物の固有種

湖沼学研究所の博物館でマチャシェンコからバイカル湖の動物相について説明を受ける。博物館といっても、それほど大きくはなく、ホールが二つあるだけだ。そこに様々の模型、バイカル湖の地史と構造を示す写真、湖に住むすべての種類の動物が展示されている。

バイカル湖には二五〇〇種以上の植物と動物が生息しているが、そのうちの$\frac{2}{3}$は固有種で、世界の他の地域では見られないものである。学者たちの考えによれば、これらの固有種はここで形成され、他の地域へ移住することができなかった。こうしてバイカル湖は種形成の中心地となり、それがこの湖の特徴の一つでもある。

われわれは興味深い展示物を熱心に見た。それらの多くは、魚、小エビ、藻、植物など、非常に小さいものばかりだ。ゴロミャンカには感動した。ハゼに似た、無色の、ほとんど透明な魚である。この魚は、中空の金属の物体なら水圧で押しつぶされてしまう（その見本が同じ展示ケースに飾ってあった）ような深いところに住んでいる。そのくせ、水面まで引き上げられても破裂しない。

有名なバイカルアザラシとオームリ（シロサケの一種）は、産業的にも重要な意味を持っている。双方とも本来は淡水産ではなく、海水産の動物だ。動物学者たちは、これらが北極海地域からやって来たものだと考えている。地球の寒冷化が始まって、氷河が北方から迫って来たとき、北方の動物たちは氷によって南方へ押し出された。これらの動物がバイカル湖に入り、そこに住みついた。湖そのものの特徴の影響でバイカルアザラシとオームリは一定の生態的な変化を遂げ、いまや重要な産物になっている。

バイカルアザラシとオームリは20―30年ほど前、減少し始めた。緊急の保護措置をとり、狩猟と漁獲を禁止したおかげで、生息数は回復し始めた。現在、バイカルアザラシは七万頭いるとマチャシェンコは見ている。数年前から、毎年五〇〇〇―六〇〇〇頭のバイカルアザラシの狩猟が許可されている。

何カ所かに残っている岩に刻まれた絵から判断すると、バイカル湖に人間が姿を現わしたのは約四〇〇〇年前のことだろう。彼らは当然、湖の豊かな魚を獲って暮らしていた。皇帝ピョートル一世（一六七二―一七二五）によってペテルブルグ科学アカデミーとその付属の大学が設置された（一七二四年）あと、地理調査隊が組織され、シベリアがくまなく調査された。レナ川とサルマ川を使って隊商がバイカル湖に入り、周辺地域に住みつき始めた。

一九〇五年にシベリア鉄道が全線開通すると、バイカル湖へどんな荷物でも運び込めるようになった。以来、バイカル湖の水運も発達し始めた。現在、バイカル地域では水運が主要な役割を果たしている。たとえばバイカル・アムール（バム）鉄道の最初の建設用資材は、まずシベリア鉄道でバイカル湖まで運ばれ、次にバイカル湖を船で北へ運ばれて、セベロバイカリスクで陸揚げされた。

……グリゴリー・マチャシェンコは博物館でわれわれにバイカル地域の交通地図を見せてくれた。博物館のホールには、いつものようにかなりの人が見学に来ていた。ソ連人や外国人の観光客や子どもたちだ。毎年約一六万人がここを訪れ、そのうちの三万―四万人は外国人だとのことである。

水をきれいにする小エビ

将来バイカル湖はどうなるか？ バイカル地域は今後どう発展するか？ バイカル湖のユニークな特徴を今のまま子々孫々に伝えるために、どういう措置がとられているか？ この点をグリゴリー・マチャシェンコに聞いてみた。そのとき仲さんがついでだがとことわって、なぜ一九六〇年にバイカル湖畔にパルプ製紙コンビナートを建設しなければならなかったのか、コンビナートの操業でバイカル湖はどの程度汚染されているかを知りたい、と言った。

マチャシェンコの答えはとても興味深く、われわれが知らなかった新しい問題点も教えてくれた。一九六六年にイルクーツクの衛星都市バイカリスクで操業を始めた溶解パルプ、上質漂白パルプを製造するパルプ製紙コンビナートは、ソ連内外の世論の注目を引いた。このコンビナートが清澄なバイカル湖を汚すのではないかと人々は不安にかられたのだ。

マチャシェンコは国にとってパルプはどうしても必要だったと前置きして、その間の事情を説明してくれた。

「パルプの生産には最小限の塩類のまじったきれいな水が必要であり、新設のコンビナートの廃水処理施設費はコンビナート全体の工費の$\frac{1}{4}$余りもかかった。いま振り返ってはっきり言えるが、湖は汚染の心配がない。汚水はあらゆる種類の浄化段階（生物学的、化学的、曝気浄化）を経る。

それでもやっぱり遠い先の後遺症を考えると、生産を完全な循環サイクルに移すべきではなかろうかと思う。問題は熱汚染で、これはバイカル湖にとってはるかに危険なものだ。

繰り返して言うが、バイカル湖の水はとても清澄だ。この湖がきれいなのは、湖の生物のおかげで、たとえば長さ数㎜の小えび〝エピシューラ〟のようなバイカル固有の生物は、微生物を食べて湖の清澄度を保持している。

これまでの学者の調査で、バイカル湖には、さまざまな塩類を湖水から抽出し、汚染物を食べる魚と甲殻類が52種いることが分かった。これらの生物は

もっぱら水温2度—8度Cのところにいて、1度でも水温が上がると死んでしまう。だからいわゆる〝熱汚染〟が発生して、バイカルの水温がちょっと上がっても、破滅的な結果を招く恐れがある。

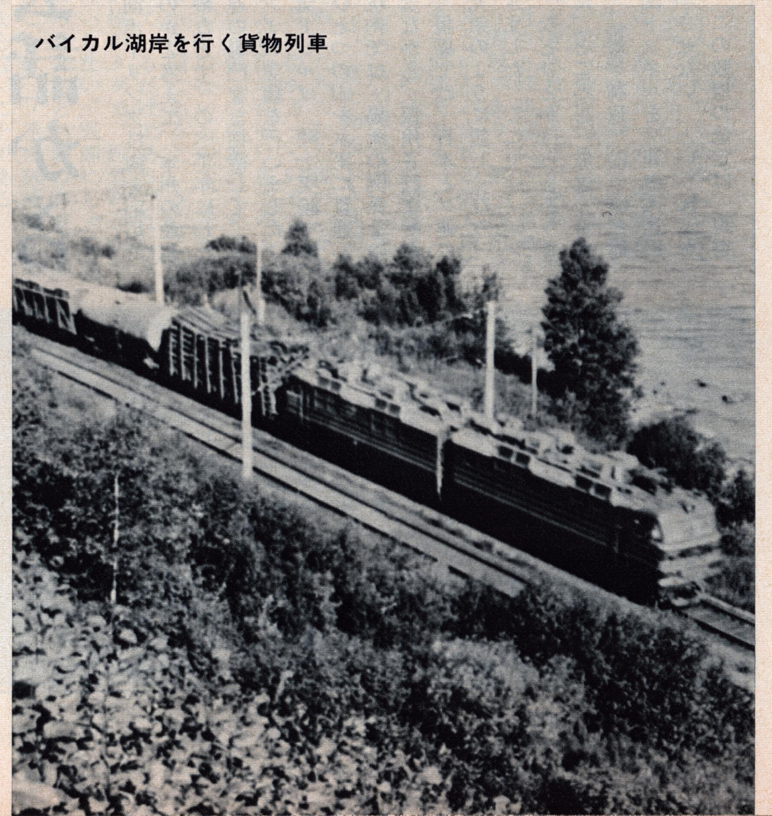
バイカル湖はいまも保護されているし、今後も保護されるだろう。バイカル湖に注ぐ大河の一つセレンガ川はモンゴル人民共和国に源を発する。ソ連とモンゴル人民共和国との間には、セレンガ川の汚染防止に関する政府間協定が結ばれている。他の大きな川も大体バイカル湖の東部を通って湖に注いでいる。これらの川の流域は農業地帯であるが、農薬が雨水や地下水と一緒になって湖に流れ込む危険は、事実上取り除かれている。この農業地帯の土地は耕地ではなく、牧地となっていて、施肥は行われていない。

バイカル湖の沿岸地帯全部を保護区にし、湖の周辺に国立公園をつくる案がある。またベルフニャヤ・アンガラ川の流域、バイカル湖の最北部、湖の北方は、バイカル・アムール鉄道地帯となり、地域生産コンプレクスがつくられるが、このコンプレクスを廃棄物を全然出さない地域にしようという意見が出ている。そしてバイカル湖畔自体には工業施設は新設されないだろう。

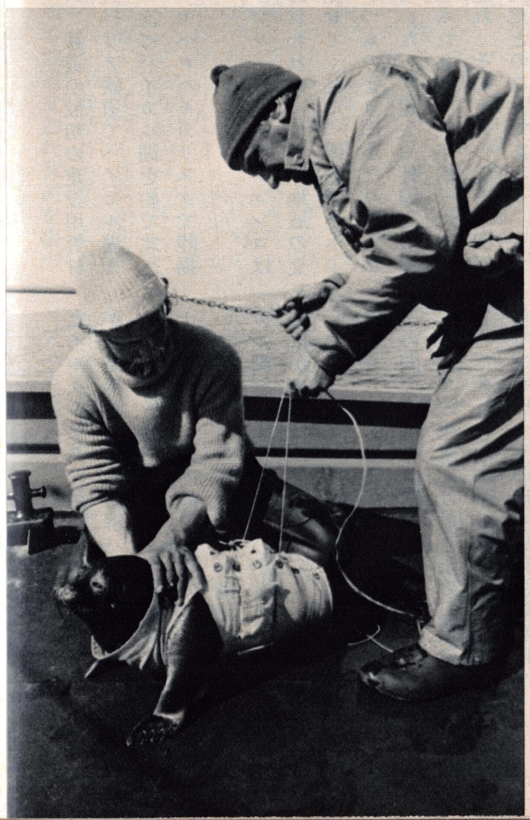
保護地帯づくりには長い年月がかかる。たとえばバイカル湖東北のバルグジン川流域のバルグジン・クロテン保護区は、一九一六年に設立されたものだが、長い間保護活動が十分に行われなかったことが響いて、有名なバルグジン・クロテンは次第に姿を消した。その後熱心な自然保護対策が効いて、一九五〇—七〇年代には見事頭数が回復し、他の地区に移住させることもできるようになった。

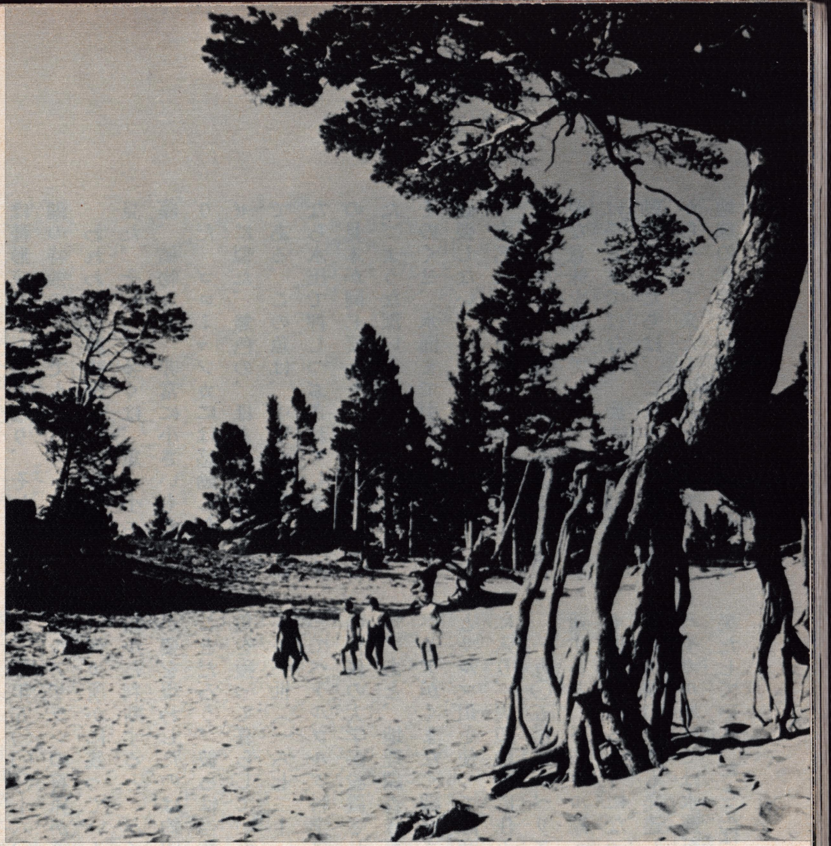
学者の間には、バイカル湖のオリホン島全体を自然保護区にしたいという意見があるが、いまのところまだ夢の





バイカル湖岸を行く貨物列車





バイカル湖畔の散策

左上　ソ連科学アカデミー海洋学研究所によるバイカル湖湖底総合調査の模様

左下　バイカルアザラシの心電図をとる実験を準備する米国のエルスナー博士（右）と湖沼学研究所員のエブゲニー・ペトロフ（1980年の写真）



バルグジン自然保護区のクロテン

段階だ。オリホン島にはちゃんと集落があって、一五〇〇人の住民（ロシア人とブリャート人）がおり、それぞれ家業にいそしんでいる。だからこの点を考え、ここの人たちの意見を聞かねばならない。そうしてこそきっとわれわれの子孫から感謝されるに違いない」

……われわれは展望台のある山――リストビャンカのいちばん高い所に登る。山はバイカル湖畔に数多く点在しているサナトリウムの一つの敷地の中にある。サナトリウムでは広大なソ連の方々の都市や村から来た人々が保養している。サナトリウムの客は年齢を問わず皆一度は展望台に登るが、展望台までの細道は胸つき八丁の急坂だ。

前にバイカル湖に来た人たちでも、ここから見る壮大な美しさには息をのむ。記念写真を撮って山を下り、レストランで昼食をとり、名高いバイカル・オームリ（シロサケの一種）のサシミを賞味し、バイカルが保養地になる将来を夢に描く。保養地になれば夏冬全世界から人々が休息に来て、この地の美しさをめでるだろう。

まったくバイカルはそれだけの値打ちのある土地だ。

※　※　※

バイカル湖の西南岸のスリュジャンカ市でバイカル湖の水をビン詰めにして売り出す――そういうニュースをモスクワで読んで、私はバイカル湖の水の味とその水を日本に持って帰りたいと言った仲さんの希望を思い出した。

こうして第一歩が踏み出されたのだから、バイカル湖の水をみやげ物としてソ連から持ち帰れる日がくるのも遠くはないと見てよいだろう。

旅行中のプラテ氏との会話から (3)

仲　弘

「ソ連脅威論」とロマンチシズム

仲「ロマンチシズムとリアリズムは、最も近い関係にあるものです。それと反対の極にあるのが、プラグマチズムと物事に対する無関心だと思います。『ソ連脅威論』は、主として、人々の世の中に対する無関心を利用して広められています。バム鉄道の最初の旅客列車に乗りたいという希望は、一見現実的でないように思われますが、日本のまわりでおこっていることに対する人々のいきいきとした関心のあらわれです。こういう人達は、『ソ連脅威論』を信じたりはしません」

プラテ「ロマンチシズムとリアリズムの親近性については賛成ですが、ソ連では、つくられた鉄道に乗る人々よりも、未開の原野に鉄道をつくる人々の方がよりロマンチストと考えられています」

仲「残念ながら日本では、鉄道は『斜陽産業』とよばれて、『鉄道つぶし』がすすめられ、せっかくつくった世界一の青函トンネルさえ、厄介もの扱いにされようとしています。私は、青函トンネルの建設に半生をかけた技術者や労働者を個人的によく知っています。彼らは、有能な技術者、労働者であるばかりではなく、視野の広い情熱的なロマンチストです。津軽海峡の地質調査のために、ソ連の石油ボーリング技術を応用できないものかと考えて、本州の最北端、竜飛岬などで、のべ半年にわたって、ソ連の専門家を招待して、水平ボーリングの実験を行いました。ソ連の電気ドリルは、陸上実験では、みごとにひとつの山を水平に貫通しました。坑内では、場所の関係その他で、残念ながら、採用されませんでしたが、現場では、日本とソ連の人達は、兄弟のように親しくなり、一緒に働きました。ここでは、『ソ連脅威論』などひとかけらもありませんでした。ところが、最近、日本の政府は、『対ソ制裁』の一環と称して、青函トンネルをソ連の人達には絶対見学させない、という決定をしました。この政府の決定は、現場の人々の対ソ感情とは全く無縁のものです。ついでながら、私は、この作業をつうじて、ソ連の石油掘削技術の優秀さがよくわかりました」

プラテ「日本の鉄道技術のすばらしさは、ソ連人は良く知っています。『シンカンセン』には、日本を訪れたソ連の人たちはみんな強い印象を受けて、帰国するとまわりの人に話しています。バム鉄道建設現場でも、ソ連やドイツの機械とならんで、コマツやカトウが高い評価を受けています。こういうことが、どれだけ日本人の勤勉さと創造能力に対するソ連の人達の尊敬を集める原因になっているか、日本の人達の想像以上だと思います」

ロシア語版『無影燈』の表紙



本だな

渡辺淳一作品の初めてのロシア語訳

――東京の病院の日常を描いた『無影燈』

昨年ソ連のラドゥガ出版所から渡辺淳一の『無影燈』のロシア語訳が出た。これは渡辺淳一の作品の初めてのロシア語訳で、訳者はガリーナ・ドゥトキナ、ビクトル・ベニアミノフ。発行部数は五万部、三一八ページ。

『無影燈』はソ連では職場小説のジャンルに入る小説（日本では社会小説とされている）である。これまでソ連では日本の古典文学、戯曲、詩歌、戦後のすぐれた作家の作品、民主文学が数多く翻訳、紹介されてきたが、日本の現代推理小説は江戸川乱歩の作品のほかはほとんど紹介されておらず、また『無影燈』のような職場小説の紹介はこれが初めてであろう。

渡辺淳一はもともとが医師なので、医師の生活、仕事や医師＝患者の関係、医療の社会問題を取り上げた作品が大半であり、『無影燈』も東京の個人病院の日常を描いている。

およそすぐれた職場小説は、その職業の深い専門知識で読者を引き付け、共通の利害で結ばれた人間関係のメカニズムをあばき、これらの人間関係の内幕をえぐるものである。『無影燈』はぴったりそれに当てはまるものであり、ましてや主人公が医療という生死にかかわる分野で働く医師であるから、読者の興味をそそること間違いなしである。

ではこの小説に対するソ連の読者の評判はどうか？　日本のあれこれの生活面を描いた大多数の現代日本文学作品と同じく『無影燈』も、ソ連の読者の関心を引いた。この作品の中で取り上げられた数々の問題については、『無影燈』のロシア語版のあとがきが触れている。あとがきを書いたのは、長く病院の外科医をしてきたソ連の有名な文学者ユーリー・クレリンで、クレリンの作品の主人公たちも医療にたずさわっている人々である。

クレリンは、渡辺淳一の『無影燈』が取り上げた問題は二つに分けられると見ている。第一の問題は、不治の病にかかったとき人はどうすべきか、医師と患者の身寄りは患者にどう対処すべきかという問題であり、第二は患者のふところ具合に左右される個人病院の職員と患者の関係である。

クレリンの意見では第一の問題は全人類的な性質のものであり、『無影燈』を読めば、真に知的で人間的な人々は、その人たちの住む国のいかんを問わずみんな似かよっていることが分かる。個人病院の医療は患者のふところ次第という第二の問題は、ソ連の読者にはなじみのないもので、そういうことがほかの国にあるということを聞いて知っているだけである。なにせソ連では医療がタダで、医者にかかってもお金はいらない。医師にとって患者のふところ具合など無縁の存在であり、そんなことは、ソ連の医療関係者には思いもよらないことである。

医療費のことが頭にないのは、その人の道義的信念のせいではなく、ほかの社会的条件のせいなのである。苦しんでいる患者を前にしたら、医者は患者の社会的地位や財産など考える余地がない。痛みがあって、診断があるだけで、ほかには治療の付随条件は一切ない。だから患者しだいでサジ加減が変わるということは、ソ連では不正で非人間的なことと見られている――クレリンはこう書いている。

☆　☆　☆

新刊配布図書の紹介

☆『ソ連の平和政策資料集　軍拡競争にストップを！――ＩＮＦ交渉とソ連の立場』（Ｂ６判、182ページ、ノーボスチ通信社発行）

ソ連の指導者たちの平和政策に関する演説、声明、書簡集。

☆『アメリカのグレナダ侵略――資料と証言』（Ｂ６判、118ページ、アジア書房発行）

米国のグレナダ侵略を詳しくコメントした必読の書。写真も豊富。

送料は各二〇〇円、両方合わせた送料は二五〇円。

※　※　※

ノーボスチ通信出版局の日本語パンフ（新書判変形）

☆『軍縮』（63ページ）

☆『シベリアの資源』（72ページ）

☆『ソ連――百問百答』（174ページ）

以上３冊セットの送料二五〇円。

☆レーニン論文の抜粋集『革命党の戦略戦術論』（116ページ）

☆『ソ連邦と民族解放運動』（136ページ）

☆『自然の保護』（56ページ）

以上３冊セットの送料二五〇円。

１冊の送料は一七〇円。全６冊セットの送料は三〇〇円。

以上の図書（無料）をご希望の方は、送料（切手可）を添えて、ソ連大使館広報部へお申し込み下さい。

30万人の入場者を集めた

第1回全ソ彫刻展

昨年末モスクワの中央美術家会館で第1回全ソ彫刻展が開かれた。展示作品二〇〇〇点余り、出品者約一〇〇〇人というこの大がかりな彫刻展は、現代ソビエトの彫刻を初めて全国的な規模で展示したもので、まずこの点が注目を引いた。

ソビエト美術史上これほど多彩で出品者の多い展覧会は初めてで、大きな展示館の三つのフロアと入口前の広い草地は、ブロンズ、大理石、木、合成樹脂、石膏、粘土の作品で埋まった。

どんな手法やジャンルの彫刻でも、つねにソビエト彫刻の主流はリアリズムであり、同時代人の形象を表現しようとする意欲であることを、こんどの彫刻展は改めて示した。また彫刻展は多数の新人の作品を紹介しただけでなく、ソビエト彫刻の独特な民族的多様性を示した。

出品点数の多いことや手法の多彩さという点で、ロシア連邦共和国の彫刻家の作品はほかの共和国のものにまさっていた。またバルト海沿いの共和国、ウクライナ、モルダビアの彫刻家の優美な作品は、



非常に印象深かった。アルメニアの彫刻家たちは人物の心理の隈や人物の外見、内面世界に対応して表現の手段を変える技量を示していた。それと反対にアゼルバイジャン、タジク、キルギスの彫刻家の作品は普遍的で象徴的だった。ウズベク、トルクメンの彫刻の特徴は、叙情性が濃く、線がなめらかで優雅なことだった。

第1回全ソ彫刻展の3カ月間の入場者数は約三〇万人だったが、これは彫刻の人気がソ連の美術愛好者の広い裾野にまで広がっていることを証明しており、彫刻家の今後の創作活動に刺激になることは間違いない。



1　彫刻展の会場となったモスクワの中央美術家会館

2　ビャチェスラフ・クルイコフ（45歳、モスクワ市、ソ連国家賞受賞者）—『レーリ（スラブ伝説の恋愛の神）』（ブロンズ、1983年、高さ45cm）

3　エレン・コーリク（42歳、タリン市）—『海のフローラ』（ブロンズ、1980年、高さ160cm）





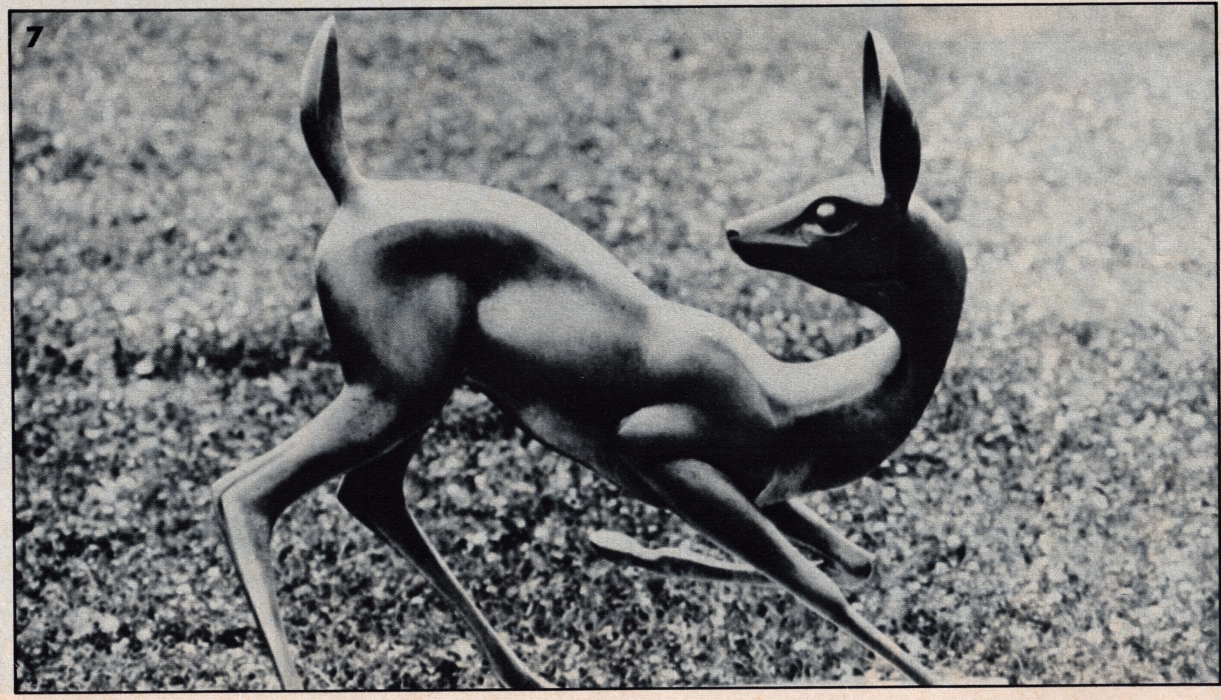
4　インタ・ベルガ（29歳、リガ市）——『もしかして……』（ブロンズ、1982年、高さ75cm）

5　アリドナ・ネナシェワ（56歳、モスクワ州）——『お日さま』（ブロンズ、1983年、高さ156cm）





6



7

6　アフタンジル・モナセリーゼ（57歳、トビリシ市、グルジアのレーニン・コムソモール賞受賞者）——『旧市街の〝ベリカオバ〟(グルジアの即興の仮面劇)』(1981年)

7　ビクトリア・ベリシェ(52歳、リガ市）——『ノロ』(ブロンズ、1983年、高さ87cm)



8

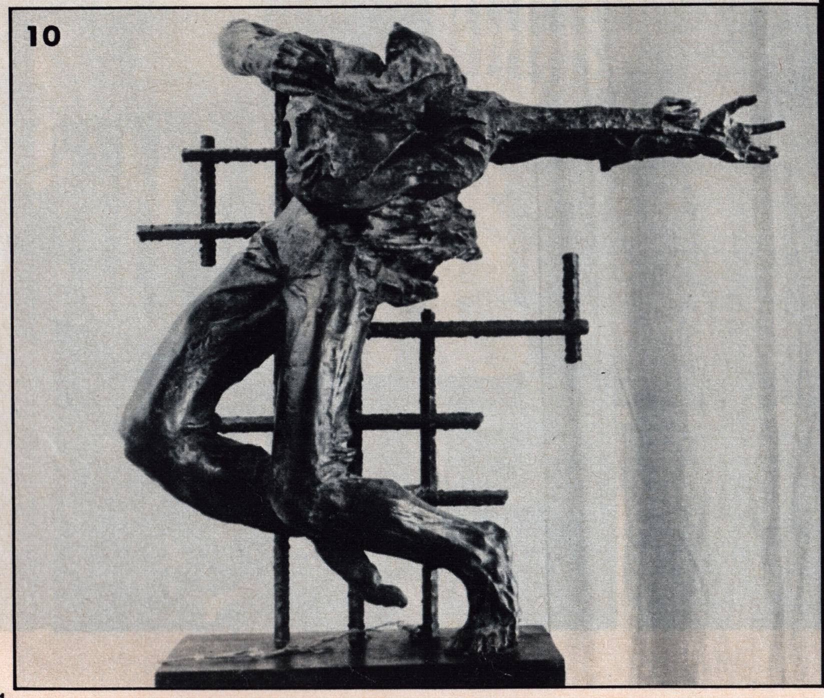
8　エドガル・ビイエス（53歳、タリン市）——『赤軍行進曲』(ブロンズ、1982年、高さ130cm)

9　オレグ・キリューヒン(55歳、モスクワ市、ロシア連邦共和国人民美術家、レーピン記念ロシア連邦共和国国家賞受賞者）——『世界に平和を』(1980年、銅)

10　ニコライ・オレイニク(29歳、キエフ市）——『虐殺されたチリの歌手ビクトル・ハラ(1938—73)』（ブロンズ、1982年、高さ94cm、幅101cm)



9



10

バレエマスターの祝賀の夕べ





ボリショイ劇場の首席バレエマスター（振り付け師）でバレエ界の巨星と言われるユーリー・グリゴロビチは、さきごろボリショイ劇場でのバレエ活動20周年を迎え、関係者たちの祝福を受けた。

グリゴロビチの演出したバレエ――『ロミオとジュリエット』、『スパルタクス』、『黄金時代』などは、多くの国々の観客の好評を博した。いまグリゴロビチはグラズノフ（一八六五－一九三六）のバレエ『ライモンダ』の演出を準備中である。グリゴロビチの祝賀の夕べではボリショイ劇場の主立った踊り手たちがこれらのバレエのフラグメントを踊った。

写真はボリショイ劇場のスタッフから祝福を受けるグリゴロビチ（右上の写真中央）。





故郷の子供たちに絵画の贈り物

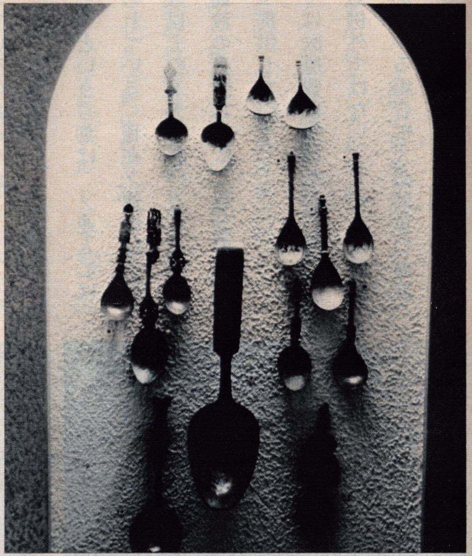
ソ連欧州部の南にあるクラスノダル地方のアルマビル市に児童図書館の新館が建設された。この市の出身で有名な作家のサッワ・ダングロフさんは児童図書館の建設発起人の一人だが、このほど永年自分が収集してきた絵画のコレクションを図書館に寄贈した。いまソ連と外国の多くの有名な画家の作品が図書館の一室に展示され、アルマビルの子供たちを喜ばせている。

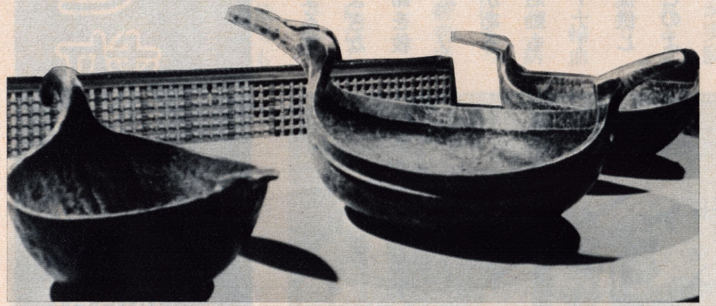
写真右は新築の児童図書館、上は寄贈した絵画の解説をするサッワ・ダングロフ。

ロシアの木製食器展

モスクワ中心部の「ニキトニキの三位一体」教会（国立歴史博物館の分館）で開かれた「ロシアの木製食器」展では、各種用途の食器類やその製造工具が展示されており、入場者が熱心に見入っている。

遠い昔から食器類の製造には木材をはじめ根、枝、樹皮が使われてきた。さじ、皿、しゃくしなどの簡単な生活用品は民間の工匠の手で芸術品となり、形もとても凝ったものになった。写真下は鳥や船の形をした17－19世紀の木製しゃくし。









ビリニュスの家族楽団

バルト海沿いのリトワ共和国の首都ビリニュスに住むガイジャウスカス一家の家族楽団（写真上）は、地元で評判が高い。この楽団に入っている10人の子と13人の孫は皆、幼い時から音楽や民謡に慣れ親しんできた。家長のユルギス・ガイジャウスカスはリトワの有名な作曲家で、多くの音楽作品を手がけてきた。楽団はリトワ共和国の歌の祭典などに出演し、多くの名誉賞を受けた。写真左は孫たちに囲まれたユルギス・ガイジャウスカス。

生命を救う贈り物

――ソ連の献血運動

本誌記者 ユーリー・アンドレオッチ

心臓手術、難産、交通事故による重傷……いずれも多量の出血をよぎなくされるが、こうした場合、生命を救うのはドナー（献血者）の血液だ。ソ連にはさまざまな医療サービスがあるが、専門の輸血ステーションの活動もその一つ。輸血ステーションはドナーから血液をもらい、医療機関に提供している。ソ連の献血システムはどのようになっているのだろうか？

〝ドナー〟という言葉は、ソ連人にはよく知られている。現在ソ連には一〇〇〇万人以上のドナーがいる。この人たちは血液の必要な人に、自分の血液を無償で提供している。

ソ連では医療費は無料だが、高くつく輸血も例外ではない。しかも血液が必要なあらゆる場合に、必要量の血液が提供される。受血者は自分がもらった血液を同志的な相互援助の行為と考え、供血者も同様に考えている。



血液学・輸血中央研究所で献血中のドナー



左　輸血で助けられた母子と、献血をした人たち。

一般への働きかけ

偉大な発見の一つである血液循環の法則は、一六二八年にイギリスの生理学者ウイリアム・ハービーによって発見された。しかし輸血の試みは長いこと多くの失敗を重ねた。20世紀初めになってようやく、沢山の悲劇の原因が解明された。人間の血液が四つのグループに分かれることがわかったのだ。供血者と受血者の血液型が適合しないと、致命的な血液凝集現象が起こる。

科学的な根拠に基づいて患者とドナーの血液型の特質を考慮した世界初の輸血は、一九一九年６月20日、ソビエトの外科医ウラジーミル・シャモフ医学アカデミー会員によって行われ、成功した。その７年後、この方法が実験段階を終えて実際の医療に使われるようになった時は、ソ連政府の決定で、モスクワに世界で最初の血液学・輸血中央研究所が開設された。そして「病人には最大の利益を、献血者にはまったくの無害を」という標語が、研究所の活動の原則になった。

しかし献血という概念を人々になじませるのは容易なことではなかった。幾世紀にもわたって、たとえ少量でも血液を失うのは危険、と信じられていたからだ。最初の頃は、病人の近親者が献血する例がほとんどだった。しかし時がたち、献血への認識も変わった。一九三六年にはソ連では二万二〇〇〇

回の輸血が行われた。その5年後、輸血回数は10倍に増えた。

献血が本当の意味で大衆的になったのは、ソ連国民の対ドイツ・ファシスト戦（一九四一—四五年）の時代だった。戦争中には五五〇万人以上が献血をし、一七〇万ℓ以上の保存血液が病院に送られた。

平和な時代でも輸血用血液の需要は大きい。輸血は外科、産科、婦人科、内科、小児科にとって依然として欠かすことができない。したがって無償の献血は今日でも一層広がりをみせている。

ソ連では毎年約一四〇〇万回の手術が行われているが、外科の大手術で輸血をしないで済ませられるものはない。特にさまざまな形態のがんや心臓・脈管系疾患の治療における輸血は成功例が多い。輸血のお陰で、以前なら死を免がれなかった多くの病人が、生命をとりとめた（心臓手術には5ℓから12ℓの血液が必要）。しかも、どんな手術の場合でも血液は確保されているのだ。



"生きている"薬

多くの国が長い間、代用血液の開発に力を注いできたが、多大の努力にもかかわらず、いまだに血液というこのユニークな生物学的液体に完全に取って替わるものは見つかっていない。血液はいくつかの細胞成分と一〇〇以上の血しょう成分を含んでおり、その一つ一つが独自の役割を果たしている。例えばヘモグロビンの場合、このたんぱく質が血液中に存在しなければ、基本的な生命維持プロセスの一つ——呼吸——すら不可能になる。

血液はそれ自体が"生きている"薬であるというほかに、多くの有効な薬剤の原料にもなる。ガンマグロブリン、血しょう、乾燥血しょう、たんぱく質、プロテイン、いろいろな血清などがそれである。

呼びかけに応えて

ソ連では全国どこでも、必要な場合にはいつでも、医師の献血の呼びかけに即座に応じる習慣ができている。例を少し挙げよう。

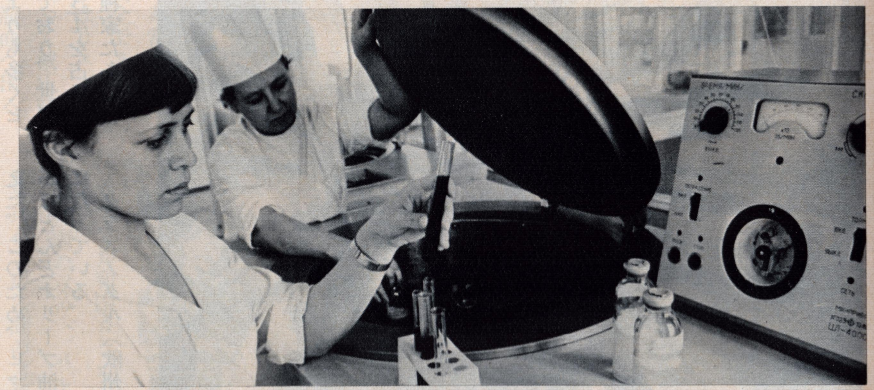
ヘルソン市（ウクライナ共和国）の第1産院でのこと。20歳の労働者スベトラナ・シロフスカヤは出産の際ひどい出血を起こし、意識を失った。スベトラナの血液が珍しい型だったため、事態はさらに深刻になった。保存血液のストックが切れそうになった時、医師団はラジオで市民に呼びかけることにした。すると文字通り数分後には、最初のドナーたちが駆けつけ、献血を申し出た。15時間にわたって56人の血液がその場で直接輸血された。3昼夜たってスベトラナは完全に意識をとり戻した。

イルクーツクの小学生アリョーシャ・ラスプーチンは、抜歯のあと出血が止まらなくなった。少年は血液中に凝固性因子のない血友病だった。アリョーシャ少年を救えるのは新鮮な血液から作られる調剤だけだった。最初にドナーになったのは病院の看護婦たちだったが、医師は多量の血液が必要なことを知っていた。供血者五〇〇人の血液でやっと患者を救えたというよく似たケースが以前あったからだ。しかしラジオで少年の容体を聞いたイルクーツク市民——学生、労働者、軍人ら数百人が、朝早くから輸血ステーションを訪れ、必要な量だけ献血をしてくれた。少年は今、元気に勉強を続けている。

輸血の現場では時折、全く思いがけない出来事に遭遇することがある。モスクワのある労働者が交通事故で重傷を負った。至急輸血が必要とされた。医師が手元にあった血液のアンプルを取って、供血者のデータを書き込んだレッテルを見ると……そこには手術台に横たわっている人の氏名が書き込まれていた。その人は少し前、ドナーとして血液を提供していたのだった。

右　元気になった血友病のアリョーシャ・ラスプーチン（左）。お姉さんのリュドミラとお母さんと。

下　アリョーシャ・ラスプーチンを救うために、ドナーの血液で輸血の準備をする看護婦のタチヤナ・オフチンニコワとラリーサ・ゴリュンコワ。



ドナーになるには？

この人道的な大衆運動は、ソ連赤十字社・赤新月社同盟の保護の下に組織されている。同盟の職員の指導で医師と看護婦の編成チームが工場、コルホーズ、大学、各種機関のドナーのもとへ直接出かけてゆく。

ドナーは、性別、職業にかかわりなく18歳から60歳までの健康な人ならほぼ誰でもなれる。ドナーは自分が合意した上で、普通二〇〇ccから四〇〇ccまでの血液を提供する。当然その前に、綿密な医学的チェックが行われる。

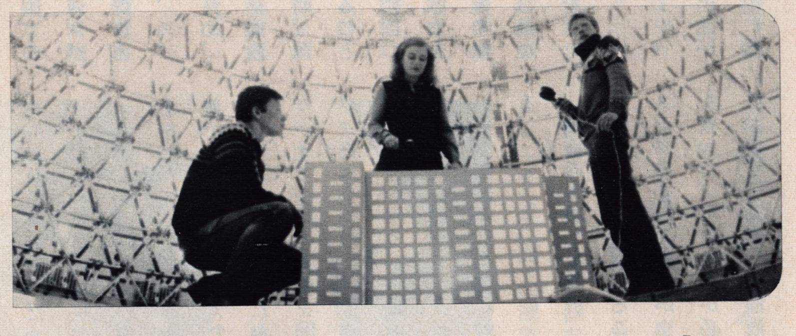
ソビエト国家はドナーに対し、最大限の特典を与えている。ドナーは献血する日は仕事から解放されるが、賃金はカットされない。ドナーは献血のすぐあとに追加の完全有給の休日をもらうか、あるいは年次休暇にその休日を足すことができる（どちらかを選択）。ドナーはサナトリウムや休息の家の無料の利用券を得る優先権を行使できる。こうして社会は、かけがえのない贈り物をしてくれた人々に感謝しているのである。

話題を拾う

照明実験用の新型装置

モスクワのソ連国家建設委員会付属の建設物理学研究所は、このほど世界に例のない装置——「空・太陽・地上」コンプレクスを完成した。この装置を使えば建物の照明に関するさまざまな問題を解決することができる。

装置は直径21mの半球形で、二〇〇wのキセノンランプが一四七四個ついている。これらのキセノンランプの放出スペクトルは自然の太陽の散乱光に最大限近づけられている。明るさは自動的に調整でき、明るい熱帯の昼間から深夜までのさまざまな照明条件が作り出せる。装置内の中央に直径4mの穴があり、そこへ建物の模型を下からせり上げて設定する(写真右)。実験者が入りこめるほど大きな模型が使えるので、研究結果の確実性がより高くなる。この装置によって建物内部の照明の快適度を前もって確かめ、人工照明と自然照明の正しい組み合わせを知ることができる。



ヒマワリの種からオリーブ油

気候の関係でソ連ではオリーブは育たない。従ってオリーブ油も採れない。だが十分代用できる植物がある。それは、どこにでもある、誰もが知っているヒマワリだ。

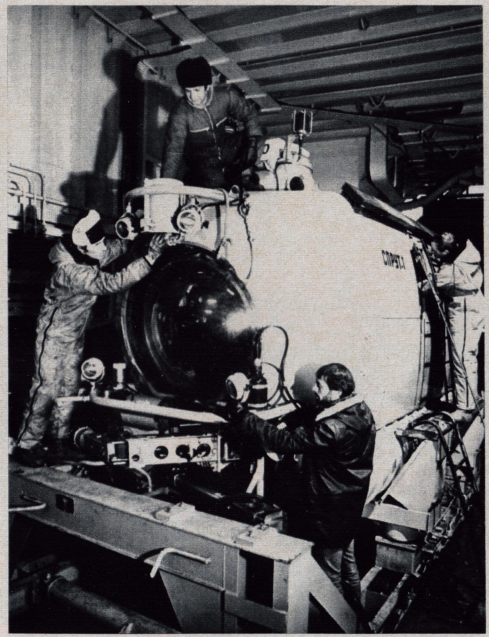
ソ連はどの国よりも多くヒマワリを栽培しており、世界の播種面積の約3/4を占めている。ソ連の育種家たちは種子の中に50%以上の脂肪分を含有する品種をすでに開発している。いくつかの品種では脂肪酸の成分が本質的に変えられ、オリーブ油に多く含まれるオレイン酸の含有量が増えた。このため、ヒマワリ油がほとんどオリーブ油のようになっている。

クラスノダル(欧州ロシア南部)の全ソ油脂植物研究所はヒマワリの研究で有名だが、このほど茎の低い数品種を開発した。これらの品種だと茎の低い分だけ密植でき、面積あたりの収量を上げることができる。写真左は同研究所の環境調節室で行われている交配種〝スキフ〟(スキタイ)を作るための人工受粉。



深海潜水用の圧力調整装置





海底の油田やガス田の採掘が盛んになるにつれ、海底設備の点検・修理をする必要が増えてきた。ソ連でつくられた圧力調整装置スプルート1号(写真上右)は、深海での作業のために特に開発されたもの。これによって潜水夫が潜水・浮上するのに必要な時間が短くなり、潜水作業の安全性が高まった。

潜水夫は潜る前に潜水母船内のスプルートに長時間入って、潜水深度に応じて圧力を増して体を慣らしておく。こうすると短時間で非常な深さまで潜水しても安全である。浮上するときもやはりスプルートにいったん入って減圧時間を過ごしてから海面へ出る。

一九八三年にソ連の潜水夫たちはこの圧力調整装置を使ってバレンツ海に潜り、潜水深度二四〇m、潜水時間2時間5分の新記録を達成している(写真上左はそのひとり、グリゴリー・マトベンコ)。

人間の言葉を〝話す〟ゾウ



カザフ共和国カラガンダ市の動物園のゾウ、バティル(写真右)が人間の言葉を話すことについては、本誌昨年18号でも紹介した。今回は写真をご覧頂いて、バティルのこの才能がゾウののどの構造の特殊性と赤ん坊の時から母親と離されて動物園で暮らしたことによるもの、とする動物学者の説明を思い出してもらいたい。つぶやき声のようなバティルの言葉は、えさをやる時に飼育係がよく言う言葉——「バティルはいい子」「バティルはえらい」「子ゾウに水やった?」等々なのだ。

ただ、まだよくわからないのは、バティルが言葉をどの程度理解して使っているかということ。しかし、これも単なる条件反射のようだ。



マイムを取り入れたコミックなステージ

モードを紹介する劇団

本誌記者 リュドミラ・ルブツォワ
カメラ オレグ・マカロフ



“音楽”をモットーにしたモードのデモンストレーション。プリント模様の軽やかなシルクを使用。



19世紀のロシアの女性はこんなドレスを着ていた……

あらっ、わたしたち、劇場のショーを見に来たのだったかしら？ でもこれは普通の劇場のショーとはちょっと様子がちがいます。場所も本当の劇場ではなく、モスクワの中央展示館（10月革命50周年広場にある旧調馬場）ですし、ここでは今、青年美術家展が開催中です。この展覧会には絵画、グラフィック・アート、彫刻のほかに、装飾・応用美

術の作品も展示されています。応用美術の中には服飾デザインも含まれ、いろいろのニューモードを、新設のモード劇団の俳優が寸劇形式で披露しました。この新企画のファッションショーをちょっとのぞいて見ましょう。

次々に場面が展開します。

フレッシュ・ギャルが2人、激しいフォックストロットを踊っている。"アレグロ"と"アコード"と名付けられたコートのデモンストレーションです。青年がもう一つ別のデザインのコートを持って来て女の子に着せます。

リズミカルな現代的サウンドにのって、鮮やかなジャケット、パンツ、ドレスに身をつつみ、軽くて便利なローヒールをはいたヤングの一団がステージに上がって来る。司会者のコメントが流れる——「これが現代のファッションです。陽気で、鮮やかで、実用的。このファッションの共通のモットーは"テンポ"。実用的でスポーツタイプのデザインです」

あくまでも軽く薄い素材を使ったロングドレスにレースの日傘をさしたギャルたちが、チャイコフスキーの音楽にあわせてステージに登場。ボール遊びをする者、そぞろ歩きする者、一人はなれて本を読む者。ギャルたちの動きはなめらかで急がず、衣装は自由で軽く、柔らかく流れるような素材は叙情的な情景を作り出す。

こういう風俗的場面は大きな効果をあげます。ステージで繰り広げられるショーの筋のある展開を追うことによって、観客はスムーズにあれこれのファッションを理解し、評価することが出来ます。

このファッションショーを演出したナタリア・エーシナはこう言っています——「これが普通のショーと違うのは、ドラマツルギー(劇作法)を基に制作したのではなく、コスチュームやドレス、それらを彩る小物などの作品がショーの基盤になっている点です。いずれもソ連美術家同盟モスクワ支部装飾・応用美術セクション会員の若い美術家たちが制作したものです」

このショーに登場した俳優が所属するモード劇団の創設はエーシナの発想。エーシナは中等学校卒業後モスクワの全ソ・モード会館でファッションモデルとして働いた経験を持っています。その後、国立演劇大学の軽演劇部を卒業。

モード劇団はパントマイムと舞踊法を統合した、軽演劇の新ジャンルとでも言ったらいいでしょうか。ファッションを寸劇スタイルで見せることによって、青年が服装に自分のスタイルを発見し、外形ではなく物の様式を見つめ、服装と性格を調和的に結びつける手助けをするものです。団員は20歳を越えたばかりの男・女優9人。舞踊学校の卒業生とファッションモデルの経験がある演劇大学の学生です。

モード劇団のコスチュームは普通の劇団の戯曲のようなものです。ですからこの場合、ファッションデザイナーは劇作家ということになります。ショーの制作に入る前にデザイナーはデモンストレーションしたいコレクションを選びました。

青年美術家展でのプレゼンテーションのために、デザイナーはコレクションを目的とスタイル別に3グループ——活動的なスポーツタイプ、合理的タイプ、情緒的でロマンチックなタイプにふり分け、それぞれのグループにふさわしい寸劇の主題を見つけ、俳優と音楽を選びました。

こうして最初に紹介したもののほかに、"私とスポーツ"、"私とイブニングドレス"、ロシアの女性の民族衣装、サラファンを取り入れた"青年の炉端の集い"、古いモチーフによってデザインされたドレスを披露する"オールド・モスクワ"、とその他の寸劇がショーに組み込まれました。

目下のところ、モード劇団によるファッションショーの制作費はソ連美術家同盟が負担しています。しかしソ連文化省およびソ連の最も大衆的な青年組織——コムソモールの中央委員会はプロのモード劇団創設の考えを支持しています。華やかなファッションショーは青年に芸術的センスと服飾文化をはぐくむのにもってこいの手段だと見ているからです。劇団が自分たちの常設のステージを持つようになるのも間近いことでしょう。他の都市での公演も予定されています。劇団の人気はもう立証ずみです。展覧会場で行われたファッションショーに大勢の観客が集まったのが何よりの証拠です。


エレーナ・ルミャンツェワのコレクション"オールド・モスクワ"


女性も男性もみんながこのショーを楽しんだ……

▼ファッションショーのフィナーレ

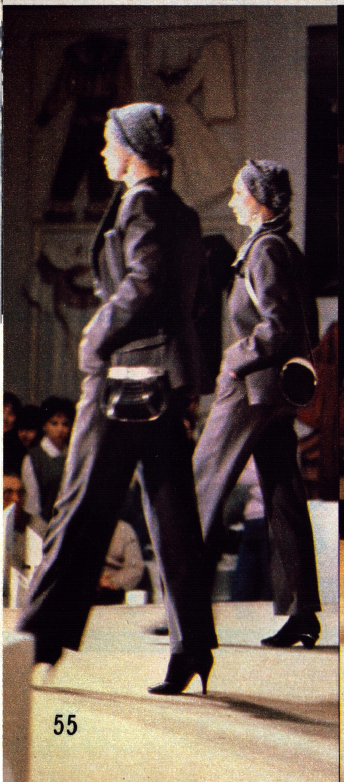



ファッションショー開幕前の期待


ショーを演出したナタリア・エーシナ



エレーナ・ボトワ、グリゴリー・ゴリドゲリド、エレーナ・ルミャンツェワのデザインによるヤング向きファッション



〝アルファ〟と〝オメガ〟のスーツは実用的で抑制のきいたデザイン。



ロシア風コスチュームをモチーフにしてデザインされたドレス



〝アレグロ〟と〝アコード〟と名づけられたコート



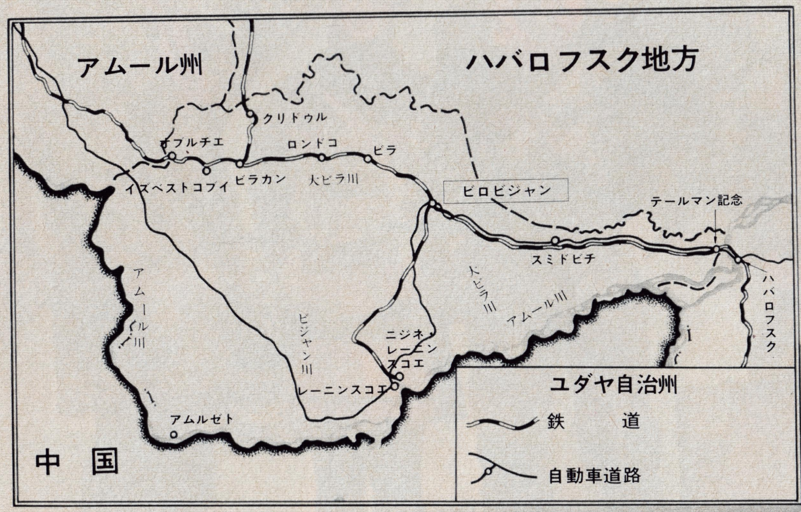
〝空色のファンタジー〟という名のドレス



〝私とイブニングドレス〟――エレーナ・ルミャンツェワのデザイン。



レフ・シャピロ・ユダヤ自治州党委員会第一書記





50周年を迎えたユダヤ自治州

——現代史上初のユダヤ人の国家機構

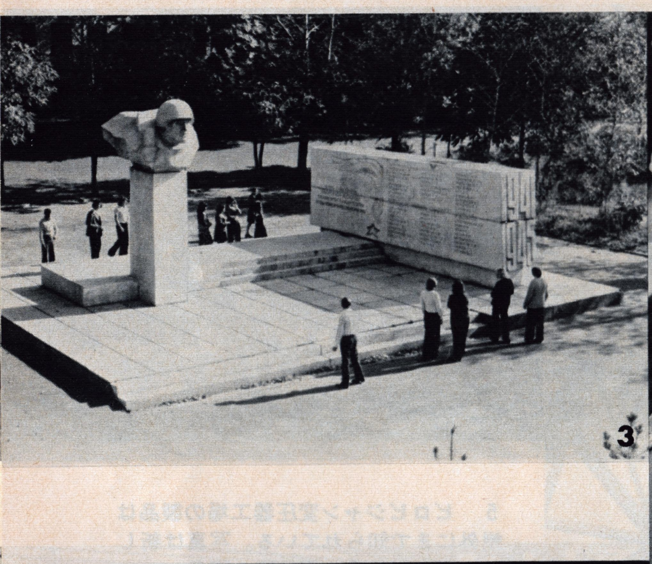
ソ連極東にあるユダヤ自治州（ハバロフスク地方に入る。面積三万六〇〇〇平方km、人口約二〇万人、行政中心地はビロビジャン市）は、この5月7日で創立50周年を迎えた。この自治州の歴史と現在についてレフ・シャピロ・ソ連共産党中央委員候補・ユダヤ自治州党委員会第一書記（57歳）に話してもらった。（聞き手　エブゲニー・ブガエンコ本誌記者）

——ユダヤ自治州の創立の歴史について話してほしい。たとえばどうしてユダヤ自治州を極東のアムール川沿岸につくることになったのか？

一九三四年5月7日、全ロシア中央執行委員会（当時の最高権力機関）はユダヤ自治州の創建を決定し、ロシア連邦共和国に入る自治州（いま同共和国にはユダヤ自治州のほかにアディゲ、ゴルノ・アルタイ、カラチャエボ・チェルケス、ハカスの自治州がある）に与えられる（法律で定められた）一切の権利を付与した。

まず第一に私が言っておきたいのは、ユダヤ自治州が現代史上初のユダヤ人勤労者の国家機構であるということである。当然ながら国づくりには領土が必要であるから、ソ連政府は新しい自治州のために極東の空いた沃土を割いた。

当時は、極東地方へ行って、都市や工業中心地を建設しようという青年向けの呼びかけが、ソ連全国津々浦々に響き渡っていた。ちなみに極東の大都市コムソモリスク・ナ・アムーレ〔アムール河畔のコムソモールのまち〕は、情熱に燃えてこのまちを建設したコムソモール員（共産青年同盟員）たちを記念して付けられた名である。だから当時大勢の人々が時には家族連れで極東に出向いてきた。そしてそのころアムールの沃土をユ







1　州の中心都市ビロビジャン

2　配達されたばかりのイディッシュ語のビロビジャネル・シテルン紙に見入る母娘

3　第2次世界大戦の戦死者の記念碑（ビロビジャン）

4　ビロビジャンのユダヤ音楽小劇場のオペラの舞台

ダヤ人国家機構の土地に当てるべきではなかろうかという考えが生まれたのだ。

しかし問題は簡単ではなかった。大民族が小民族を抑圧したり、強制したりすることが絶対ないように、慎重に問題を解決しなければならなかった。移民の第一陣が東部に到着したのは一九二八年で、ユダヤ自治州を創建することに決まったのはそれから6年もたった一九三四年である。なぜ6年も間をおいたのだろうか？　それは国が、強行を手控え、まずユダヤ人世帯が東部に行って自分の自治体をつくる希望があるかどうかを、実地に実際の経験で点検しようと思ったからである。永年の実験のすえ自治州創建の正しさが証明され、何千という人々が政府決定を歓迎し、創建に情熱を燃やした。

日本の読者の皆さんも知っておられるとおり、民族的抑圧のひどかった帝政ロシアでも、ユダヤ人ほど抑圧され、ほかの諸民族から引き離されていた民族はなかったろう。ユダヤ人は全国に散らばって暮らし、いたるところでよそ者扱いにされた。だから移住者たちが情熱を燃やしたのも当然である。

政府はユダヤ自治州創建に関する法令を採択しただけでなく、機械、設備、建設資材や専門家をユダヤ人の新移住地に送って、移住者の生活設計を助けた。重ねて言っておくが、ユダヤ人世帯と一緒にロシア人、ウクライナ人、ベロルシア人など希望者全員が新しい土地に移った。ソ連政府はユダヤ自治州をほかの土地から切り離された民族主義的な地域にするつもりはなかった。民族の違いを超えたインタナショナル的団結は、ユダヤ自治州の人々を結合してきたし、いまも結合している。

——ユダヤ自治州の現状について話してほしい。

いま自治州には各種工業企業が50ある。そして毎年新しい企業が操業を始めている。建設基地が増加、強化され、珪土れんが、鉄筋コンクリート製品、大型パネル規格住宅の製造工場が稼働している。人口七万五〇〇〇人のビロビジャンは、極東の軽工業の中心地の一つであり、靴下・ニット工場、靴工場、縫製工場などの大工場がある。

州の主導的企業は穀物、大豆、トウモロコシ収穫用の自走キャタピラ・コンバインを製造するダリセリマシ工場である。ビロビジャンには東シベリア・極東地域用農業機械開発設計局がある。

極東最大のセメント工場のあるチェプロゼルスク町も成長しつつあり、この町の近くにはサケの稚魚の養殖場がある。鉱山の町ヒンガンスクにはスズの大採掘コンビナートがある。この州では鉄鉱石の最大級の鉱床が発見されているので、将来鉄鉱石採取業も発達する見込みである。

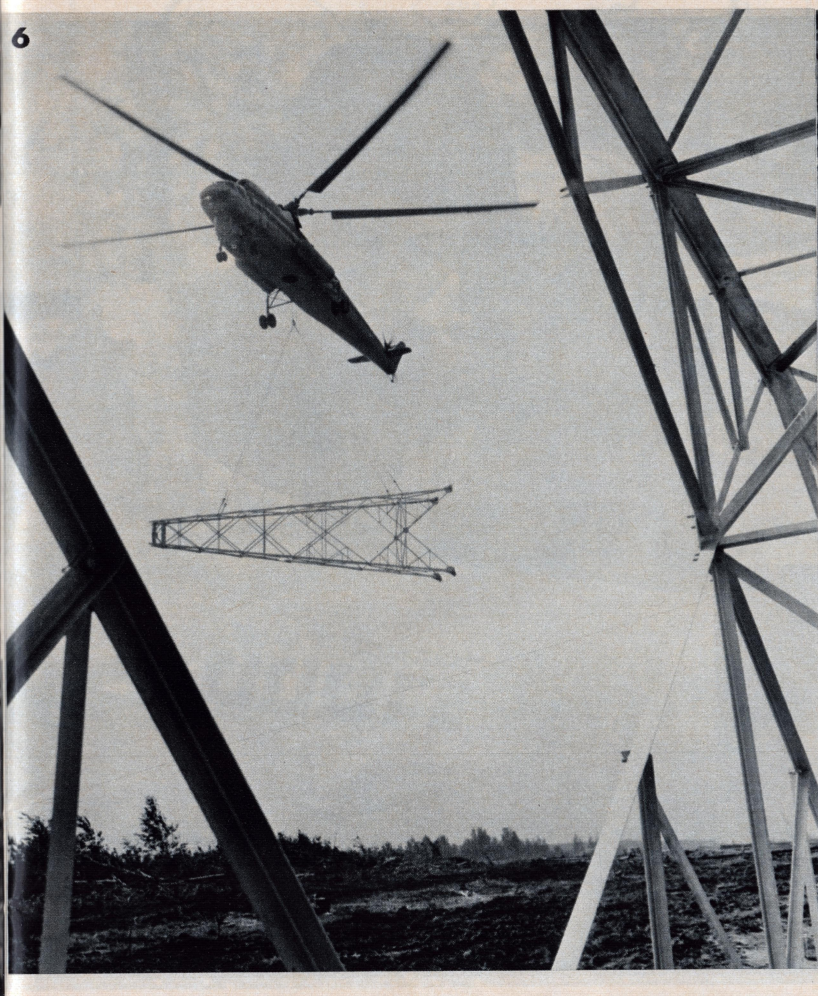
州には36の高度に機械化された大ソフホーズ（国営農場）、二つのコルホーズ（協同農場）、大養鶏場、農業試験所がある。州の農畜産業の物質的・技術的基盤の強化費（一九八一—八三年）は一億ルーブル余りにのぼった（1ルーブルは約三〇〇円）。

ビロビジャンにはイディッシュ語で芝居をやるユダヤ・ドラマ劇場があり、レパートリーにはユダヤ文学の巨匠ショロム＝アレイヘムら劇作家の諸作品が入っている。ビロビジャン音楽小劇場の名声は州外にもよく知られており、海外公演の実績もある。州創建50周年までに劇場は新しい建物に入る予定である。

州ではロシア語の「ビロビジャンスカヤ・ズベズダ」紙とイディッシュ語の「ビロビジャネル・シテルン」紙の2紙が出ている。ビロビジャン・ラジオ放送はイディッシュ語とロシア語で放送している。

州内には70の民族が住んでいる。私は外国で〝小さい州の中でこれほどの数の民族が見事に団結しているが、団結できている秘けつは何か〟とときたま聞かれる。そんなときは、われわれの体制の条件そのものから団結と善隣が生まれている限り、別に何もしなくても自然にうまくいっているのだと答えることにしている。わが州は団結と善隣を基盤に50年前に創建され、今後もこれらの原則に基づいて発展するだろう。

6



5



5　ビロビジャン変圧器工場の製品は州外にまで知られている。写真は新しい工程を説明する優秀班の班長。

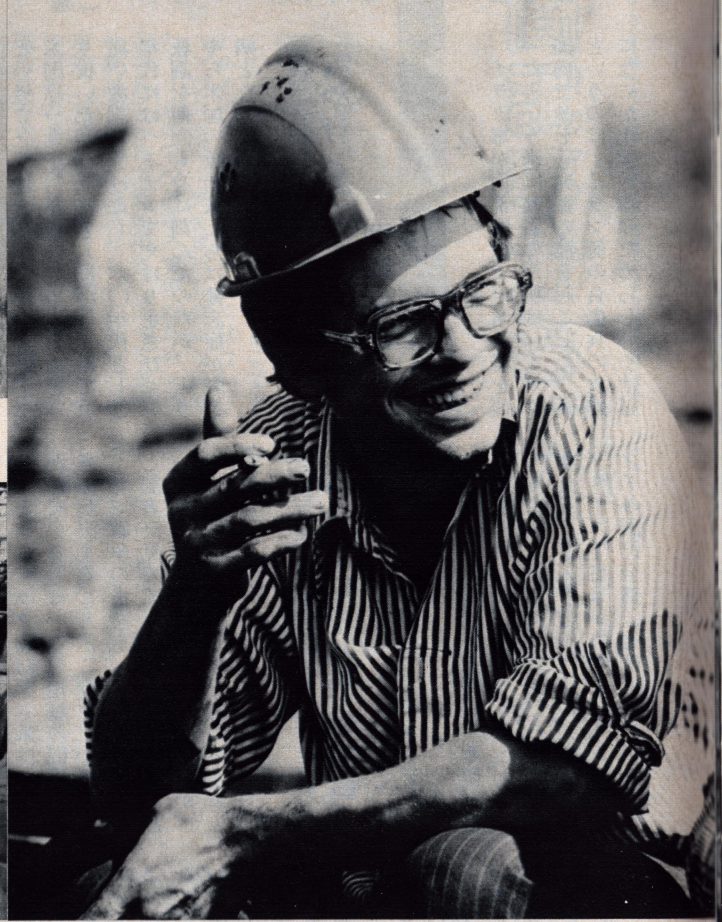
6　ゼヤ水力発電所からハバロフスクまでの送電線はユダヤ自治州を通る。鉄塔工事にはヘリコプターが使われている。

7　送電線建設現場で働く労働者

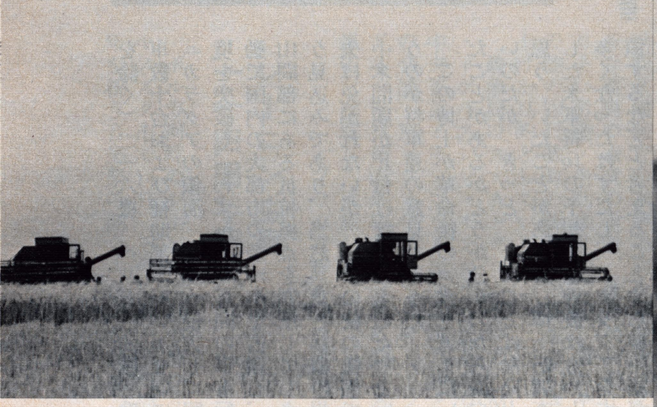
8　バブストフスキー・ソフホーズの穀物の取り入れ風景

9　変圧器工場の製品は極東やソ連の他の共和国の建設場へ送られて行く。

7



8



9



ノーボスチ通信 特派員報告

ニカラグア侵攻の代価

M・ベリャト記者（マナグア）

「戦費一六〇億ドル、餓死者二〇〇〇から五〇〇〇名、負傷者九〇〇〇から一万九〇〇〇名」。これは、米国のジョージタウン大学のセオドア・モラン博士がその調査研究『ニカラグア侵攻』のなかで、考えられる限りのあらゆる事情を考え、国防省の将軍や軍事専門家など数十人とインタビューしたのちに、ニカラグアの侵攻と占領が米国にとってどの程度の代価となるかを綿密に計算して出した数字だ。

米国の将軍たちの意見によると、侵攻そのものの様相は次のようなものになるはずだという。海兵隊、降下部隊、レンジャー部隊合計六万一〇〇〇名、これを支援する軍用機（ヘリコプターを除く）二一六機、ヘリ七三四機、戦車数十台および補助部隊がいっせいにニカラグアの領海、領空へ侵入し、国境を突破し、わずか1カ月間の軍事行動で国内の大都市の幾つかを占領し、山間部にある抵抗拠点を制圧してしまう見込みであり、当然兵員と兵器の損失は免がれないが、「この位の犠牲で中米問題が片付けば安いものだ」というのが将軍連の意見だそうだ。

この博士が革命後のニカラグアにいたことがあるかどうか分かったら面白いのだが、きっと、いたことはないと思う。いたことがあれば、博士が調査した米軍将兵の予想死傷者数はもっと多くなったはずだし、ニカラグアを占領するなどと考えることすら夢物語だということが博士には分かったはずだ。米国は一九三〇年代の初めに自由を守り抜いたニカラグア人民から初めて手痛い教訓を受けたし、六〇年代と七〇年代にはベトナムでやはり手きびしい教訓を何回も身に刻んだのだが、どうやら米国の政治家たちは健忘症が職業病となったらしい。

“やけど”したのは国務省の良心

D・オシポフ記者（バグダード）

イラク軍が南部戦線で化学兵器を使ったという米国務省の声明は、イラク国内で激しい非難の波を起こした。話というのは、イラン側の負傷兵の皮膚になにか化学兵器のためらしいやけどのはん痕があるということだ、イラン政府は「やけど」の性質を調べるためにこういう負傷兵を2グループ、オーストリアとスウェーデンへ送ったが、専門家筋ではそれが「化学兵器から受けた傷」だという仮説を認めないのに、国務省は性急にイラク側を非難する声明を出したのだ。

米国の政策立案者たちの動機が何にせよ、このような声明を出した狙いのひとつが、イラクとイランの敵対心をあおることにあるのは明白だ。

米国の声明に対するバグダード筋の受け取り方はこんなものだった。イラク外務省代表の公式声明でも、このようなでっちあげの狙いは両国間の戦争を長引かすことだといい、アドナン・ハイララ・イラク国防相も米国が気にかけているのは、この地域の問題を本当に解決することどころか、イラク・イラン戦争の炎をもっとあおることだと記者会見で述べた。そんなことになったら、両国の疲弊を招くばかりか、中東全域に新しい脅威をもたらすことになろう。

バンガロールの宇宙時代

A・ボージン記者（ニューデリー）

地球周辺軌道に宇宙船の定期便が飛ぶようになれば、だれでもたとえ1分でも宇宙を飛びたくなるだろう。この4月インド人宇宙飛行士の乗り組んだソユーズT11号が打ち上げられて、インドの国民全部（七億人強）がそんな宇宙旅行のファンになった。この古くて、同時に永遠の若さをもつ国インドのどこにも、こんどインド人が宇宙を飛んだことを知らないところはないと思う。なかでも、現在この飛行を特別の関心をもって見守っているのは、人口三〇〇万の都市バンガロールだ。

バンガロールは宇宙研究が行われている都市で、インド宇宙探査組織の衛星センターがある。インドの初期の人工衛星アリアバータ、バスカラ、ロヒニなどの設計と製作はここで行われた。またここにはインド国立宇宙飛行実験所や軍事航空医学研究所があり、この研究所でインド空軍の飛行中隊長ラケシ・シャルマ、飛行編隊長ラビシ・マルホトラなど10名のテストパイロットのグループが宇宙飛行士の選抜検査を受けた。

ソ連の最初の宇宙飛行士だった故ユーリー・ガガーリンが一九六一年にインドに来たとき、インドが宇宙飛行士たちで充満する時がくると予言したが、23年後この言葉は実現した。このほかバンガロールに直接言及した予言も実現しようとしている。一九六二年に当時のネール首相は「バンガロールはインドのほかの大都市にあまり似ていない……だがバンガロールは一番未来のインドの姿を代表する都市だ……」と言った。

インド人のラケシ・シャルマがソユーズT11号に乗り組んでいることは、故ガガーリンと故ネール首相の言葉を現実に裏付けたものである。

ソ連の新聞記事から

（一九八四年4月前半）

党中央委政治局の定例会議

ソ連共産党中央委員会政治局の定例会議で、一九八三年度のソ連共産党への入党許可の結果と党員の構成における変化についての問題が検討された。この問題の審議のさいに指摘されたように、現在約一八五〇万人の党員を結集しているわが党の隊列の成長と強化の過程は、全体として、第26回党大会とその後のソ連共産党中央委総会（複数）の方針に従って進んでいる。主として労働者とコルホーズ員によって党員が補充される安定した傾向が続いている。ソ連共産党に入党を許可された人々の中には多数の国民経済専門家、優秀な知識人、青年男女がいる。物質的生産部門への新鮮な党勢力の流入が増大している。石油産業、石炭産業、ガス産業、電子工業、微生物工業、通信機器工業といった工業部門の企業で党員数が最も多く増えた。農村の党組織では畜産関係者と機械取扱要員の数が増えている。

同時に、入党許可と党員教育に関する党組織の活動の実践面にはなお欠陥がある。一部の党委員会は、工業の基幹部門、建設、運輸部門の評判の良い幹部労働者で党の隊列を補充することや、作業班と畜産場の労働集団を共産党員で強化することに不断の配慮を示していない。青年党員対策はどこでもしかるべき水準にあるわけではない。

ソ連共産党中央委政治局会議ではまた、ソ連の学校改革の実現のために予定されている実際的措置に関する提案が検討され、承認された。これらの提案は、普通教育学校の活動の改善、小中学生の労働教育と進路指導の改善、職業技術教育の一層の発展、子供の就学前共同保育の水準の向上、ならびに教育要員の養成の改善、教育要員のよりよい労働・生活条件の設定、教員その他の国民教育の働き手の賃金の引き上げを目的としている。

政治局はA・A・グロムイコの、M・ドゲルスレン・モンゴル人民革命党中央委員・モンゴル人民共和国外相との会談、M・クスマアトマジャ・インドネシア共和国外相との会談に関する報告を聴取し、承認した。

（プラウダ紙4月6日号）

レーニン生誕一一四周年記念

ボルガ河畔のレーニン生誕の地ウリヤノスク市で14日、その生誕一一四周年を祝う音楽祭の開会式が開かれた。式場はレーニン・メモリアル。

この音楽祭には各地から芸能集団が駆けつけ、客演するのが恒例で、市や州の各ステージで一四〇以上のコンサートが行われる。

（プラウダ紙4月15日号）

サイン入り本の図書館

ユニークなダムと水力発電所で有名なヌレク市（タジク共和国、一九六〇年に誕生）にはもう一つ自慢できるものがある。

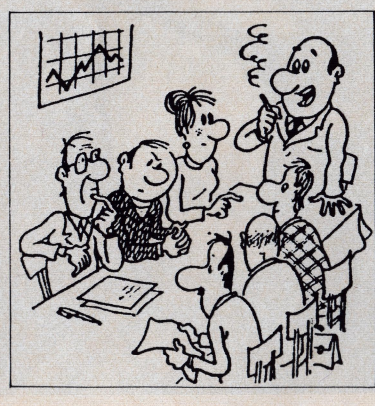
ダム建設が急ピッチで進められていたある日、タジクの国民詩人ミルゾ・トゥルスン＝ザデがヌレクを訪れ、市にふさわしい図書館を作ったらどうかと勧めた。そのうえ、自著の詩集をサイン入りで寄贈し、今後の援助も約束した。

これを受けてタジクの作家たちが図書館設立のイニシアチブをとり、「民族友好」誌編集部がそれを後援した。セルゲイ・バルズジン編集長が図書館設立の組織者の役割を引き受けることになった。この図書館は有名な国家・社会活動家、ソ連の作家、諸国の進歩的文学者の著作を必ず著者のサイン入りでそろえることにした。

次々と蔵書が増え、まもなく市の小さな図書館の書架はパンク状態になった。市ソビエト執行委員会はサイン入り蔵書用特別図書館の設計図を発注し、このほど四つの閲覧室のある堂々とした2棟からなるユニークな図書館が完成した。

著者サイン入りの本は今も増えつづけ、すでに一万八〇〇〇冊以上になっている。

（イズベスチヤ紙4月15日号）



「みんな何のために集まったのか忘れてしまった以上、散会しようか？」（V・ミレイコ作、トルード紙4月3日号から）

新素材開発のための研究所

トムスク市に強度物理学・材料学研究所が新設された。この研究所の課題について研究所長のV・E・パニン・ソ連科学アカデミー準会員は次のように語った。

「本研究所の母体はソ連科学アカデミー・シベリア部大気光学研究所の固体物理学・材料学部です。

新研究所の目的は効率の高い材料の開発です。粉末冶金および粉末被膜処理の物理学的基礎の研究、材料の強度・耐寒性・耐疲労性の物理学、シベリアおよび極北で使う新素材の製造工程の物理学・化学的基礎のような研究が特別な位置を占めています」

（コムソモリスカヤ・プラウダ紙4月15日号）

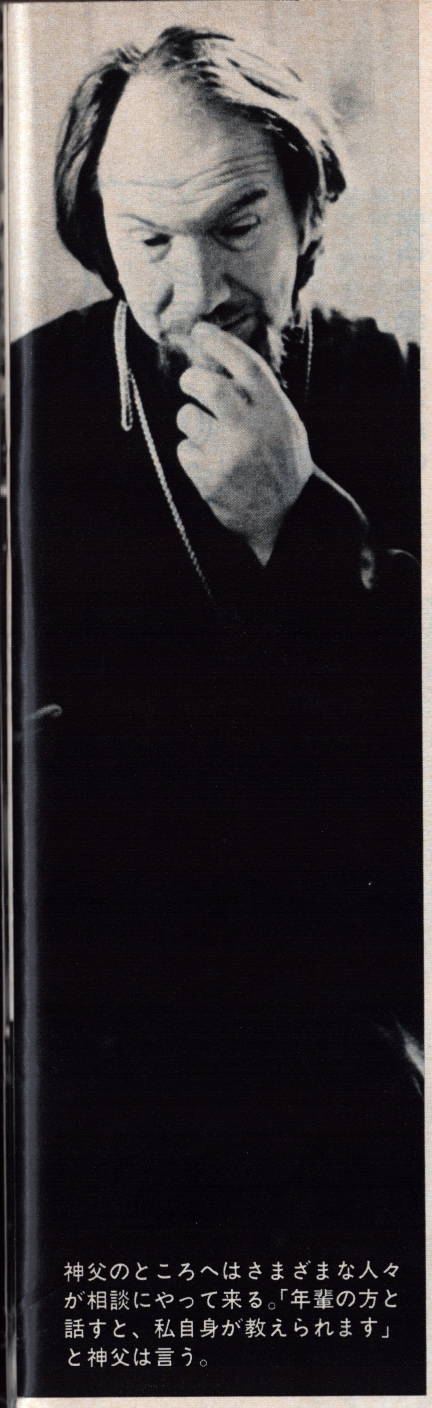


鐘楼で息子と一緒に鐘を鳴らす。

ニコライ神父の日常生活

本誌記者 ビタリー・トレチャコフ
カメラ Y・ルイビンスキー

ニコライ神父（42歳）は根っからの仕事好きだ。信徒の宗教生活の指導に情熱を燃やし、教会の繁栄のために心を砕いている。13年前、ロシア正教会のモスクワ神学セミナーを卒業したばかりの彼は聖職を与えられ、モスクワの北西一三〇㎞のところにあるボロコラムスク市に配属された。丘の上にそびえる聖母降誕教会は改装された外観と豊かな内装で際立っている。この教会に今日の繁栄を取り戻させる上で少なからぬ役割を果たしたのは、あまり大きくない、だが栄光ある都市——ボロコラムスク市の独特な歴史的風土である。



神父のところへはさまざまな人々が相談にやって来る。「年輩の方と話すと、私自身が教えられます」と神父は言う。

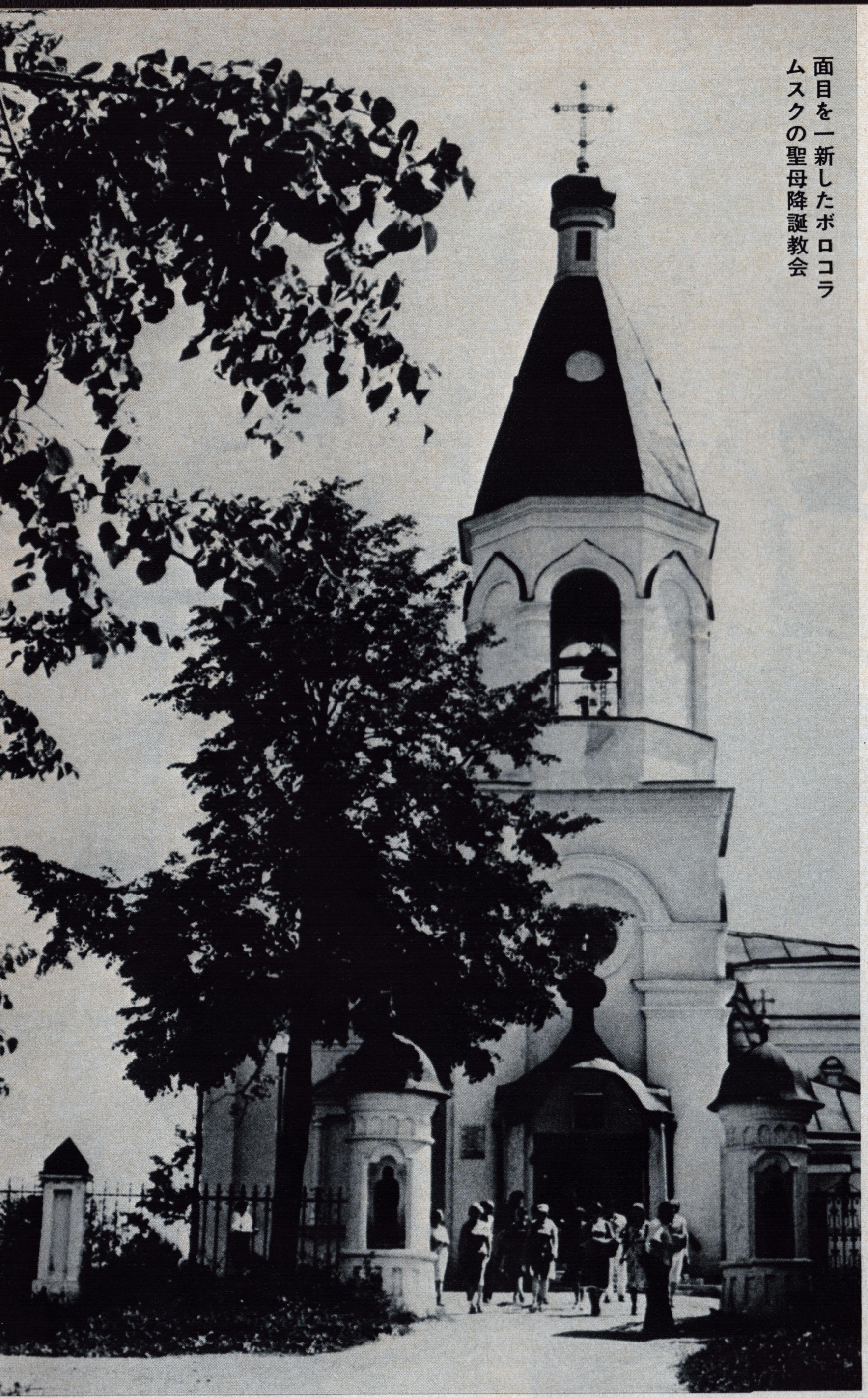
歴史をたどれば

ボロコラムスク市が年代記に初めて登場するのは一一三五年だが、市が生まれたのはそれ以前のことだろう。ロシアの中央部と北西部諸地域を結ぶ交易路の急激な発達が市の誕生をもたらしたことは明らかだ。このあたりでは河川が運輸の主要な役割を果たしていたが、水路だけでは通り抜けられないところは、陸路を通って川から川へ船を運んだ。この陸路のことをロシア語で〝ボーロク〟と言う。ラマ川に通じる５㎞の〝ボーロク〟が市に生命を吹き込んだだけでなく、市の名前のもとにもなった。

一五一三年にボロコラムスクはモスクワ公国に編入され、モスクワを西方の敵の襲来から守る前哨の一つとなった。ファシスト・ドイツに対する大祖国戦争（一九四一—四五）でもボロコラムスクは武名を汚さなかった。この近くには鉄道待避駅ドゥボセコボがあり、そこで戦史に残る激戦が行われた。ソ連軍はわずかな兵力でドイツ軍の戦車の進撃を英雄的に阻止した。

現在とは直接関係がないかのように思われる歴史的な出来事が、ボロコラムスク市民の生活に少なからぬ影響を及ぼしている。ニコライ神父の場合も例外ではない。一方では、何世紀にもわたる教会の伝統が近隣諸地域の宗教生活を支えており、他方、神学博士候補の学位請求論文に凝縮されているニ





面目を一新したボロコラムスクの聖母降誕教会



大祖国戦争中激戦が行われたドゥボセコボ鉄道待避駅の跡に立つソ連兵士の記念碑。毎年5月9日の戦勝記念日に、ボロコラムスク管区大主教も訪れて、ここで盛大な式典が行われる。

コライ神父の学問的関心は、市の宗教生活だけでなく、文化的・歴史的生活にも根差している、といった具合に。ちなみに、『ボロコラムスクの聖母降誕教会――絵画史および建築史』と題するニコライ神父の論文は一九八二年に学位を取った。

兄弟そろって

ニコライ神父（俗名ニコライ・ポポフ）は一九四二年にモスクワ近郊の町に生まれた。母親が信心深かったので、子どものころからよく教会に連れて行かれた。一九五九年に普通教育学校を終えると、縫製工場付属の技術学校に入った。そのあと、その工場で裁断工として働き、一九六一年にモスクワ神学セミナーの入学試験に合格。兄たちと同じ道を歩むことになった。兄の一人は司祭をしており、もう一人は北米のロシア正教会のある管区で主教をしている。ニコライ神父の弟も、現在モスクワ神学セミナーで学んでいる。

ニコライ神父は一九六八年に結婚し、やがて次々に子どもが生まれた――娘エレーナ、息子コンスタンチン、娘マリアとアンナ……いちばん下のアンナはいま5歳。

教会堂の管理と子どもたちの世話だけでもかなりの時間を取られてしまう。学位請求論文のためにも時間を割かなければならなかった。とはいえ、教会堂を自分で手入れすることによって、論文を書くための貴重な経験や資料が得られたのも事実だ。

うれしい発見

ボロコラムスクへやって来てから最初の2年間に、ニコライ神父は教会堂の根本的な修理を組織した。暖房源である二つの暖炉が修理され、集中暖房システムが取り換えられ、水道管が引かれて、木造の塀の代わりに鉄の柵がめぐらされた。

教会堂のインテリアを子細に検討してニコライ神父は、19世紀末に施された内装の模様が建物の古さとマッチしていないことを理解した。もちろん、何世紀ものあいだに、ロシア正教の教会堂のインテリアの様式は変化した。その最たるものは、会衆席と内陣を隔てる豪華な聖障（イコノスタス）が出現したことだろう。だが、この建物の最も古い造営部分――16世紀に作られたその内陣の中にこそ、当初の絵が、何回も塗り重ねられた絵の下に隠されているはずだった。

ニコライ神父の推測はまちがっていなかった。神父の計画にもとづいて行われた修復作業の過程で、まさにその時代のフレスコ画が発見されたのである。しかも、内陣からだけでなく、丸天井を支える円柱の一本からも。

フレスコ画についての記述とそのカラー複製が「モスクワ総主教管区ジャーナル」に掲載された。ニコライ神父は教会堂のほかの部分でも新たな発見があることを期待している。



発見した16世紀のフレスコ画をモスクワから来た画家たちに見せるニコライ神父

「日常の雑事を終えて教会へやって来る信者たちにとって、壁の絵がそんなに大事なのですか？」と私はニコライ神父に質問した。「教会の主要な意義は祈りにあるはずですが……」

「祖国の過去や歴史、文化への愛を育てることに無関心で、善の思想を説くことができるでしょうか？」とニコライ神父は逆に反問した。

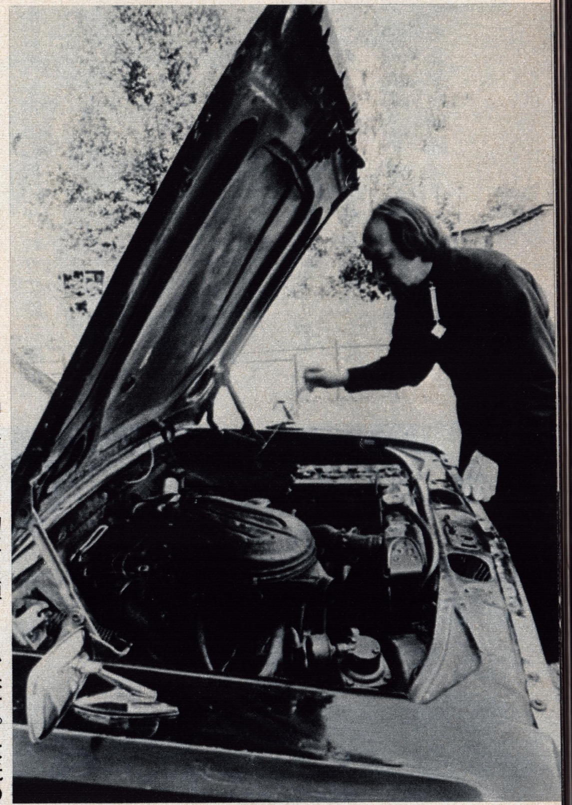
平和をめざして

手持ちぶさたで座っているニコライ神父の姿を見ることは、まずあり得ない。教会の仕事は多方面にわたっており、そのすべてを監督しなければならないからだ。もちろん、教区の信徒や教会執事を長とする教会理事会のメンバーが援助してはくれるが（ローソクや文献、調度の購入、教会の収支決算は理事会の仕事）……

少し前、聖隔を金色に塗り直した。こんどは丸屋根も金色にしたらどうかと考えているところだ。

ニコライ神父は、この教会堂がいつ、だれによって、だれをたたえて建立されたのかが記された礎石の破片を発見した。それらの破片は教会堂の入口に置いてみんなに見てもらうことにし、碑文は大理石に書き移して、教会堂の壁に固定し、その下に古代ロシア語の碑文の現代ロシア語訳を添えた。

ニコライ神父は子どものために多くの時間を割いている。長女と長男は普通教育学校へ、次女はそのほかに音楽学校へも行っているので、勉強を点検し、いっしょに遊んでやらなければならない。



東奔西走のニコライ神父には自動車は頼もしい味方。大抵の故障なら自分で直してしまう。



ボロコラムスクの近くの村の教会で友人のピョートル神父と

だが、もちろん、主要な仕事は祭日の礼拝、洗礼、結婚式だ。年に何回か、祭事や信徒の交流のためにボロコラムスク管区大主教ピチリムその他がモスクワからやって来ることもある。

いま、そのような訪問を前にして、盛大な準備が進められている。それはソ連国民の対ファシスト・ドイツ戦勝利の日——5月9日に合わせられている。私は昨年行われたこの日の行事に出席したが、大主教は説教の中で、第2次世界大戦で祖国の運命と独立のために生命を捧げたソ連兵士の英雄的行為について言及した。大主教は会衆に、小さなことであれ大きなことであれ、平和のために尽くすよう熱心に呼びかけ、ソ連政府の平和愛好政策をたたえた。

そのあと十字架行進が行われ、教会堂の境内には祖国を守るために倒れた人々を悼む天使を描いた象徴的な墓標が祀られた。

この日の伝統行事となっているドゥボセコボ待避駅のソ連兵士の記念碑とネリドボ村の祖国防衛者の共同墓地への参詣が行われ、ピチリム大主教一行、信徒、ボロコラムスク市民、近隣の村々の住民が大勢、記念碑と共同墓地に集まり、花輪を献げ、「永遠の追憶」の歌をうたった。

ニコライ神父は私に言った——「ロシア正教会は全国民的祝日——戦勝記念日を特に盛大に祝います。なぜなら私たちは、そこに自由のために倒れた兵士たちに対する尊敬を見るからだけでなく、平和創造の意義を認めるからです。平和を作り出す活動は、主要なキリスト教的善行であると私たちは考えています」

人々とともに

ニコライ神父は宗教生活の"近代化"には賛成しない。説教の中で日常的な現実から取った例を引くのも好きではない。人間の悪の本質は大昔から変わっておらず、大事なのは欲望を貪欲と呼ぶことではなく、善行をめざし、不正に反対し、良心の妥協を許さず、人々のあいだの平和と愛をめざして闘いつづけることである、と考えている。ニコライ神父はそれが、司祭とし



ての自分の義務であると確信している。

「もちろん、人々と話すには、人々に分かる言葉で話さなければなりません。私が日常生活において人々と話すとき、人々がお互いに話し合っているのと同じように話すのは、そのためです」とニコライ神父は言う。「この世で出会った人々と一緒にいることは私の喜びです。信者だけでなく、思想を異にする人々も、私を教会の代表として尊敬してくれます。人間は悪いものよりもはるかにたくさんのよいものを持っています。私たちはみんな、信者も無神論者も、そのことを理解し、善と和の増進を促さなければなりません」

ニコライ神父は人づき合いがいい。大勢の人々が神父の家にやって来る。ある人は単に隣人として、ある人は教会の用件で。ニコライ神父には夢がある。聖母降誕教会のために、古来のやり方で鐘を鋳造することだ。鐘はあるのだが、新しいものばかりだからだ。神父は古い文献をひもといて、鋳造法を探求している。



▲書斎は子どもたちの遊び部屋でもある。

▼わずかな余暇は子どもたちのために使う。

弁と一緒に記念撮影。前列左端が岩村さん、後列右から２人目がデニソフ大阪駐在ソ連総領事



狆（チン）が取りもった日ソ友好の縁

日本狆クラブ奈良支部　岩村　ひさ子

「狆（チン）」この中国的な名前から中国の犬と思われていますが、長い被毛と優雅な容姿、そして愛嬌のある顔は、その昔聖武天皇の奈良時代に、朝鮮（当時・新羅）より献上された事から始まり多くの人々、そして幾多の年月をかけて改良され、世界の犬界で高く評価され公認されている代表的な日本犬なのです。

そんな愛狆と暮し始めて10年程になりますが、その間楽しい事、悲しい事などエピソードは語り尽くせぬものがあります。まさか我が家の狆の子がソ連の方の養子になろうとは…。今年の2月18日、日本狆クラブ奈良支部長浅田様が在大阪ソビエト総領事御夫妻を昼食会に御招待され、その晴れやかな席に私も御招きいただきました。

その日は昨夜来の雪で、金剛生駒国定公園に位置する浅田様の御自宅は、まばゆいばかりの雪化粧。その中をガッシリした体格のデニソフ総領事が「こんにちは」とにこやかな挨拶で御見えになり、緊張した私にやさしく握手を求めて来られました。この握手で私は、気分が急に楽になり、次に御見えになった総領事の奥様には自分から軽い挨拶もさせていただけました。又、総領事御夫妻と一緒に御見えになった儀典長の方々、日本語がペラペラでおいしい食事と楽しい語らいに時間がまたたく間に過ぎたように思えた程でした。その中で浅田様の愛狆の〝太郎〟君のおもてなしぶりは、それは見事なものでした。総領事御夫妻が御見えになった時には、抱かれていた私の手から飛び降りて少し恥かしげながらも、お客様に対し一生懸命に愛嬌を振りまいていました。

総領事御夫妻も〝太郎〟君の歓迎に手を差し延べて御応えになり、「可愛いい！」「長くて美しい毛！」と賛美の言葉を連発されました。

そして数々の質問を受けましたので、狆の特徴について少し説明をさせていただきました。成犬になっても体重は2－4kg程度で、体臭がなく無駄鳴きをしない犬です。総領事の御賞めの言葉通り見事な被毛で、江戸時代には江戸城の大奥で愛玩されていたように、我が国の最も素晴らしい室内犬です。それで当時浮世絵等にも描かれているのです。狆の姿は体の大きさに比べれば大きな顔、太く短かく幅広い口、眼は大きく丸く光沢があり、両眼の間隔は広く離れ、鼻はごく短く、両眼を結ぶ線上にあります。ユーモラスな顔と思われるでしょうが、何故か気高く愛くるしい姿です。この狆も日本においては第二次世界大戦の影響で絶滅の危機にありましたが、昭和33年アマチュアの愛狆家が集まり、「日本狆クラブ」を発足させました。故東久邇盛厚様が初代の会長に就任され、奥様の天皇陛下第一皇女・照宮様共々「狆」の発展に御尽力され、日本狆クラブの最高の栄誉である「東久邇賞」が設立されました。「日本狆クラブ」は日本全国に支部を持ち、現会長の池田宣政氏も岡山県の元侯爵で、令息は天皇陛下の第三皇女・厚子様を迎えておられます。

などと、お話しさせていただく間も時々〝太郎〟〝太郎君〟と名を呼ばれ、ソ連ではあまり見かけぬ、というよりも頭数は非常に少ないらしいのですが、狆独特の顔、そして見事な被毛の〝太郎君〟をいたく気にいられた御様子でした。

御夫妻おそろいで犬がお好きなのだろうと思っていたところ突然、よほど御気に入りになったのか、総領事館で飼いたいので一頭譲っていただけないかとの御話があったのです。

私達は突然の事に顔を見合わせて驚いたものの、狆を外国に紹介し、狆を通じて友好ができるなら（そして秘かにソ連狆クラブができたら？）等いろいろ考えた末、一頭御世話する事になりました。そしてその民間大使（狆）の大役に白羽の矢が立ったのが、支部長宅で繁殖された小犬で、その父親が私の愛狆だったのです。たかが犬の事でとおっしゃるかもしれませんが、我が子と同様の愛狆を通じて犬同士の「親戚」になれる名誉を思いながら、この小さなきっかけを通じソ連の愛犬家の人々と交流し、狆を広めていければ、そして狆を通じささやかな日ソ友好ができればと、考えたのです。

快い私共の返事に総領事御夫妻も非常に喜ばれ、名前も是非日本の名前でとおっしゃいましたので、日本の代表的な山にちなみ「富士丸」と名づける事に決定し、３月中旬頃には総領事館の広い庭を走りまわる事になりました。そしてその民間友好の早速の成果として愛狆を交えて、総領事館の日ソ料理交歓会の約束も取り交したのです。

ソ連という国は、私達日本人から見ると何か神秘めいた国であり、それ故いろいろな意味で不思議な印象を持っていましたが、一人の人間としてお話しさせていただく中で、言葉・人種・社会体制等こそ違え、人間として多くの相通じるものがある事を知りました。

〝太郎〟のおかげで、思いもよらず日ソ友好の小さなきっかけを狆が担い、世界平和に寄与できればこれ以上の事はないと期待しつつ、拙ない筆を止めさせていただきます。

私とロシア語

反町　誠

新潟県長岡市ではもう何年も前からロシア語講座のサークルが活動しています。会員は小学5年生からお年寄りまで平均約15人。講師を務めるのは高校３年の反町　誠さん。その反町さんに、どんなきっかけでロシア語を教えるようになったのか、どのようにしてロシア語を勉強したのか、書いてもらいました。

初めてロシア語に接したのは、小学校一年生のころでした。父が毎朝ラジオでロシア語を学習していたので、自然に興味を持ち始めたのでしょう。もっとも、まだ幼かったので、耳に入ってくることばがロシア語だなんて知りませんでした。言ってみれば私はオウムか九官鳥にすぎなかったのです。

小学三年生になってようやくラジオのテキストを手にするようになりました。その年の八月、私はすばらしい機会に恵まれたのです。それは父にソ連に行ってみないかと言われ、私は一瞬どう答えたらいいか分かりませんでした。でも私はがんばって「うん」と言いましたが、不安でした。この時にこの機会に恵まれていなかったら、今ごろロシア語なんてやってなかったと思います。それだけ印象が強かったようです。結局これがきっかけになってロシア語を学習するようになりました。

さてそれ以来、ラジオとテレビで学習し、新潟へ行って、港にいるソ連船を見つけては中に入って実習をしたのです。ロシア語は私にとってなくてはならないものになりました。でもラジオは毎朝あるので、時々休んだり、もうやめてしまおうと思ったことが何度あったことか……ところが、私はもう一度ソ連へ行く機会がありました。その時は一人で団体に加わって行ったのです。そして念願であったモスクワ、レニングラードの訪問が実現し、もっともソ連らしい文化、芸術、人々、さまざまな民族に接してようやく、私が今まで考えていた以上にソ連は偉大であると思いました。

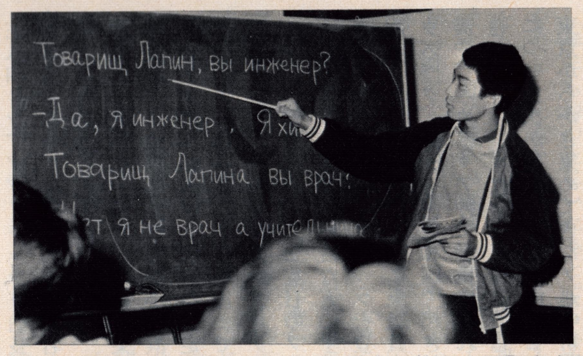
そのあと中学校時代はおよそ受験におわれて、ロシア語も小休止といったところでした。しかし毎朝ラジオは聴いていました。ソ連船へもめったに行かなくなり、生のロシア語を耳にする機会も少なくなり、それに英語もやらなければならなくなって、それらを両立させるのが難しくなりました。

さて、私がロシア語を教えるようになったいきさつですが、中三の時、ロシア民族アンサンブルが私の町で公演のおりに私がロシア語をしゃべったのがきっかけになって、学習会の先生をたのまれたのです。あまりにも急な話だったのでとまどいましたが、引き受けた以上、後にはひけないのです。とうとう私が先生になり、又新しい方向でロシア語を勉強する機会を得ました。

〝教えることは学ぶこと〟と、いつも言いきかせながら今日にいたっているわけですが、それまで四苦八苦の連続で、いつもどうしたら分かってもらえるかと、それればかりが頭の中を走りまわって、生徒のみなさまにも相談したりしました。これらのことは私にとってよい経験になったと思います。

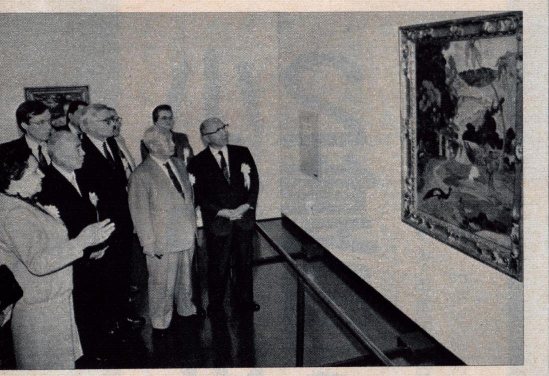
今考えてみると、やはり少し勉強不足ではなかったかと思うようになりました。説明だけでなく、もっとロシア語で話し合ってみたり、何かしらユーモアも必要だったかもしれません。でもそれに気づいたことはよかったと思っています。高校三年になって、自分の進むべき道もロシア語にしぼって、ロシア語を今後も勉強していくつもりです。

（写真＝筆者提供）



ロシア語講座で教える反町さん

ゴーギャンの『孔雀のいる風景』を見る（右から）小林読売新聞社社長、務台同社会長、パブロフ大使、村井都教育委員長。



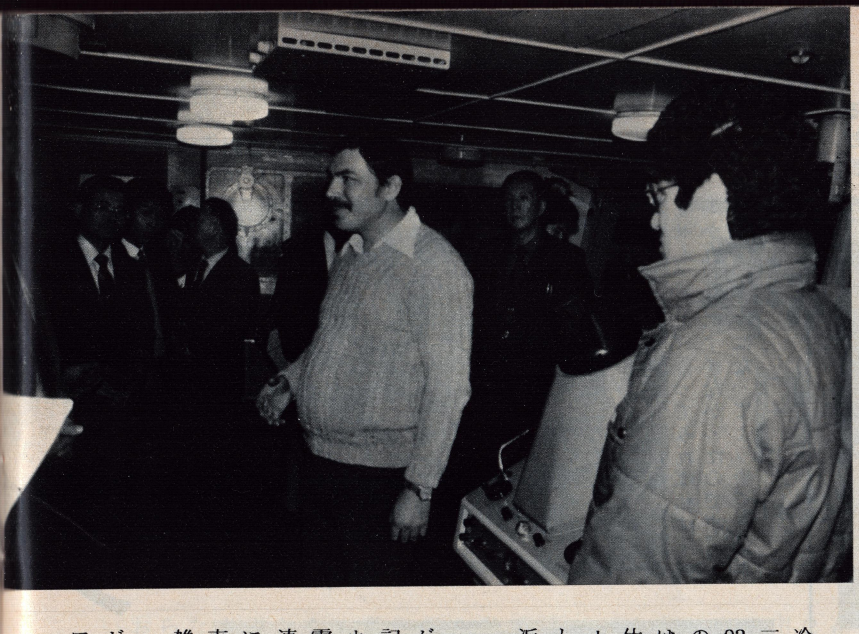
エルミタージュ、プーシキン美術館所蔵

「後期印象派から立体派まで」展開く

東京・上野の東京都美術館でいま、セザンヌ、ゴーギャン、マチス、ピカソなど、ソ連のエルミタージュ、プーシキン両美術館所蔵の作品を中心にした「後期印象派から立体派まで」展が開かれている（５月27日まで。都美術館、読売新聞社主催・13ページの催し物欄参照）。その初日の前日にあたる４月５日午後、展覧会場のロビーで開会式が行われ、美術愛好家ら約500人が出席した。開会式では主催者側を代表して村井資長・都教育委員長と小林与三次・読売新聞社社長があいさつ。パブロフ駐日ソ連大使も「この展覧会が両国間の文化交流や相互理解の発展に役立つことを期待します」とあいさつした。（写真提供＝読売新聞社）

小名浜港に2隻目のソ連船

「ノーボエ・ブレーミャ」誌
東京特派員　Y・タブロフスキー



3月22日の朝9時30分、ソ連の大型冷凍船カピタン・クズネツォフ号（三三八四トン、ダブイジェンコ船長以下93人乗り組み）が、いわき市小名浜港の大剣埠頭3号岸壁に接岸した。これは漁船の飲料水・食料の補給と乗員の休養のためにソ日政府間で小名浜港とナホトカ港への入港を認めた協定にもとづいて、3月5日から7日まで小名浜港に寄港した冷凍運搬船プロリーフ・ラペルザ号につづく2隻目のソ連船。

入国管理、通関、検疫などの手続きが終わるのを待ってタラップを登った記者（タブロフスキー）に乗組員は、ウズベク、タジク両共和国で起きた地震や、ニカラグア沖で機雷に触れたソ連タンカー、ルガンスク号の消息などについて次から次に質問を浴びせた。東京からかき集めてきたソ連の新聞や雑誌はあっという間になくなってしまった。

「なにしろもう6カ月も陸に上がっていないのでね」と第一副船長のアナトリー・ポポフが事情を話してくれた。「われわれはオホーツク海、クリール諸島水域、日本の二〇〇カイリ経済水域をふくむ太平洋水域でサバ、ニシン、スケトウを獲っていましたが、その間ほとんど突風や台風ばかりで、ひどい目に会いました。固い地面に足を踏みしめたくてたまりませんでしたよ。小名浜寄港は二重の喜びです。ほら、一石二鳥というじゃないですか。上陸して休養をとるだけでなく、隣国日本の暮らしぶりをほんのちょっとでも見たいからです。日本人の働きぶりはよく知っています。もう長い間いっしょに魚を獲ってきましたからね。あんな小さな川崎船を自由自在に操る船長の腕前も大したものですが、乗組員も一糸乱れず、まったく見事なものです。だから、小名浜の漁民たちのところへ行って、じっくり話をしたり、食事をいっしょにしながら有名な日本酒の味見もしたいものです。両国政府が小名浜とナホトカへの漁船の寄港を認めたのは結構な話だとみんな喜んでます。ソ連人も日本人もこういう〝窓口〟が多いほどおたがいの信頼感も友情も強くなるでしょうからね」

ポポフの話が終わると、たちまちまた質問の雨が記者に注がれた。こんどは日本のことで、「東北地方はシベリアに似ているそうだが本当か?」「日本にもシラカバがあるか?」「日本のビールはうまい?」「小名浜で相撲が見られるか?」、「ソ連と同じ電圧二二〇Vのダブルカセットのテープレコーダーを買えるか?」「五万円でキモノが買えるか?」「パチンコのやり方はむずかしいか?」などなど……

夕方、全日本海員組合の代表がカピタン・クズネツォフ号にやってきたという船内放送があった。乗組員代表が拍手するなかで日本側から日ソ漁民の友好の印としてキモノ姿の美しい日本人形がダブイジェンコ船長に贈られた。入港第一船のプロリーフ・ラペルザ号の乗組員へも同じような人形が贈られたとのこと。もっとも、プロリーフ・ラペルザ号の入港が米国近海での日本漁船遭難という事件と重なったため、日本側代表が歓迎の辞を読むには至らなかった。カピタン・クズネツォフ号を訪れた全日本海員組合代表は次のような歓迎のことばを朗読した。

「全日本海員組合は組合員全員を代表して、今回小名浜に入港したカピタン・クズネツォフ号の乗組員の皆さんを歓迎します。漁業協定に基づく日ソ両国の漁業交流関係は友好裏に順調な発展をとげています。わが全日本海員組合はソ連の食品工業労働組合および海上運輸・河川運輸労働組合の中央委員会と協力しています。皆さんは長期にわたって洋上におられたのち休養のため短期間ながら上陸することになりました。皆さんのご成功とご無事を心から望むものです。またわれわれは今後もソ連の海員や漁民との友好関係を発展させ、日ソ関係の改善に寄与したいと考えます」。あいさつとプレゼントの交換が終わると、日ソの漁業労働者は同じテーブルに座ってウオツカやお

カピタン・クズネツォフ号を訪れた日本の友人たちに船内の説明をするダブイジェンコ船長(31歳)

茶で乾杯し、日ソ漁民の連帯や自分たちが寄港した日ソの港の思い出話に花を咲かせた。

寄港第2日目に、3時間ちかくもバスに乗って待機し、何度も日本側にかけ合った末、乗組員はやっとのことで埠頭から出て、小名浜周辺をほんのしばらく車中から見物し、市立公園で車から降りて30分ほど散歩することができた。もう一つのグループはそれよりも運がよく、同じ市立公園をやはり30分散歩したばかりか、10分ほどだったが沿道の食堂で日本のビールと酒とアイスクリームを味わうこともできた。それでも第一のグループも第二のグループも、幻滅と憂うつな気分を免れなかった。

その日の夜、日ソ親善協会の代表団がカピタン・クズネツォフ号を訪問した。この代表団は協会の福島県支部といわき地方支部の人たちで、団長の上坂　昇衆議院議員（社会党）が一行を代表して要旨次のような歓迎のあいさつを述べた。

「ソ連の友人の皆さん。わが福島県地方は昔からソ連極東地方と通商関係をもっています。私たちは貴国から木材、石炭、海産物を輸入していますが、そのおかげでこの地方の住民の雇用が保障され、地域の繁栄が促進されています。現在の国際情勢は複雑ですが、私たち日ソ親善協会の会員は両国の善隣友好関係の強化をめざして活動しています。もう一度あらためて皆さんを歓迎し、皆さんのご無事を心から望みたいと思います」

歓迎のメッセージ、プレゼント、花束を受けたダブイジェンコ船長は次のように述べた。

「半年も海の上にいたあとでこんなにも美しい花束をいただき、しかもそれを友だちの手から贈られて二重の喜びです。日ソ関係の進展に反対する人々から受けた〝歓迎〟には正直に言って驚いたし、がっかりもしました。日本の漁船がナホトカに寄港したときこういう態度をとるなどとは、私たちには思いもよらないことです。だから、日ソ親善協会と全日本海員組合の代表の方たちの訪問は私たち一人ひとりにとってうれしいことであるし、また大事なことです。日本のよい側面を見せていただいたからであり、また日ソ間の平和的、互恵的善隣関係の発展の可能性を信じさせてくれるからです」

そのあと協会の代表一行は船長の案内で日本製、ソ連製、フィンランド製の機器をそなえた船内を見学し、船長から長期遠洋航海中の労働条件や休息のし方などの説明を聞いた……

……政府間協定で決められている48時間の寄港期限はたちまち過ぎ去った。8月24日午前9時30分かっきりにカピタン・クズネツォフ号は大剣埠頭を離れ、外洋へ向けて出港した。乗組員たちは日本の友人たちの暖かいことば、贈られた花束やきれいな日本人形、おいしいミカン、それに通訳を通じなくとも分かり合えるほほえみをいつまでも覚えているだろう。

バレーボール女王決定戦

江上由美選手に「今日のソ連邦」賞

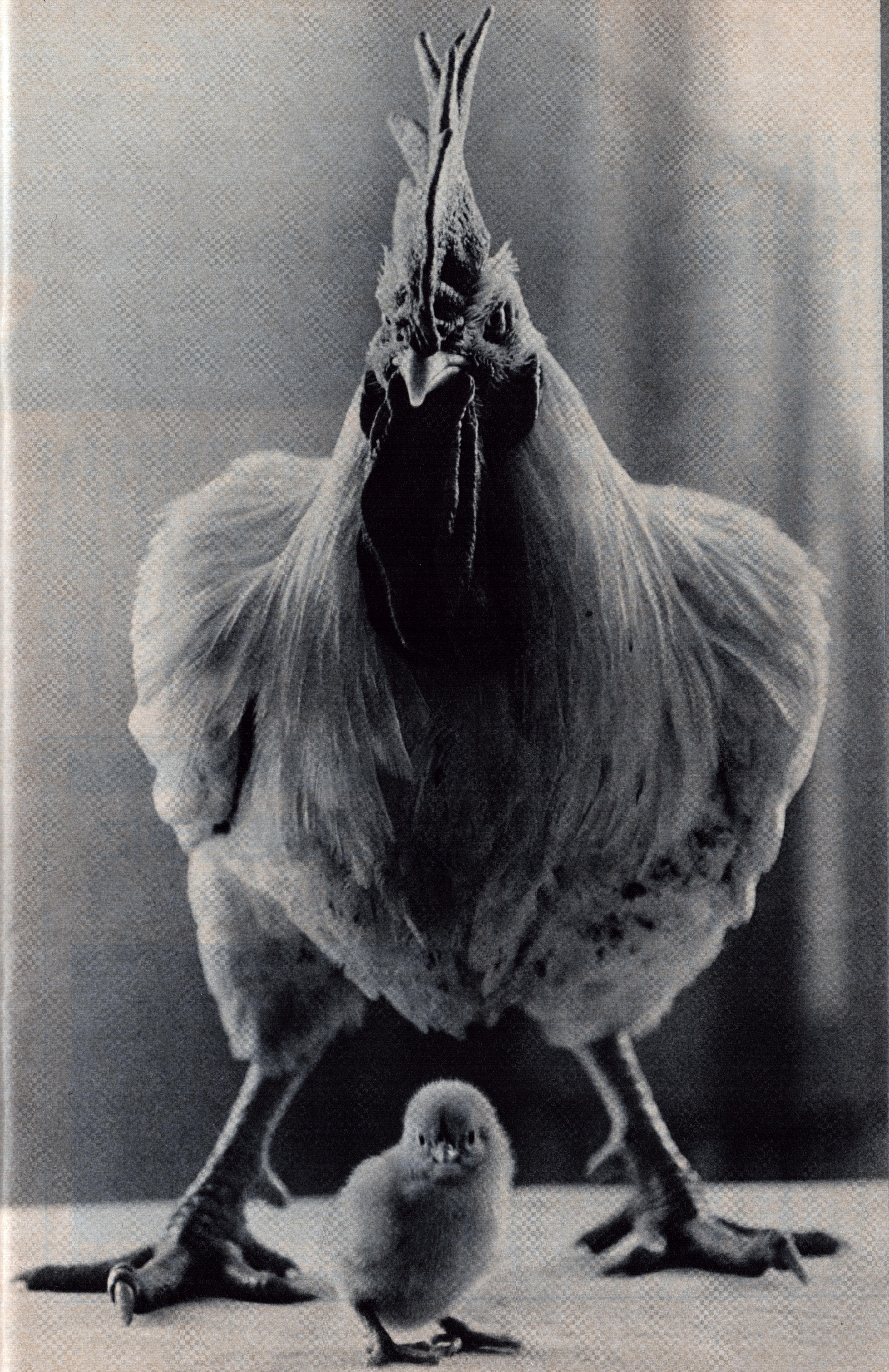


グリニュク・ノーボスチ通信東京支局次長から江上選手に「今日のソ連邦」賞のマトリョーシカ人形が贈られた。

ことしで3回目を迎えた女子バレーボールのドゥルージュバ（友好）カップ・女王決定戦が4月12日から15日まで東京体育館で行われた。昨年まで日本とソ連の国内リーグ優勝チームの間で争われていたこのタイトル戦は、ことしから中国チームも参加することになり、日中ソ女王決定戦と衣替えしたほか、日本リーグ第2位チームも出場することになった。

日本リーグ優勝の日立チーム、同2位の東洋紡チーム、ソ連国内リーグ優勝のアルマアタ住宅建設コンビナート・チーム（カザフ共和国）、中国国内リーグ優勝の四川省チームがリーグ戦方式で対戦した結果、日立チームが圧倒的な強さを見せて3戦全勝し、この大会3年連続の優勝を遂げた。2位は2勝1敗の東洋紡チーム。ソ連チームは1勝2敗で3位だった。

本誌編集部では昨年からこの大会の最優秀選手に「今日のソ連邦」賞を贈っているが、ことしは日立チームの江上由美選手に贈られることになり、15日の日立・アルマアタ戦のあと、V・グリニュク・ノーボスチ通信東京支局次長から大きなマトリョーシカ人形が江上選手に手渡された。



頼もしい後見者（O・シゾフ撮影）

短信アラカルト

ハバロフスク地方の電力産業

さきごろハバロフスク地方で延長四〇〇km、五〇万vの新送電線の建設工事が始まった。この送電線は二つの大工業中心地――ハバロフスクとコムソモリスク・ナ・アムーレを結ぶ。この送電線を通るゼヤ水力発電所の電力によって、年内にコムソモリスク・ナ・アムーレ地域生産コンプレクスのエネルギー保有量は3倍に増えよう。

この地方の電力産業が急速に伸びたのは、ハバロフスク地方北部地域の生産力の急増に応えたもので、コムソモリスク・ナ・アムーレでは大製鉄所が建設中であり、造船業、軽工業、食品工業などの諸企業の生産設備も増強されている。同市近郊では大量の電力を使う採鉱コンビナートと木材加工コンビナートも拡張中である。

ヤクーチアの出土品

ヤクーツク市からレナ川沿いに上流一四〇kmのディリング・ユーリャフ地区にある古代遺跡の発掘がこのほど終わった。ここでは北東アジアではめったに見られない約三五〇〇年前の保存状態の良い墓地をはじめ、大量の労働・狩猟用具などが発見され、センセーションを呼んだ。装飾入りの石や骨の矢じり、燧石の削り具、ナイフは、いずれも仕上げが綿密で、独特の規格を持っている。胸につけるさまざまな大きさの軟玉の輪も数点発見された。

これらの出土品は約一〇〇万―二五〇万年前にタンザニア、エチオピア、ケニア、その他のアフリカの土地や、南ユーラシアに存在した物質文化に属するものであり、これらから見て当時すでに人類は過酷な自然・気候条件に順応できたと推測できる。人類は暖かい住居、衣類、火を持っていて、かなり高度の発展をとげていた。こんどの出土品は、人類誕生の場所と時、人類が地球の各地に移住していった経路、寒さが人類の発展に及ぼした影響に関するこれまでの通念の見直しを迫ることになろう。

太陽熱温室でコーヒー園

中央アジアのトルクメン共和国科学アカデミーの産学合同〃ソンツェ〃（太陽）は、コーヒー栽培の実験に着手した。温室内に必要な微気候をつくるために、太陽熱が利用されている。

〃ソンツェ〃合同はソ連の太陽エネルギー利用の指導的学術機関の一つであり、ここの太陽熱利用装置は学術研究や国民経済に利用されて成果をあげている。すでに一般住宅、官庁の建物の暖房・空調装置や工業用クロレラ栽培装置には太陽熱が使われている。太陽熱を利用する選鉱機も設計された。

現在、合同は農業への熱帯作物の導入に努めており、アラビカ種のコーヒーの苗木25本が太陽熱温室の中ですくすく育っている。数年後にこれらの苗木はソ連産の最初のコーヒーをもたらし、世界最北のコーヒー生産のきっかけになるかもしれない。これが成功すれば、次の段階として、トルクメン共和国南西部の亜熱帯地方に露地のコーヒー園を作ることが計画されている。

造船業での互恵協力

このほどモスクワで調印された全ソ船舶輸出入公団とデンマークのオルベルグ・ウェルフト社との契約により、デンマークからカンキツ類・果物専用の冷凍輸送船3隻がソ連に供給される。これらの船にはソ連製のエンジン、無線航法設備などが取り付けられる。

全ソ船舶輸出入公団は発足以来30年間に取引量を数倍に増やした。現在、公団は80カ国の八〇〇以上の企業や組織と取り引きしている。公団はもっぱら積み貨物船、トロール船、水中翼船、などを輸出している。

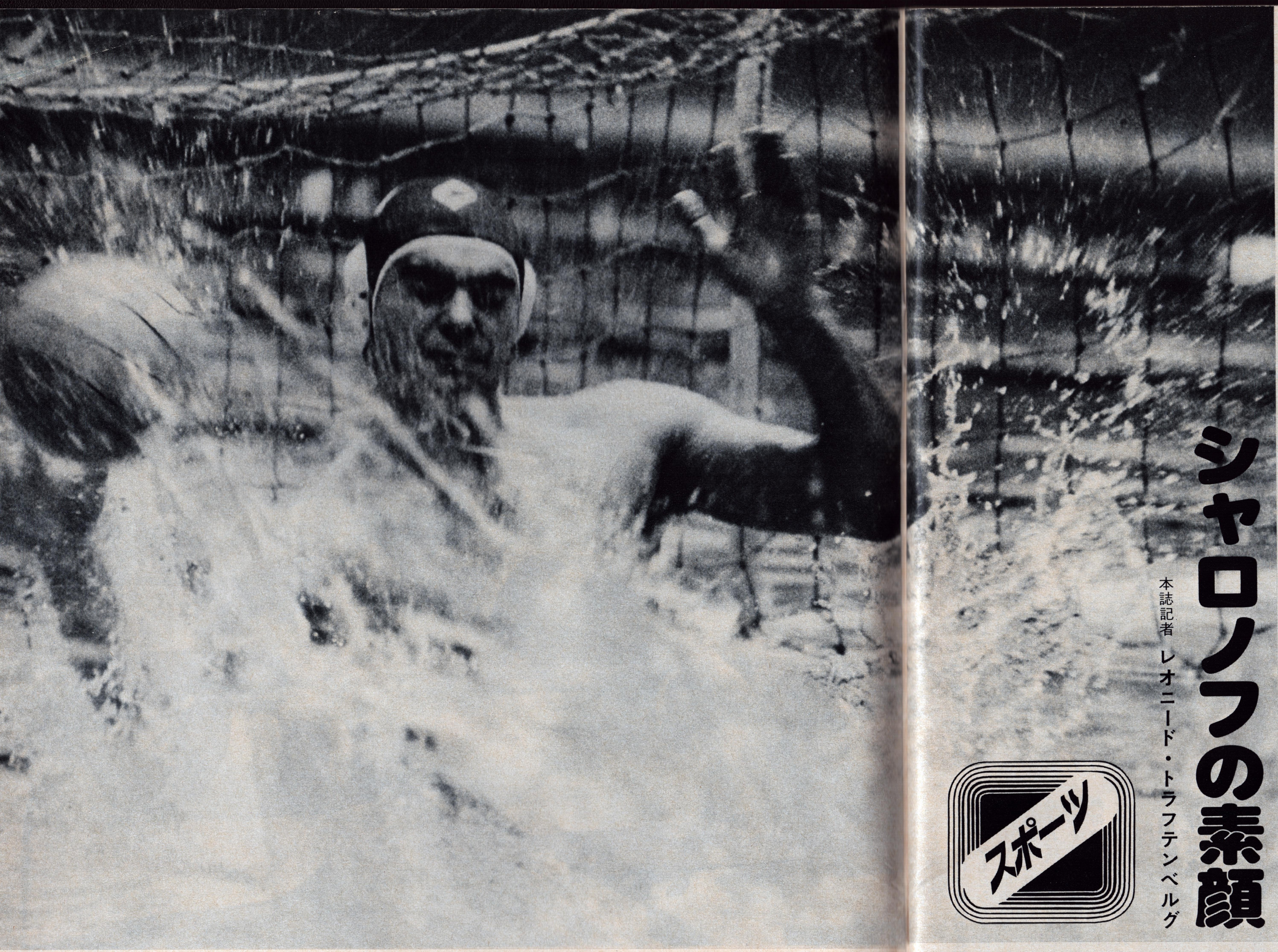
モスクワとは?

このほど「ムイスリ」（思想）出版所から出た『世界の都市の中のモスクワ』は、モスクワのことをよく知りたい読者に詳しい知識を提供する好著となるだろう。この本からいくつかの知識を披露すると――

モスクワは世界最北のマンモス都市（人口八〇〇万人以上、面積八七八・八平方km）である。1年のうちで一番寒い1月の平均気温はマイナス10・2度C、気温が最も高い7月の平均気温は18・1度Cで、季節に応じてやはり冬物、夏物、春物、秋物の衣料が必要である。

モスクワは世界の首都のうちで最も大陸的な首都である。モスクワに最も近い海港のレニングラードは、モスクワから六五一km離れている。しかしモスクワは航行運河を通じて五つの海――白海、バルト海、黒海、アゾフ海、カスピ海と結ばれている。

モスクワにはモスクワ川のほかにヤウザ川、セトゥニ川があり、さらに一五〇本の小さい川がある。モスクワの水域には三〇〇羽以上の白鳥、数百羽のガン、二〇〇〇羽以上のカモがいる。



水球の名キーパー シャロノフの素顔

本誌記者　レオニード・トラフテンベルグ

ゴールキーパーは生まれつきの素質だと言われる。そうだとすると水球のゴールキーパーは二重の素質に恵まれていなければならない。サッカーやアイスホッケー、ハンドボールなどのキーパーは固い地面の上のゴール前に立っていればいいのだが、水中ではどんな具合に〝立って〟いたらいいのか？

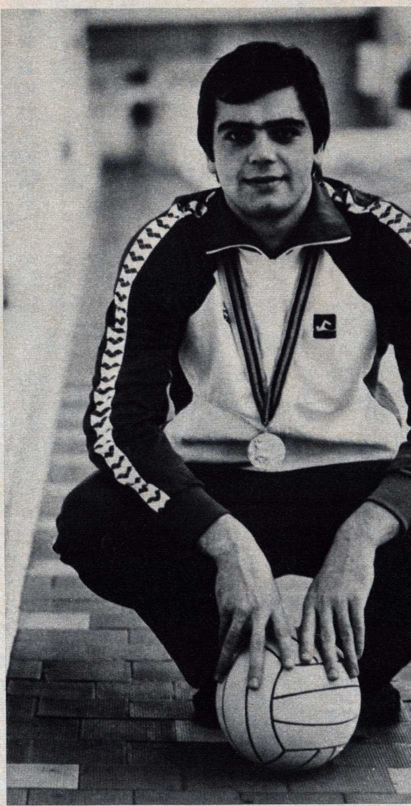
正味の競技時間は20分だと言っても、水球の試合はおよそ一時間半ほどつづく。試合の間ずっと、キーパーは一瞬たりとも休んでいられないので、優れた体力と水泳力が要求される。水球のキーパーがみな、抜群の体格をしているのはそのためだろう。

ソ連ナショナルチームのゴールキーパー、エブゲニー・シャロノフ（24歳）は決して巨人ではないが、長身で、身軽で、しなやかである。グアヤキル（エクアドル）で行われた一九八二年世界選手権大会では最優秀選手に選ばれた。ソ連チームが金メダルを獲得したのも、シャロノフのファインプレーによるところが大きかった。

トップクラスのゴールキーパーになるのは普通、25歳かそれ以上になってからだ。シャロノフがナショナルチームに入ったのは19歳の時。この抜てきをもたらしたのはテクニックのうまさと年不相応の確実で慎重なプレー、この年齢にしては驚くほどよく水球の微妙な点に通じていたことだった。

比較的最近、新しい規則が採択されて、キーパーはゴールから離れて遠くまで行動できるようになった。これはまるで、縛られていたシャロノフの両手を解放したようなものである。シャロノフは自軍のエリア全域でエネルギッシュに行動する最初のキーパーとなった。シャロノフは巧みなタックルを見せ、試合の局面をよくつかんでいて絶妙のパスを出し、一瞬のうちに味方を前方に進めさせる。

だがシャロノフのプレーが特に際立つのはやはりゴールラインでだ。名選



24歳のゴールキーパー、エブゲニー・シャロノフ。一九八cmの長身。



ゴール前は緊張の連続

上　シャロノフの守りの固さには定評がある



手といわれるフォワードが何人、シャロノフの前でおじけづいたことか。一対一の状態になってさえも！　4mラインからのペナルティースローをどれほどシャロノフが阻止したことか！　その回数がきちんと記録されていないのは残念だ。シャロノフは言う——

「ベストを尽くすだけです。ぼくにとって大切なのはチームメイトを助けることであって、ぼく自身がいかにプレーし、どんな評価を受けるか——それは問題ではありません。重要なのはぼくのプレーがチームのプレーを損なわないようにすることです」

オカ河畔のジェルジンスク市（ゴーリキー州）に生まれ育ったシャロノフはずい分早い時期に水球をマスターした。学校友だちに連れられてプールに行ったのが病みつきで、最初は水泳をやっていたが、やがて水球に熱中した。調整のとれた体の動き、長い手、水中での敏しょうさ、鋭い反射神経が備わった少年を見てコーチは、ためらわずにシャロノフをゴールキーパーのポジションに据えた。いいキーパーになる、と見込んだコーチの目は正しかった。

間もなくシャロノフはソ連選手権第2リーグのゴーリキー自動車工場のチーム〝トルペド〟でプレーするようになった。両親は息子が水球をやることに理解を示したが、数学や物理、化学が好きなことを知っていたので工学系の大学に進むよう熱心に勧めた。だがシャロノフは自分の主張を譲らなかった——「コーチになるかどうか、そこまではまだはっきりしていませんでしたが、スポーツがなくてはやっていけないのは確かでした」。こうしてシャロノフは迷わず体育大学を選んだ。

シャロノフはモスクワに出て中央体育大学に入った。入学試験を難なく突破し、大学の授業も軽々とこなした。乗用車を作っているモスクワ小型自動車工場のチーム〝モスクビチ〟でプレーするようになった。ソ連水球界の名キーパーたちのプレーを研究し、長所を探した。だが短所も発見した。練習では、研究して知りつくした先輩キーパーたちのプレーを何とかしのごうと工夫した。モスクワの水球界でこの有能なゴールキーパーのことが口にのぼるようになった。当時不振をかこっていたソ連ナショナルチームのコーチたちがシャロノフに注意を向けるようになった。新任のボリス・ポポフ・コーチはこの学生選手を代表チームに入れることに決めた。

それから4年がたった。この間にシャロノフはソ連ナショナルチームの一員として水球のあらゆるタイトル——五輪チャンピオン、欧州チャンピオン、世界チャンピオンを獲得し、世界カップも2回制した。ないのは国内チャンピオンのタイトルだけだ。トップクラスのチームから何度も勧誘を受けているが、シャロノフは以前からの所属チーム——最高リーグの二流チーム〝モスクビチ〟に相変わらずとどまっている。かつて自分が一流のキーパーになるのを助けてくれたチームを離れる理由はないと思っているからだ。〝モスクビチ〟チームではキーパーの彼に非常に重い負担がかかることが多いのだが、シャロノフは自分の運命を嘆かない。

「もしかするとそれだからこそ、ナショナルチームでしっかりゴールを守れるのかも知れません。うちのチームに浴びせられたシュートの〝砲撃〟の後では、世界選手権でさえボールがたいして怖くなりますから」——とシャロノフは微笑した。

シャロノフはまだ独身。4年間の学生寮生活の後、小ぢんまりしたフラットに移った。もうすぐ体育大学を卒業する。そして、ようやく息子のもとに越して来る決心をした母親を待っているところだ。シャロノフは家事万端を上手にこなす。料理もうまいし、客のもてなし方も堂に入っている。だがそれでも母親には来てもらいたい……

上　独身のシャロノフはキッチンの中でも自由自在。手つきも堂に入ったもの。



母親のアンナと

愛読者クイズ

"あなたはソ連をご存じですか？"

1等賞は10日間の ソ連旅行！

愛読者の皆さん！

恒例の愛読者クイズ"あなたはソ連をご存じですか？"で今年も力だめしをしてみて下さい。

今年も出題は5問。いずれも本誌の読者の方々だけでなく、ソ連や、ソ連の人々の生活、ソ日関係の発展に少しでも関心をお持ちの方ならどなたにでも答えられるものばかり。もちろん、今年の本誌に掲載された記事の中から出題されていますので、読者の方が有利なのは言うまでもないでしょう。

正解者には次の賞が用意されています。

1等（1名） 10日間のソ連旅行（モスクワとソ連15共和国の一つ）にご招待。

2等（2名）
3等（5名） } サモワール（ロシア伝統の湯わかし器）

第1問 今年の3月、ソ連最高の国家権力機関——ソ連最高会議の選挙が行われましたが、このソ連最高会議はどのような議会から成り、代議員の任期は何年ですか？

第2問 今年ソ連では、世界で初めて宇宙に飛んだある人の生誕50周年を祝いました。この人の姓名は？ 世界最初の宇宙飛行が行われたのはいつですか？

第3問 ソ連では新学年が始まるのはいつですか？

第4問 25年前、一九五九年9月15日、世界最初のソ連原子力砕氷船が処女航海に出発しました。この原子力砕氷船の名は？

第5問 今年の10月、ソ日民間人の代表による恒例の会議が開催されます。この会議の開催地、正式名称は？ また今年は何回目になるでしょう？

回答の**締め切り**は一九八四年6月30日（当日消印有効）。回答はハガキで、お一人一通にかぎります。問題の番号と答えのみお書き下さい。

ハガキには必ず氏名（ふりがな）、年齢、性別、職業、住所（郵便番号も）、電話番号をお書き下さい。

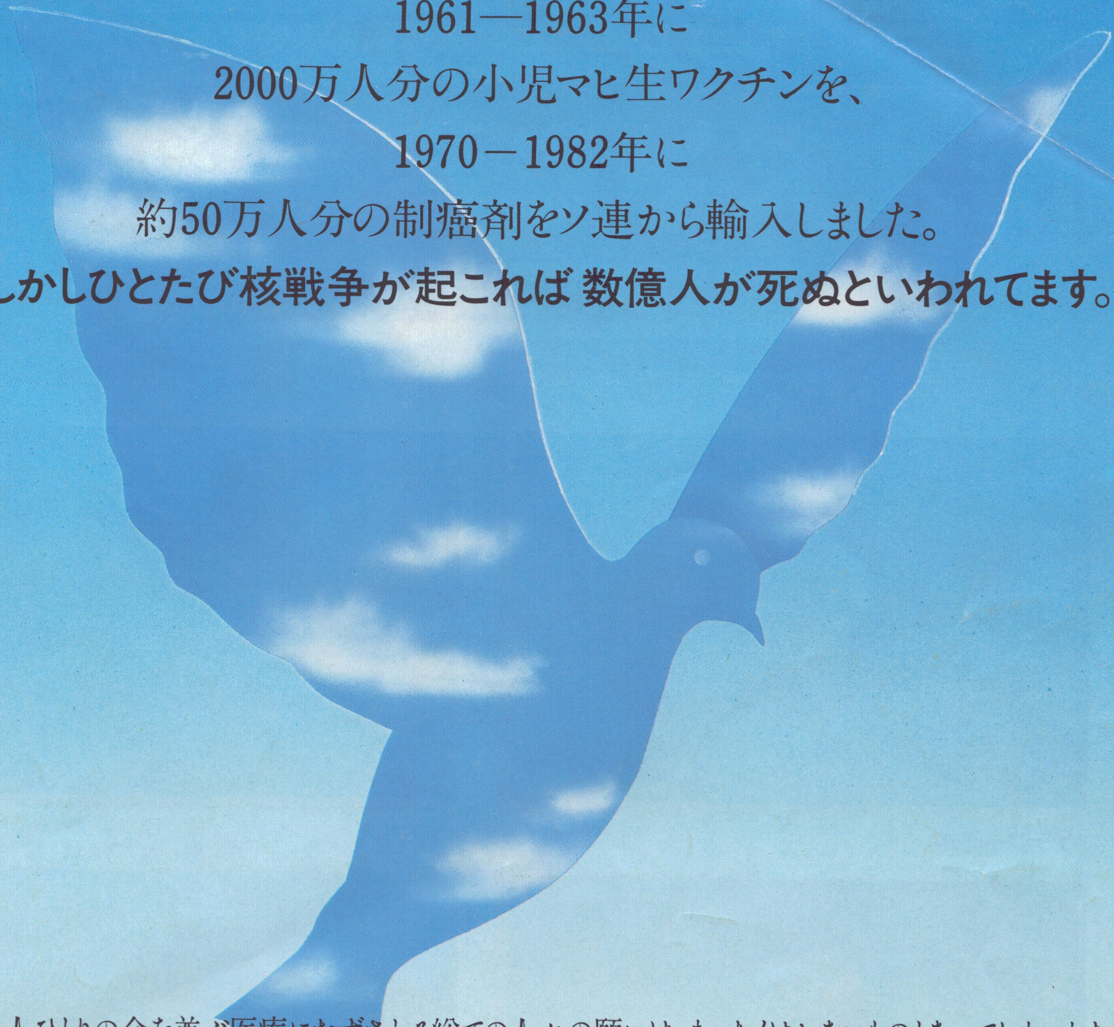
あて先は〒141東京都品川区東五反田3－9－13 ソ連大使館広報部「今日のソ連邦」クイズ係。

結果の発表は、本誌一九八四年8月15日号（第16号）の予定です。

皆さんの回答をお待ちしています。ふるってご応募下さい。

健康と医療に奉仕するイスクラ産業(株)は

1961—1963年に
2000万人分の小児マヒ生ワクチンを、
1970－1982年に
約50万人分の制癌剤をソ連から輸入しました。
しかしひとたび核戦争が起これば 数億人が死ぬといわれてます。



一人ひとりの命を尊ぶ医療にたずさわる総ての人々の願いは、まったくはかないものとなってしまいます。

核兵器根絶を！ 世界に平和を！

中年からのスタミナづくりに エレウテロコック 3000

- 「エレウテロコック」は、酷寒の地・シベリアのタイガ（密林）に自生する、朝鮮人参と同じウコギ科の薬用植物です。
- 本品は、このエレウテロコック・エキスに天然ビタミンEとビタミンCを加え、顆粒状にした新しいタイプの健康食品（エレウテロコック加工食品）です。



- 合成保存料、合成着色料はいっさい使用していません。
- 内容量と定価
  3,000㎎×10袋×3小箱（写真のもの）15,000円
  プラスチック容器入3,000㎎×15袋6,500円もあります。
- お求めは—
  デパート健康食品売場及び有名薬局で発売していますが、お近くでお求めになれない場合は、直接タイシン製薬㈱あてお問い合せください。

今日のソ連邦
一九八四年5月15日号
昭和五十四年六月二日第三種郵便物認可　発行人　加藤宣幸
編集・ソ連大使館広報部（郵便番号141・東京都品川区東五反田3－9－13・電話03・447・3536）
印刷・発行所（株）新時代社（[illegible]）
定価　一五〇円
（購読料は会費に含まれる）